

博士（人間科学）学位論文

家庭の食を介した親子間相互作用の機能と機序

Function and mechanism of interaction between
parent and child through family meal

2009年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

伊東 暁子

Ito, Akiko

研究指導教員： 鈴木 晶夫 教授

はじめに

第1章 先行研究

第1節 食と健康	4
1-1) 疾病と関連するものとしての食	
1-2) 主観的認知に影響を及ぼすものとしての食	
第2節 食と発達	6
2-1) 胎児期・乳児期の食	
2-2) 幼児期の食	
2-3) 児童期の食	
2-4) 青年期の食	
2-5) 老年期の食	
第3節 食と社会	11
3-1) 人間の食行動の特徴と家族の起源	
3-2) 発達における親子関係の影響	
3-3) 家庭の食事が子どもに及ぼす影響	
3-4) 共食の阻害要因	
3-5) 共食推奨論への疑問視	
第4節 食と文化	15
4-1) 比較文化の視点からみた弁当	
4-2) 従来の弁当作りへの関心	
4-3) 近年の弁当作りへの関心	

第2章 問題提起

第1節 問題提起	18
第2節 本研究の目的	19
第3節 言葉の定義	20
第4節 本研究の構成	21

第3章 青年期学生の食態度と親子関係の関連

第1節 本章の目的	23
第2節 研究Ⅰ：食態度および親子関係の関連要因の探索的検討	24
目的	
方法	
結果	
考察	

第3節 研究Ⅱ：食経験と親子関係の関連	37
目的	
方法	
結果	
考察	
第4節 本章の全体考察	47
第4章 幼児期の弁当を介した親子間相互作用	
第1節 本章の目的	49
第2節 研究Ⅲ：養育者の弁当作りの実態	50
目的	
方法	
結果	
考察	
第3節 研究Ⅳ：幼児期の食事（弁当）を介した自己および両親に対する評価形成	64
目的	
方法	
結果	
考察	
第4節 本章の全体考察	73
第5章 総合考察および今後の展望	
第1節 本研究の結果概要	75
第2節 総合考察	75
第3節 今後の課題と展望	80
引用文献	
付表	
謝辞	

はじめに

現代では、輸送手段の進歩とともに、国や季節に関係なく様々な食物を手に入れることができるようになるなど、食をとりまく環境は刻々と変化していると言えるだろう。Stratton (2003) は、近年の我々の日常生活の中で、特に大きな変化を遂げたものとして、家庭の食習慣をあげている。Stratton (2003) はまた、家族がそれぞれ違う時間に異なったものを食べることを当然ととらえるような昨今の風潮は、人間教育に大切な部分の多くを失うとし、子どもにとって「家庭の食事」がいかに重要であるかを主張している。

わが国においても、「孤食（家族がいても一人で食事をする事）」や「個食（個人の好きなものを各々が食べる事）」、「欠食（食事をとらない事）」という言葉が社会的に浸透し、関心を集めている。「個食」や「孤食」と対立する概念として「共食」が注目されるなど、近年では食事を通じて子どもの心身の健全な育成を図る「食育」の立場から家庭の食の重要性が言われている。

食べるということは、単に栄養摂取にとどまらない複雑な行為であるといえよう。親にとって子どもの食事は、栄養を与える場、コミュニケーションの場、文化伝承の場、しつけの場面などの認識もあろう。一方の子どもは親との食事から何を得ているのであろうか。また、その取り入れた「もの」は子どもの成長にどのように関わるのであろうか。家族の食事という場面、家族の食事という行為が本質的にどのような意義を含んでいるのか、またその経験がどのように成長に関わっているのかという問いが本研究の発端である。

本研究では家庭における食事の意義について検討する。まず、食行動に関する先行研究を概観した後、質問紙調査、インタビュー、観察を通して、親子の食事を通じたやりとりと、発達における食事の意義について検討する。

第1章 先行研究

わが国では2005年に食育基本法が制定された。この法律の中で、食は「豊かな人間性をはぐくみ、生きる力を身に付けていくために、何よりも重要なもの」として位置づけられ、食に関する教育を示す言葉である食育は「生きる上での基本であり、教育の三本柱である知育・徳育・体育の基盤となるべきものと位置づけられるとともに、様々な経験を通じて、「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てる」ことが目的とされている。このような食育の推進にあたっては、単に何を食べるかということだけに留まらず、食に関する感謝の念と理解を深めることや、伝統食の重要性や地域の特性を生かした食生活への配慮、自給率向上などの課題にも言及し、地方公共団体や食品関連業者の責務なども項目として挙げられた、幅広い法律である。この食育基本法の制定は、昨今のわが国における食を取り巻く環境の変化に対する警鐘であるとともに、食がいかに関わりの生活と複雑に関連しているのか、その領域の広さと重要性を感じさせるものである。

福田（2000）は食を機能の面から5つに大別している。それは、本来、食の一番の目的であるとされてきた①生命や健康を保持する「生理的機能」を始めとし、②食べ物に栄養以外の付加価値をつけ、それを食べることによって心理面に影響を与える「精神的機能」、③食事を人間関係の媒体ととらえた「社会的機能」、④郷土食や行事食のように人々の願いや祈りを込めた食事にみられるような「文化的機能」、⑤子どもが食習慣を獲得していくためにトレーニングする場としての「教育的機能」の5つである。

これまでの食に関する基礎研究では、方法論的には実験室場面での、動物を用いた比較的短期のものが多く(Meiselman,1992)、咀嚼や嚥下のメカニズム、或いは食物のもつ効能など、生理学と栄養学に重きをおく、食の「生理的機能」に重点を置いたものであった(例えば栗尾, 1999;瀧本・西川,2003など)。また一般的レベルで、より生活に根ざした部分に着目して、食の「文化的機能」「教育的機能」への注目は高まっている。ただし、これらの機能の実証研究は方法論的な難しさから、最近になるまで充分に行なわれていたとは言えない(富田, 1998)との指摘もある。また、食の持つ「精神的機能」や「社会的機能」に関しては、部分的に、摂食障害などの問題行動を扱う分野で検討されてきているが、健康な食行動と発達についての研究が少ないことも指摘されている(中島, 1996)。

近年では「何を食べるか」という生理学・栄養学的見地からだけでなく、「どのように食べるか」という社会学・心理学・行動学的アプローチが行なわれ始めている(吾妻・大野・稲富・田中・太田, 2002)。心理学的なアプローチとしては、大別して生理心理学・神経科学領域、社会心理学領域、学習心理学領域、発達心理学領域、臨床心理

学領域で研究がなされ、心理学のすべての主要領域を占めているといえる(今田,1997)。

今田(1997)は、食行動研究のレビュー論文の中で、研究対象として生物、個体、社会文化の3水準を挙げ、これに発達と臨床・健康の視点を加えた5つの領域から食行動研究を俯瞰することを試みている。このように、今や食に関する研究が様々な水準・領域でなされている上に、それらの間の境界は必ずしも明瞭ではない。そのため、全体像を示すことは困難を極める(Logue,1991;Capaldi,1996;Meiselman & Macfie,1996;今田,1997)が、本章では「健康」、「発達」、「社会」、「文化」の4つの視点から先行研究を概観する。

第1節「食と健康」

人間の基本的な生活を表す言葉として衣食住という言葉がある。このことから分かるように、食事は衣・住とともに人間が生きていく上で最も基本的で、重要な行為である。例えば、「医食同源」・「薬食同源」という言葉に示されるように、食べるという行為は人間の健康に直接関わるものとして古くから重要視されていたと言えるだろう。

現代では、Breslow & James(1980)が挙げた7つの生活習慣、すなわち Never smoking cigarettes, Regular physical activity, Moderate or no use of alcohol, 7-8hrs sleep regulary, Maintaining proper weight , Eating breakfast, Not eating between meals が健康増進のための介入研究における目標として掲げられている。これら7つの習慣のうち2つを占めていることから、食習慣は健康を大きく左右する要因の一つとして考えられる。

1-1)疾病と関連するものとしての食

WHO(1946)における健康の定義、すなわち「Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.」の浸透とともに、近年の健康に関する分野の研究では、単に疾病がないというだけではなく、心理・社会・環境といった多角的な面から健康をとらえる必要性が言われている。しかしながら、実際に研究の対象となるのは、健康に問題を抱えるあるいは関心をもつ一部分のみであることが多い。日本における食行動や健康習慣に関する先行研究に関しても、その対象は栄養学課程のある短期大学や大学の学生（赤松・中井・島井，2001；根本，2003 など）や、ボディイメージの歪みやダイエット行動などの問題が生じやすい女子学生（吾妻・大野・稲富・田中・太田，2002 など）、体調や食生活に問題が生じ始める高齢者（武見，2001；武見・足立，1997 など）を対象としたものが多く、一般の人々を対象とした研究が欠落している（中島，1992；中島，1996）。「健康とは単に疾病のない状態のことではない」としながらも、実際には、病気の発生率は健康状態の大きな指標となっているため、病気の発生率が低い集団に関する研究（川崎，2001；松本，2000；若松・倉上・大町，2002 など）は散見されるに過ぎない。しかしながら、生活習慣病の低年齢化（村田，2005）や、生活習慣が幼少期からの積み重ねであることを鑑みると、問題が表面化する以前から、予防策を講じることは必要であろう。

1-2)主観的認知に影響を及ぼすものとしての食

一言・松見・大竹（2005）は大学生を対象とした調査より、人生満足感の高い者が「向上心」の次に「食事」を重要視していることを示している。また、Westenhoefer & Pudel(1993)の行なった調査によると、調査対象者の半数近くが‘eating’という言葉と‘pleasure’という言葉を結び付けていた。このことから分かるように、今や、人々

にとって食は生理的欲求の充足だけではなく、人間関係形成の場、レクリエーションの一環、美容・健康を左右するなど、多様な意味を持つ。食のもつ多価性が強化子となり得るため、一般に食行動は適切であるなしにかかわらず、きわめて学習されやすい行動の一つであり、いったん学習されると習慣行動として持続し、その修正は困難である(野添, 1989) ともいわれている。近年、健康であるための条件として、主観的に良好な状態(subjective well-being)や生活の質(quality of life)が重視されるようになったことを考慮に入れると、生理的にはもちろん主観的認知にも影響する食が健康に及ぼす影響はきわめて大きいといえよう。

第2節「食と発達」

食事は人間にとって毎日行なわれるものでありながら、子どもの成長段階によって、その様相は大きく変化するものである。ここでは、これまでの研究から、発達段階別に見た食行動の概要をまとめてみたい。

2-1)胎児期、乳児期の食行動

食行動を「栄養素を体内に取り入れること」と定義すると、人の食行動は胎児期から始まっていると言えるだろう。子どもの初期の栄養の取り込みを考える場合、妊娠、授乳という性質上、母子関係が注目されることが多い。胎児は、母親に依存的であり、受動的であると考えられがちであるが、根ヶ山（1996）や生野（2001）、は母親の食行動に胎児の行動や内的状態が影響を与えていることや、母体を通じた間接的な母と子どもの相互作用の可能性を指摘している。これらの研究からは、食を介した母子の相互交渉は子どもの誕生以前から開始される可能性を読み取ることができる。

誕生以降については、根ヶ山（1996）が、離乳期までの食事の特徴として、食べる過程のうちの何らかの部分の部分が養育者によって代行されることを挙げている。ここでは、妊娠・授乳・離乳食・離乳食後という子どもの食発達の段階で、徐々に養育者による負担すなわち代行が軽減していく過程を乳児の食発達であると述べている。またこのような子どもが食物を取り込む作業は、母親あるいは養育者だけによって進めるものではなく、子どもの積極的な関与によって成り立っているものであると述べている。例えば、Birch & Fisher（1996）は、これまで多くの文化で、母親が厳密に授乳の量とスケジュールを管理するよりも、食事の開始や終了を乳児自身に決めさせることを好ましいとされてきたことを挙げ、このことが乳児が自ら積極的に食に関わり、食事量の調節を学習することにつながると述べている。乳児期・離乳期は消化機能の発達、口内の変化、手と目の協調運動に伴う手指の発達とともに、食べる内容・様式・量が劇的に変化する（八倉・村田・森岡・水野・大森・高石、1995）時期ではあるが、食発達はただ単に、食の様式の変容に見られるような食具の扱いの発達や、味覚の形成といった子ども自身の変化・発達だけではなく、養育者との相互交渉という側面からも理解されるべきであることが見て取れるであろう。Wolke,Skuse & Reilly(2006)が、授乳を通して、母親が子どもの空腹や満腹のサインに適切に応じることにより食行動が共有され、この共有の経験が両者の関係性を促進させていると述べているように、乳児期は授乳を通して母親との絆を深める時期であると考えられている（生野、2001）。Chatoor(1991)が「まだ一人で食べることができない子どもに顕在化する、食べることをめぐって生じる問題」をfeeding disorder とし、母子の関係性の障害であると捉えたように、食事（授乳）場面は親子関係を育む場面であるとともに、反映される場面であるといえるかもしれない。乳児期以降、母親および家族のメンバーとの信頼関係を拠点に、子どもが活動範囲を広

げていくことを考慮に入れると、乳児期の食事は子どものその後の発達に、非常に関連の深い役割をしていると言えるだろう。

2-2) 幼児期の食行動

幼児期は手先の器用さの発達とともに、スプーンやフォークなどの道具やコップを使えるようになるなど、自分ひとりで食べられるようになることや、食事習慣の形成が期待されている。また、それまでの母乳や離乳食に比べて、食のバリエーションの幅が拡大する時期である。乳児期から味覚の発達は始まっているが、それに伴う食物の偏好行動も幼児期ではよく観察され、それらに焦点をおいた研究もなされている。

Birch(1980)は、子どもに菓子を与える文脈によって、子どもの菓子に対する嗜好性にも差が出るとしている。さらに Birch(1980)は、自分とは好みが違う集団の中で食事する機会を重ねることによって、子どもの食物に対する好みが変わるなど、社会的文脈が食物の感覚手がかりと連合し、食物の好き嫌いを獲得させることを示している。

Birch & Fisher(1996)は、幼児期の食行動は、従来言われてきたように「枯渇により引き出される」のではなく、文脈、置かれた状況などによって変わりうると述べた。さらに、与えられる文脈などの他には、親のしつけ方や親の食行動スタイルが子どもの食行動すなわち①食事の頻度や、食事間隔②一回の食事あたりの摂取量、③食物選択と関連していることを述べている。

また、八倉・大場・村田・森岡・芦田・大森・水野・高石（1990）が幼児を対象とした研究の中で、母親が問題のある食行動として挙げることの多い偏食や「遊び食べ」が母親の養育態度に関連していることを示している。

これら食物の偏好を含め、幼児期の食行動には、社会的な意味が強まってくるのであり、一方で、この時期の食行動は子どもの置かれた社会環境によって変動するものであることがわかる。観察による家庭での食事場面における母子の相互交渉（外山・無藤，1990）、幼稚園での食事時間における子ども同士の会話の役割の検討（外山，2000）、子どもの発達とともに変化する保育者の食事の介助方法の検討（中澤・鍛冶・石井，1995；河原 2004）などにより幼児を対象とした食事場面の相互交渉の研究が進められているが、幼児の内省に基づいたデータを獲得することは困難であるとの指摘もあり（Simons-Morton & Baranowski,1991; Frank,1991）、子ども自身が食事をどのようにとらえているかを扱う研究、さらにその背景に言及する研究はそれほど充分ではない。

2-3) 児童期の食行動

児童期の食行動は、食事に関わるマナーや食べる技術の習得などを含め、それまでと比較して、より高度な技術を身につけることが課題として想定される。嫌いだったものが食べられるようになるなど大きな嗜好の変化も見られ（長谷川・今田，2001；長谷川・今田・坂井，2001）、それまでの生理的機能を重視した食事概念から、次第に社会

的機能を付与した食事概念を獲得するのもこの時期である（外山，1990）。一方で、今日の社会環境の多様化は、児童の食生活にも少なからず影響をもたらしている。偏食や個食、孤食、朝食の欠食、栄養過剰といった問題や、食事時間を含む生活リズムの乱れ、さらに身体活動量の低下など、生活習慣における問題も生じている（福原・田辺・金子・石井・坂本，2000）。武田（2000）は、現代の若者やニューファミリーの食生活を「5つのご食」という言葉で表している。「5つのご食」とは、一人で食べる「孤食」、家族が家で一緒に食べてもそれぞれが違うものを食べる「個食」、戸外で食べる「戸食」、ダイエットや手軽に食べやすくするための食品のミニ化による「小食」、パンやスパゲッティなどの小麦粉製品が主食となる「粉食」、以上5つである。「5つの食のご食」を挙げると、小学生の食事のスタイルにも大きく関わっている様相が浮かび上がってくる。また、食事のスタイルは今後の食事の習慣とのつながりも大きい。子どもの糖尿病や高脂血症、高血圧などの増加も報告されており、この時期の子どもに、食に関する適切な知識や習慣を身につけさせることが大きな課題となっている。近年では、マスコミやインターネットを介して、子どもは様々な場面で食に関する情報に接しており、親、教師、家族も把握できないところが多い。これらの事情を考慮に入れると、幼い時期から子ども本人に食に関する正しい情報を与えることは重要であると考え、ことに異論は少ないものの、その実際的難しさが今日の食の問題の核であるかもしれない。このような背景から、現在の子どもに対する健康教育や食育への関心が高まっていると考えられる。

2-4) 青年期の食行動

青年期の食行動の特徴には、背景となる生活場面の拡大が反映される。すなわち、児童期・思春期までの家庭を中心とした比較的狭い生活範囲から、学校生活やアルバイトなど活動の場は次第に家庭を離れた広がりを持つようになる。それに伴って食環境も広がり、自分で食べるものを選択する機会も増え、食生活自立の時期を迎える。食に関する経験のレパートリーは増え、「食べる」「栄養摂取」以上の多様な意味が付随するようになると考えられる。

2-4-1) 食物選択と嗜好性

青年期はそれまでの家庭を中心とした食生活から、自ら食物を選択する機会も増加すると考えられる。食物選択、食物嗜好は個人差を規定する心理学的な変数と考えられているため、青年期を対象とした研究が多く進められている。Van Strien, Frijters, Bergers, & Defares (1986) は、食行動を3つのパターンに大別し、外発的摂食、情動的摂食、抑制的摂食の3尺度からなる食行動検査用紙 The Dutch Eating Behavior Questionnaire(以下 DEBQ とする)を開発した。日本でもほぼ同様の項目の日本版 DEBQ(今田, 1994) を用いた研究が行なわれている。

また、Steptoe, Pollard & Wardle(1995)は、食物選択に影響する多くの要因を多次

元的に測定する質問紙 FCQ(Food Choice Questionnaire)を開発した。この調査は、人が普段の生活の中で食物をどのような手がかりや理由によって選択しているか回答を求めた。その結果、9つの因子が見出されたと報告している。その因子とは、健康、気分、手軽さ、感覚的魅力、自然志向、値段、体重コントロール、親交、道徳的配慮であった。様々な要因が食物選択に影響を及ぼし得ることを示す結果である。なお、この質問紙はわが国でも、ほぼ同様の結果となることが報告されている(島井, 1998; 富田・上里, 1999)。

また、食物嗜好については、性別・年齢・収入などの属性により動機が異なることも見出されている(Stephoe et al,1995)。食物選択や嗜好性について研究を行なうことは、個人に適切な食行動変容のプログラム作成や、健康教育・栄養指導に活かすことが可能になると考えられるため、今後ますます研究が盛んに行なわれる分野の一つであろう。

2-4-2) 摂食障害と自己

青年期の食行動研究の中でも特に女子を対象としたダイエット行動や摂食障害に関する研究は長い歴史がある。先行研究では摂食障害患者の特徴の一つとして、ボディイメージ(自分の身体について思い描いた心像)と客観的な身体像の間のズレ、自己認知の歪みを報告した臨床研究が多い(例えば最近では Polivy&Herman, 2002; Striegel-Moore, Franko, Thompson, Barton, Schreiber&Daniels, 2004 など)。その背景として、生育史、中でも家庭環境や社会的因子の影響について言及している研究は多い。例えば Bruch (1973; 1988) は、摂食障害の患者がもつ母子関係の特徴には「母親の過干渉」「母親への依存」「母子間の信頼関係の欠如」があると指摘している。近年の研究では母子関係だけでなく、両親の夫婦関係、患者と兄弟姉妹との関係、あるいは家族内全体の関係、さらにそれを取り巻く社会的背景なども摂食障害に影響を及ぼしているという報告も多くなっている(Okon, Greene, & Smith, 2003)。

一般適応群の若い女性にも節食・過食や、やせ願望、肥満恐怖は多く見られる。摂食障害患者と一般女性のダイエット行動の共通性や連続性を報告している研究も多い(吾妻他, 2002; 中尾・宮城 2001; 向井, 1998)。これらの研究からは、一般適応群の中にも摂食障害と診断するほどは顕著でないにしろ、それまでの親子関係と現在の食事に対する態度に問題を含む潜在的なハイリスク者が存在していると考えられることや、一般適応群と摂食障害群の間には共通した傾向があることが見出されてきている。摂食障害は、青年期の適応障害のうちの一つとして問題視されており、原因解明や治療、さらに予防的介入の効果的な方法を探求することが今後も重要な課題となるだろうと考えられている。

2-5) 老年期の食行動

老年期の食行動は他の段階と比べて極めて異なる位置づけにある。個人差が大きく、

画一的には言えないが、この時期には、生理的機能の低下やそれに伴うライフスタイルの変化が予想される。誕生以来、自立して、滞りなく食事をするを課題として発達してきた食行動であるが、老年期では、これまで当たり前できていたことが加齢による身体機能の変化から制限されてくる時期である。その変化は行動レパートリーの獲得の発達段階とは逆に喪失の過程となる事項が多い。例えば Hetherrington & Rolls(1996)は、通常であれば満腹になればおいしさが低下するが、老年期になるとこの現象が弱まることの原因として感覚の鋭敏性が年齢とともに低下することを挙げている。その心理的影響も他の段階とは、かなり違ってくるであろう。また、他者と共に食べる場面の形態、周囲へ与える影響や相互作用の意味も自ずと異なるものとなるだろう。例えば、池田・浅野・木谷・永田（1991）は家族揃った夕食が減少するほど、高齢者の食料摂取のバランスや量に問題があることを報告している。また、独居高齢者の食生活についても問題は多い。武見・足立（1997）は、独居高齢者を対象とした調査研究を行ない、別居子あるいは友人などとの共食頻度が高いほど、食欲旺盛で、食事内容が良好であること、また、積極性と共食頻度に関連があることを示した。

これまで老年期の食行動研究には、それほど大きな重点が置かれてきたとは言えない。しかし、近年では、高齢社会のための福祉・医療的必要を満たすためのアプローチも盛んになってきている。足立（1981）は、独居あるいは家族と共に暮らすことに関わらず、高齢者自身ができる限り自立的に食生活を営む力を有することは、人間として尊厳を全うする上で重要な条件の一つであると述べている。今後ますます高齢者人口比の高まる我国の現状からは、この分野における研究の進展が強く求められる。

第3節「食と社会」

先行研究からは、食事場面の様相や食の意味合い、および食経験のありかたが、発達に伴って変化することが示唆された。また、前述のように、社会的文脈や環境によって食行動が変化することも指摘されており、食事には早期から社会的意味合いが強いと言える。たとえば、Birch(1980)は対象児を好みがまったく違う子どもと4日間共に食事をさせたところ、食物の好みが変わることを述べている。また、Birch, Zimmerman & Hind(1980)は子どもに菓子を与える際に、子どもが好きな時間に好きなだけ食べるという条件や、決まった時間に食べる条件の子どもに比べて、短い会話とともに保育者から菓子を与えられる条件や、ある行為への報酬として菓子を与えられる条件の子どもの方が、より菓子を好むようになったことを報告している。これらの知見より、食事が及ぼす影響を考える上で、子どもが食物を与えられた文脈や背景を考慮に入れ、検討することが重要であると言える。

これらに加え、食事が毎日繰り返される行為であること、幼少期における食べることをめぐる問題が後年の摂食障害などに関連するという指摘(Marchi M, & Cohen,P, 1990)を考慮に入れれば、幼少期の食に深く関与する養育者や家庭という視点から子どもの食について検討することは重要であろう。ただし、子どもの食事に関する言説は経験論的な側面もあり、家庭における食経験の時期による影響の差などについて実証的に検討をすすめた研究は多くない。

社会的な人間関係の中でも、特に親子関係と食行動に焦点をあてた先行研究について以下に述べる。

3-1)人間の食行動の特徴と家族の起源

萱村(2002)は、人間の食行動が他の動物と明らかな差異を持つことについて三つの特徴を挙げている。そのうちの一つに「共食をすること(一緒に、食物を分かち合って食べること)」がある。共食について山極(1997)は、それを遂行するためには、採集する際、持ち帰る際、分配する際、そして仲間と食べる際に自らの食欲を抑制することが必要であるとし、一部の類人猿のみにしか食物の分類が見られないことから、これらが霊長類にとっていかに困難なことであるかを述べている。その上で、人類が食行為を社会化したことは思考にもとづく精神活動を促し、家族という社会単位を創造する出発点になった可能性について述べている。

また、萱村(2002)の挙げた人間の食行動の三つの特徴の残る二点は、料理をすること、食事作法があることである。石毛(1995)は、料理とは「そのままでは食べられないものを食用可能なものに変化させる」、「そのままでは食べにくいものをより食べやすい状態に変化させる」技術であり、料理がヒトという種の個体数の増大をもたらしたと述べている。すなわち、料理技術を発展させることによって人間の食料資源の種類

が拡大し、子どもや高齢者に適した食事も可能にし、衛生的かつ安全に食べることができるようになったというのである。また、食物の分配をめぐって成立したルールが食事作法の起源であると述べている。

家族の成立についてはいくつかの説があるが、菅野（2002）もまた、「人間の子どもが無力な状態で産まれてくるからこそ、安全な場所の確保と心身の養護を含む親による育児行動が発生するようになった」と述べている。家族は食糧の獲得、持ち帰り、加工、分配、共食によって成立したものである（山極，1994）とも言われており、食事を通して行われる養育、世話、関わり合いなどの一連の手続きは、育児行動においても中心的な過程であるといえるだろう。実際、食事を共にする集団のもっとも基本的な単位が家族であること、発達段階にあわせて食べやすく調理加工した食物を親が子どもに与えること、また家庭での食事経験を重ねて子どもは食事のマナーを身につけていく。すなわち、人間の食の特徴である、料理、共食、食事作法の全てを子どもは家庭の食事で体験していることとなり、家族と食事が人間らしさに寄与する影響の大きさと相互のつながりの強さを感じさせられる。

子どもの心理社会的発達を考える際には、家庭の食経験や家族とりわけ親子関係の要因を考慮することは避けて通ることはできない。

岩村（2003）は現代の食卓とそれを囲む家族について社会学的見地から実態調査を行い、家族や食卓の変容を報告している。その中で岩村は、このような現代の社会や家庭の価値意識に我々がどのように向き合っていくべきかを議論している。青少年の社会的適応的発達と食生活・親子関係との関連を再考する動きも出てきている（川崎，2001）。

3-2)発達における親子関係の影響

親子関係に関する研究としては、母子関係が子どものその後の発達に大きく影響を与えることに注目した調査報告は多数あり（Bowlby, 1951; Parker, 1983）、父親が子どもの発達に与える影響の様相についての研究も、我が国において近年ますます盛んになっている（柏木,1993; 根ヶ山・鈴木,1995; 根ヶ山, 2002）。また、子どもの認知的な発達の側面においても親から受ける影響力の大きさが示されている（東・柏木・Hess, 1981; Black,Hess,& Berenson,2000）。親子関係は子どもが初めて築く社会的な人間関係であり、この両親との対人関係は後の対人社会行動の基盤になると考えられる。

3-3)家庭の食事が子どもに及ぼす影響

足立（2000）や川崎（2001）、Stratton（2003）らは家族との共食が子どもの発達にとって重要であると述べている。他にも、食事中の会話の量や共に食べる頻度と、家族、特に親子の心理的なつながりを指摘した調査もある（岸田・上村，1993；永嶋・坂口・坂口，2001；平井・岡本，2001；平井・岡本，2003）。共食をテーマとした研究の多くは、共食場面では、孤食場面や個食場面などに比べて、摂取品目のバランスが良いこ

とや(足立, 2000), 主観的な健康感が高くなること(Allen, Patterson & Warreen, 1970)などを示し, 一般的な健康イメージに直結するような結果であるといえよう。平井・岡本(2003)は小学生と高校生の家庭を対象として, 食事場面での親子のコミュニケーションの特徴を子どもや父親, 母親がどのようにとらえているのかを検討している。その結果, 父母の6~8割が食事場面を子どもとのコミュニケーションの場であると回答しており, 食事場面での会話の内容や頻度が親子間の心理的結合感と関連するという結果になった。また, 日本国外でも, 古くはAllen et al. (1970)が高校生を対象として, 家族との共食状況と, 食事内容, 主観的健康感, 家族関係との関連を論じている。

Pliner(1983)は親子間での食物の好みの類似性を述べている。Birch & Fisher(1996)は, 養育態度や親の食行動のスタイルが子どもの食行動(食事の頻度や食事間隔, 一回あたりの摂取量, 食物選択)と関連していることを述べている。また, 富岡・丸谷・中保(1997)や若松・倉上・大町(2002)も, 母親の食に対する態度が子どもの食行動へと反映されることを明らかとした。さらに, 山口・春木・原田(1996)は子どもの食生活環境は, 主たる養育者である母親の食行動の影響が大きいと述べている。親子間の好みの類似性については, 懐疑的な主張もなされている(Rozin, 1991)が, 渡辺(2000)が愛着形成の観点から, 母から子どもへの食行動の伝達について述べていることから, 食のある側面において世代間伝播がなされる可能性は否定できない。子どもの食行動を考える上では, 子どもにとって最も身近な家庭の環境を無視することはできないだろう。小林(2003)は, 大学生を対象とした調査で, 過去に経験した「料理者の食に対する自覚」や「料理者の食文化意識」が, 現在の「料理に対する興味および行動」に影響することを示し, 過去の食事体験が現在の食生活に影響することや, 現在の食生活が未来の家庭的な食事に対する意識に影響を及ぼすことを述べている。食事は親の立場からは栄養素を摂取させるということの他に, しつけの意味合いも強いと言えるため, 食事のあり方には養育者の考え方や態度が反映されるだろう。また, 子どもは小さければ小さいほど, 自分で食物を自由に選択するというよりも, 準備された食物の中から摂取するため, 幼少期の食生活は養育者の食生活に依存的であると考えられ, 養育者から受ける影響は大きいと考えられる。

3-4)共食の阻害要因

加藤(1991)は家庭内の共食行動を阻害する要因として, 主婦の有職化や父親不在, 少家族化, 「メディア化によるコミュニケーションの低下」などの社会的背景の要因に加えて, 少子化による子どものペット化, しつけの排除, 家族協力関係の消滅, 親性の機能・能力の低下および生活の知恵の低下など, 直接原因として家庭の従来的な機能低下という方向での変容を考察している。

また, 共食は, 食事を共にする他者のまなざしを意識して営まれる行為であり, 食事を共にする者同士の摩擦を解消し, 食事を円滑に運営するための食べ方に関する様々な

ルールが成立している（石毛，1995）ともいえるだろう。すなわち，共食をするためには他者の意図を推測する能力が必要であると考えられ，この能力の低下を共食行動阻害の要因の一つとする説（外山，2008）もある。

3-5)共食推奨論への疑問視

一方で，「共食は本当に好ましいのか」という疑問に関する実証研究も行なわれ始めている。黒川・小西（1997）の中学生を対象とした研究，表（1991）の幼稚園児を対象とした研究では，食卓に家族全員が揃うことよりも会話があることが重要であるという結果となった。平井・岡本(2003)が，家族で同じ時空間を共にしていても，親子の認知にはずれが起こることや，共食の頻度よりも食事中の会話がより重みのある影響要因となることなどを指摘するように，必ずしも共食することが家族の絆を強めるわけではないという主張もあり，共食の機能についての見解は一致しているとはいえない。近年の食育に関する提言の中では，必ずと言っていいほど「家族一緒に食べること」が目標とすべき項目に含まれており，共食がされるべきこととして推奨され，人々の間に浸透してきたともいえる。しかしながら，家庭の食の機能について再考する必要性があるだろう。

第4節「食と文化」

文化によっても食行動は異なる。それは生活様式や環境の違いに起因するともいえるかもしれない。古くから、主に比較文化研究の分野で、調理方法（田口，1982）や調理道具（石毛，1973）などについてその違いが明らかにされてきた。

Rozin (1996) は「何を食べるか」という食物選択こそが、個人特有の食を築くとし、食物選択に影響を及ぼす変数として大きく4要因を挙げている。すなわち、食物の入手可能性や価格などの「環境（文化）要因」、ボディイメージや好き嫌いなど個人の過去の経験によってつくられる「個人的要因」、公的自己意識などの「対人食事場面での相手からの無意図的な影響」、食べることに對する圧力や食物に関する情報などの「対人食事場面での相手からの意図的な影響」であり、そのそれぞれが社会文化的な影響を受けるものであるとしている。

斉藤（1995）は、同席者による影響に加えて、食物の温度や食器の数、BGMなどの食環境によって、摂取所要時間、箸の運び回数、咀嚼回数、休止時間など食べ方が異なることを実験を通して示している。また、岡本（2005）は同じ盛り付けかたを変えることによって食べ物の見た目を操作し、食物の見た目と美味しさの関連を示している。Meiselman, Heederley, Staddon, Pierson & Symond(1994)はカフェテリアにおける学生の食物選択について実験を行い、食物選択における視覚情報の重要性を報告している。文化が異なるということは、何を食べるか、食卓や食器に関する違いだけにとどまらず、食卓における席順、料理の配膳や食べ方の順序、特定の役割や伝統習慣、食事に関するタブーなどが規定されていることを示す。文化が異なれば、食事の場での人々の行動パターンも様々な様相であることは想像にかたくない。そのため、食行動を研究対象として扱う場合には、その地域・国の食文化の特徴についても理解しておくべきであろう。

わが国においても箸の利用、生魚の摂取、米主食など、特有の食文化があるといえるが、弁当は、内容・形態とともに日本特有のものであるといえるだろう。弁当に関する先行研究は多くないが、栄養面で理想的な弁当内容の検討（小林，1987；針谷・足立，1985）、弁当の変遷（尾鍋，2004）、あるいは国際比較（Rodriguez，2001；岩城，2001，2002；Peak，1991）という視点からの研究が主である。

4-1)比較文化の視点からみた弁当

岩城（2001，2002）は日本にいる留学生（グアテマラ共和国，マリ共和国，フランス，パキスタン，アイスランド，カザフスタン，アイスランドなどが出身地）を対象としてインタビューを行ない、各国の弁当文化について調べているが、それによると日本以外の諸外国には日常的に昼食用に弁当を持参する習慣は少なく、稀に見られるものも昨今の都市化にともなう食生活の変化が原因の昼食携帯である。岩城（2001,2002）の報告からは、日本の弁当文化が歴史や気候、食の環境や居住形態に依存する独自のもの

であることが理解できる。

Rodriguez (2001) もまた、日本に住む外国人や、外国に住む日本人が直面する“bento (弁当)”の問題について驚きをもって詳しく触れている。Rodriguez (2001) は、日本の弁当が比較文化的に見ても非常に手がこんでいるものであり、親と子の重大な関心事となる点でも特異的であることを説明している。さらに Rodriguez (2001) は、日本における弁当および保存容器としての弁当箱の歴史、弁当を作ることそのものに向けられる動機づけなどを記述している。また、Peak (1991) は、弁当が母親と子どもの絆の象徴となっていることを報告している。また、母親が弁当作りのために費やすエネルギーの大きさや、弁当に関する話題が母親間の共通の関心事となるエピソードを示し、弁当が母親自身のやりがいや社会性に関連していると示唆している。

4-2) 従来のお弁当作りへの関心

日本では古くから、ハウツー本や雑誌で特集が組まれるなど、お弁当作りに関する主婦の注目は高かったといえるだろう。小林(1987)はその著書の中で、「お弁当を調へる上に就ての注意」として、「お弁当位何でも腹いっぱいにならばよいと考へるのは、大きな誤りであるのであります。集団生活の環境の中で食べる物は、一定の給与食でない限り、子供各々が食べる物に対して、一種の慰楽と誇りと羞恥と錯綜した、微妙な関心を持つことは非常なもので、家庭で調へて呉れたお弁当に、歓びを期待する子供と、お弁当を開いても、コソコソと隠しながら忙いで食べる子供とは、その情操教育上、自ずから大きな差が生じて、それが精神上に及ぼす影響は、決して尠くないのであります。」と述べている。この記述は、以前からお弁当の内容に関心が持たれており、お弁当が単に栄養摂取するだけの手立てではないことが考えられていたことを示す一方で、その根拠については触れられておらず、子どもの好き嫌いを矯正することが重要視され、栄養成分の働き、調理法に話題は終始している。

4-3) 近年のお弁当作りへの関心

近年では、お弁当作りに対する人々の関心の高まりを示すかのように、見た目こだわりの「お弁当アート」やキャラクターを模した「キャラお弁当」と呼ばれるお弁当作成が一部では流行し、思い通りに色を出す方法や成形する方法などに関する書籍の発売や、インターネット上での情報交換が盛んになされるなど、お弁当作りにも変化が見られる。見た目を重視するお弁当アートやキャラお弁当とは異なり、無添加・無農薬を志向する食材の安全性重視のお弁当作りに関心を注ぐ動きや、栄養バランスやお弁当作りの手早さ、レパートリーの多さに関心を持つ母親もおり、お弁当作りの本やウェブサイトなどは現在かなり豊富であると言える。

このようにお弁当作りの方法に関する情報が溢れる一方で、心理学的な見地からは、お弁当をテーマに扱った研究はほとんどなされていないが、母親の食事に関する意識と実態

の関連を検討する中で、弁当についてふれているものがある（江田，2006；島井・安東，2006；片岡・奥田・大谷，2005）。片岡ら（2005）による調査では、保護者の食への関心度によって、弁当作成の留意点が異なることが示され、子どもの食態度に影響することが示唆された（片岡ら，2005）。しかしながら、弁当作りを担う多くの母親は栄養に関する知識が十分ではないという報告もある（島井・安東，2006；江田，2006）。また、かかる手間や時間が原因で、弁当作りを嫌いあるいは苦手とする母親が半数以上であり（片岡ら，2005；島井・安東，2006），弁当作りを「楽しい」と感じる母親は全体の3%にとどまるという報告もある（片岡ら，2005）。江田（2006）は母親を対象として、弁当作成の際の配慮についても調査しているが、子どもの嗜好や彩りには関心が高いものの、味付けについては低率を示すという結果であった。

弁当づくりに対する意識調査からは、母親が少なからず弁当作りを負担に思っていること、また子どもの弁当についても改善の必要のある状況が浮き彫りにされている。母親の弁当に関するストレスの緩和および、弁当内容に対する意識の改善を図るためには、介入が必要であると思われるが、弁当（延いては食事）の意義について検討することは、このような現状を打開するための方向性を決定する上では必須であろう。

近年では政府主導の食育推進運動の流れの中で、弁当に関する実践報告（作花，2004；愛染，2004 など）や調査報告（針谷・足立，1985）もなされ始めているが、十分とはいえない。その理由としては、方法論的な難しさや弁当が日本特有の文化であることが挙げられるだろう。

第2章 問題提起

第1節 問題提起

前章の先行研究に関する記述では、健康、発達、社会、文化という4つの側面から食行動研究について概観し、食行動における親子関係の重要性と食行動の段階的变化を確認した。これらの先行研究から抽出される問題点を以下に挙げる。

- (1) 従来の食行動研究では、栄養学、生理学、文化人類学、臨床心理学の視点での検討は多いものの、健常群を対象とした食行動の法則性を明らかにする試みが十分ではない。
- (2) その中でも特に、個人に焦点をあててきた傾向があり、家族やその他の人との関係性という立場からの研究が十分になされてこなかった。
- (3) 食事は「心のふれあい」の場であるという概念について実証的な研究はまだ十分ではなく、曖昧な部分が多い。

共食が望ましい食事のスタイルであろうことは、多くの人にとって経験的な共通認識となっていることは想像に難くない。しかしながら調査研究として実証しようとするときに、前述の平井他(2003)の報告のように、食物、場所の共有が必ず親子の絆を成り立たせるわけではないのだとすれば、単に食べ物や場所を共有するという以外に食にはどのような特有の相互交渉があるのだろうか。「親子の（あるいは人と人との）心のふれあい」と私たちが口にするとき、具体的にどのようなプロセスを「ふれあい」であるとしているのであろうか。一般適応群を対象とした検討が求められる。

第2節 本研究の目的

本研究では、子どもが最初に食事を共にする家族という集団に焦点を置き、家庭における食事の意義について検討する。すなわち、本研究では、親が子どもに食事を通して何を与え、そこから子どもは何を受け取っているのかに焦点をあてて検討することを目的とする。

また本研究の特徴として、「弁当」を家庭の食事を特徴づけるものとして注目する。幼稚園や保育園で食べる弁当は、「家で食べる」「家族と同じものを食べる」「家族と一緒に食べる」ということを前提としていないという点において、必ずしも家庭の食と同じではない。しかしながら、その内容や作成方法、弁当の受け渡しの際になされるやりとりなどには各家庭の様子が反映されているものであるといえる。また時空間を共にしない弁当の機能に注目することによって、時空間を共にすること以外の家庭の食の意義について検討できるものと考えられる。

第3節 言葉の定義

本論文において、キーワードとなる「食行動」、「食態度」、「食のスキル」、「食経験」を本研究では以下のように定義し、扱うこととする。

1) 食行動：

生命活動に必要な栄養素を外界から体内に取り込む動作を食行動の主な定義とする。ただし、食の場面での摂取行動だけを対象とするのではなく、その目的を遂行するために伴う行動（食物選択・購入・調理・後片付けなど）をも指すこととする。

2) 食態度：

食行動の決定に対して大きな影響を及ぼす心的要因で経験に基づいて組織化された準備状態。自覚している食行動も含む。

3) 食のスキル：

「スキル」はただ単に、道具を使えるなど手先の技術だけに限定するのではなく、自立した食行動を行なうために身に付けるべき能力を指すこととする。例えば、食習慣の形成、食べる量の自己調節、食事マナーの獲得なども食のスキルであると考えられる。

4) 食経験：

これまでに経験した食行動。過去の習慣的な行動のみならず、食に関する一回限りの経験なども含む。

第4節 本研究の構成

本研究では、子どもの食行動とその背景としての家庭・親子関係に注目し、これらの関係を分析・検討するものである。本論文は、4つの研究から成り立つが、大きく二つに分けている。すなわち、青年期学生を対象として行った調査により、食態度の現状および、その規定要因の探索としての前半部分の第3章（研究Ⅰおよび研究Ⅱ）と、幼少期の食を介した親子の相互作用の親側からの検討（研究Ⅲ）および子ども側からの検討（研究Ⅳ）としての後半部分の第4章である。以下に本研究の構成の概要について説明する。

（第3章 青年期学生の食態度と親子関係の関連の概要）

研究Ⅰでは、大学生の食態度を規定している要因を検討するために、大学生を対象とした調査研究を行った。より具体的には、個人属性、過去および現在の食態度、親子関係に注目し、それぞれの変数間の相関関係および因果関係を検討した。

研究Ⅱでは、食態度を測定する尺度の作成を試みた。研究Ⅰでは、食態度を把握するにあたり、適当な尺度がなかったため、先行研究を参考に項目を収集したものからなる調査を実施したが、論を進めるにあたり、食態度を測定する尺度の必要性和有効性を確信したため、研究Ⅱでは尺度の精査も目的とした。

さらに新たなサンプルを用いて、研究Ⅰで得られた結果をより詳細にわたって比較・検討した。研究Ⅰと大きく異なる点としては、過去の家庭での食経験の一つとして弁当に注目し、調査対象者に対して詳しく想起・回答を求めたことが挙げられる。

（第4章 幼児期の弁当を介した親子間相互作用の概要）

前章での弁当に関する調査の結果を受けて、続く研究Ⅲ、研究Ⅳでは食態度を形成する家庭の食の一形態としての弁当に注目する。

研究Ⅲでは、養育者側にインタビューをすることで弁当作りの実態調査を行ない、親の立場から弁当（食事）が果たす役割について検討した。具体的には、親が弁当をどのようにとらえ、作っているのかについて調べた。

研究Ⅳでは、幼稚園で収集した観察データおよびインタビューデータをもとにして、弁当（食事）が果たす役割について主に子どもの側から検討した。具体的には、子どもが弁当を介して何を受け取り、どのように反応をしているのか、またそれらがどのような発達の意義をもつのかについても検討した。また、前節の結果と重ねあわせ、弁当を介した親子間相互作用について検討した。

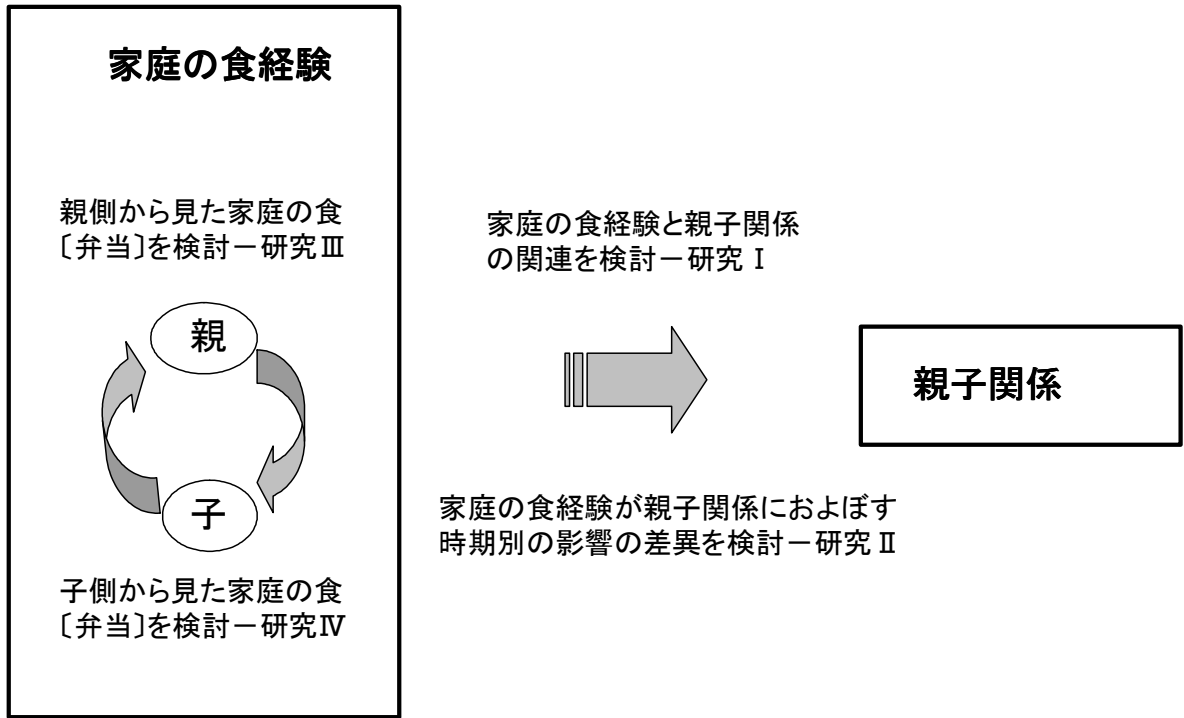


Figure2-1. 研究概要図

第3章 青年期学生の食態度と親子関係の関連

第1節 本章の目的

「食行動」と「親子関係」それぞれについての先行研究は多いが、「親子関係と食行動の関連」に関心をおいている研究はまだまだ少ない。例えば、先にも述べた、摂食障害の人に多く見られる母子関係の分類 (Bruch, 1973; 1988) や、食事中の会話の量 (岸田・上村, 1993; 永嶋・坂口・坂口, 2001) ・共に食べる頻度 (足立, 2000b; 川崎, 2001) を親子関係の指標とした調査などであり、対象者も指標も限られているのが現状である。そこで、本章では一般適応群の大学生を対象として、両親の養育態度や両親への同一化感情を指標とした調査研究 (研究Ⅰおよび研究Ⅱ) を行なう。

子どもが認識する親のあり方や養育態度、親に対する同一化感情や親和感など、両親との心理社会的親子関係、さらに家庭の食に関するライフスタイルを尋ねる調査を実施し、子ども (青年) 自身の発達に家族と家庭の食がどのように関わるか自己認知と関連づけて検討する。今回想定している変数については Figure3-1-1 に示す。

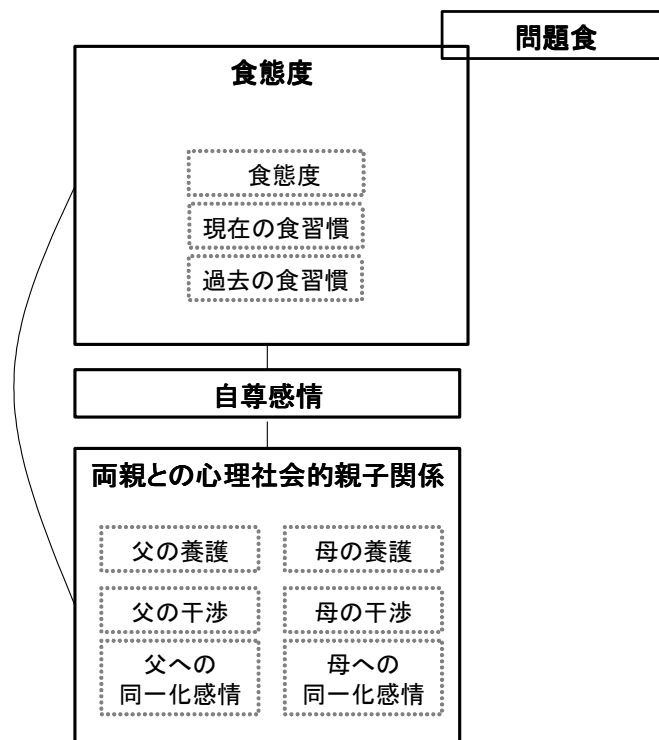


Figure3-3-1. 本研究で想定する食行動モデル

第2節 研究Ⅰ 食態度および親子関係の関連要因の探索的検討

1. 目的

青年期は、それまで親や家庭に主導されていた食生活から、自分で選択・決定する食生活に移行していく発達の時期にあたる。食生活の移行は家庭から友人、学校、職場など社会的な相互交渉に生活の主場面が移ることに相伴する。研究Ⅰでは、青年期学生を対象として、家庭から社会生活への移行期の食生活や、食態度の様相について実態を調査するとともに、親子関係との関連について検討する。

2. 方法

2-1. 調査時期

2003年に質問紙調査を行なった。

2-2. 対象者

東京都内の大学に通う学生に調査協力を依頼した。女子 97名（平均年齢 18.5歳 SD=0.52）を分析対象とした。

2-3. 調査内容

調査内容に含まれる変数は以下のとおりであった。

- ① 食習慣に関する項目： 日常の食習慣、食生活に関する岩村（2003）の文献から食習慣に関する記述を抽出し、質問を 67 項目作成した。回答は、「1 全然あてはまらない」「2 少しあてはまる」「3 どちらでもない」「4 だいたいあてはまる」「5 とてもあてはまる」までの 5 段階で求めた。質問には現在の食習慣に関するもの (EATb) 56 項目、過去の家庭での食習慣に関するもの (EATc) 11 項目が含まれる。
- ② 摂食態度調査票 (Eating Attitude Test 以下 EAT とする) : Garner&Garfinkel (1979) 版からの翻訳を用いた。食に関する 40 項目のそれぞれにおいて、「1 けっして～ない」「2 まれに」「3 時々」「4 しばしば」「5 とてもしばしば」「6 いつも」の 6 段階で回答を求めた。この調査票は摂食障害者のスクリーニング用が開発されたものであり、項目内容は「食べ物が私の人生をコントロールしていると感じる」「食べてしまった後ひどい罪悪感をおぼえる」など食に関する態度や、心のあり方を測定する構成となっている。4 つの反転項目を含む 40 項目の得点を算出する。その際「6 いつも」を 3 点、「5 とてもしばしば」を 2 点、「4 しばしば」を 1 点、それ以下を 0 点として採点し、総合得点は 0 点から 120 点の

範囲内となる。得点が高いほど、食べることを肯定的にとらえることができず、食べることに不安を抱えている態度を示すため食行動危険度が高く、低いほど危険性は低いと推定される指標である。前述の食習慣の項目（EATb, EATc）と区別するため EATa とし、問題食の指標として利用する。

- ③ 自尊感情尺度（Self Esteem Scale 以下 SES とする）：遠藤（1992）による Janis&Field（1959）の日本語版尺度を用いた。自己の能力や価値についての公的、私的評価に関する感情を測定する 23 項目について「1 ほとんど…でない」「2 あまり…でない」「3 どちらともいえない」「4 やや…である」「5 非常に…である」の 5 段階で回答を求めた。3つの反転項目を含む 23 項目の得点を算出する。総合得点は 23 点から 115 点の範囲内となる。点数が高いほど自分を肯定的に感じていることを示す。
- ④ PBI (Parental Bonding Instrument) (Parker, 1979 ; 北村・鈴木 ; 1986) 日本語版： 回答者が 16 歳以前に親からどのような養育を受けたのかについて評定を求める。親の養育態度に対する子どもの認識を測るものである。養護 care と干渉 protection の項目を測定することができる。12 項目の養護 care と 13 項目の干渉 protection 計 25 項目において「1 全く該当しない」「2 あまり該当しない」「3 やや該当する」「4 該当する」の 4 段階で回答を求めた。評定は父、母の両方について求めた。養護と干渉の点数は高いほど、養育においてその傾向が高かったとする。
- ⑤ 親に対する同一化感情尺度(以下 IMG とする) (竹内・鈴木, 2000)： 回答者が現在、両親とどのような親子関係を持っているかについて評定を求める。両親に対する同一化感情、親密さ、憧れ、尊敬などを測るものである。20 項目について「1 全く該当しない」「2 あまり該当しない」「3 やや該当する」「4 該当する」の 4 段階で回答を求めた。評定は父親・母親のそれぞれについて求めた。総合得点は 80 点満点となる。点数が高いほどその傾向が高いとする。

3. 結果

調査に協力した学生からは「日頃の食生活について考え直す機会となった」「あまり健康的ではない食生活をしているので、これからはもっと注意しようと思った」などの感想が寄せられた。

3-1. 食習慣(EATb, EATc)の調査

3-1-1. 食習慣(EATb, EATc)に関する項目の回答率

日常の食習慣に関する68項目について「1 全然あてはまらない」「2 少しあてはまる」「3 どちらでもない」「4 だいたいあてはまる」「5 とてもあてはまる」までの5段階で回答を求めた。各項目について平均得点を求め、降順に項目を並べ替えた回答率分布をFigure3-2-1に示す。

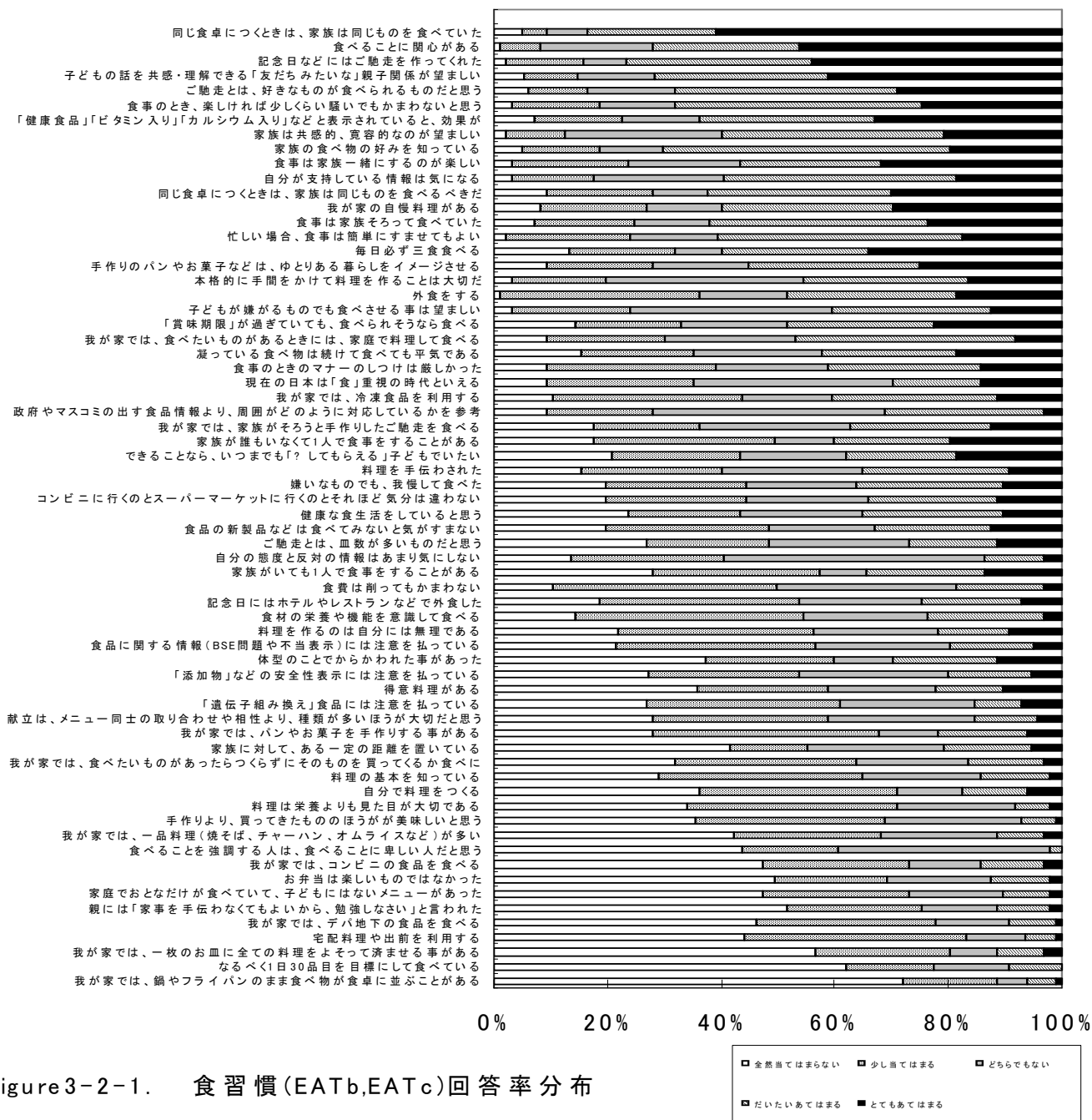


Figure3-2-1. 食習慣(EATb,EATc)回答率分布

平均得点の高い項目を見ると「EATc1 同じ食卓につくときは、家族は同じものを食べていた」「EATb5 食べることに関心がある」「EATc11 記念日などにはご馳走をつくってくれた」という一般的に望ましいと考えられる食習慣であった。また、「EATb24 ご馳走とは、好きなものが食べられるものだと思う」「EATb56 食事のとき、楽しければ少しくらい騒いでもかまわないと思う」などの項目の平均得点が高い。平均得点の低い項目は「EATb48 我が家では、鍋やフライパンのまま食べ物が食卓に並ぶことがある」「EATb11 我が家では、一枚のお皿に全ての料理をよそって済ませることがある」「EATb51 宅配料理や出前を利用する」「EATb54 我が家ではデパ地下の食品を食べる」など外食や料理にかける手間に言及する項目が挙がっている。「EATb50 なるべく1日30品目を目標にして食べている」という項目の平均得点も低い。

3-1-2. 食習慣 (EATb, EATc) の分析

食習慣の項目 (EATb, EATc) への回答について主因子解バリマックス回転による因子分析を行なった (Table3-2-1 参照)。

項目	因子									共通性
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
現代の自由な食卓 (α = .300)										
EATb25 家族がいても1人で食事をする	0.621	0.012	-0.122	0.119	0.183	0.049	0.227	-0.145	0.076	0.545
EATb45 家族が誰もいなくて1人で食事をする	0.585	0.003	0.149	0.100	0.183	0.159	0.076	-0.047	-0.209	0.508
EATb16 我が家では、食べたいものがあつたらつらずにそのものを買ってくるか食べに行く	0.540	0.073	-0.278	0.160	0.097	0.141	0.278	-0.119	0.275	0.654
EATc5 家庭でおとなだけが食べていて、子どもにはないメニューがあつた	0.534	0.078	0.231	0.088	-0.046	-0.041	-0.047	0.053	0.013	0.366
EATc8 食事は家族そろって食べていた	-0.533	0.142	0.170	0.032	0.092	0.125	-0.138	0.096	0.000	0.512
EATb12 食事は家族一緒にするのが楽しい	-0.527	0.223	0.004	0.098	0.147	0.090	0.014	-0.063	-0.094	0.394
EATb46 家族に対して、ある一定の距離を置いている	0.504	0.098	-0.014	-0.196	-0.058	0.078	0.124	-0.142	0.086	0.385
EATb2 家族の食べ物の好みを知っている	-0.487	0.309	0.191	0.254	0.090	0.217	-0.098	0.074	0.191	0.540
EATb14 我が家では、コンビニの食品を食べる	0.482	0.028	-0.328	0.279	-0.106	0.048	0.068	-0.082	0.182	0.486
EATb27 我が家では、冷凍食品を利用する	0.465	0.031	-0.289	0.184	0.171	-0.242	-0.393	-0.128	0.143	0.615
EATb54 我が家では、デパ地下の食品を食べる	0.419	-0.237	-0.223	0.207	0.099	0.139	-0.021	0.254	-0.035	0.421
EATb1 我が家の自慢料理がある	-0.417	0.293	0.060	0.173	0.008	-0.028	0.002	0.375	0.036	0.537
食情報の敏感さ (α = .596)										
EATb18 自分が支持している情報は気になる	0.102	0.676	-0.015	-0.021	-0.023	0.041	0.107	0.064	-0.109	0.502
EATb6 「健康食品」「ビタミン入り」「カルシウム入り」などと表示されていると、効果がありそうに思う	-0.041	0.548	0.010	0.219	0.028	0.025	0.018	-0.057	0.167	0.383
EATb35 本格的に手間をかけて料理を作るとは大切だ	-0.046	0.545	0.099	-0.042	0.158	-0.012	-0.074	0.182	-0.008	0.418
EATb10 食品に関する情報 (BSE問題や不当表示) には注意を払っている	-0.100	0.417	0.418	-0.083	-0.113	0.197	-0.020	0.221	0.367	0.610
食事のしつけ (α = .432)										
EATc3 料理を手伝わされた	0.138	0.055	0.667	0.010	0.098	0.224	-0.199	-0.115	0.052	0.583
EATc7 食事のときのマナーのしつけは厳しかった	-0.112	0.030	0.450	-0.058	-0.027	0.085	0.072	-0.004	-0.005	0.233
EATc6 体面のごとでからかわれた事があつた	0.037	-0.015	0.419	0.318	-0.143	0.051	0.104	-0.307	-0.189	0.493
食の道具化 (α = .496)										
EATb37 忙しい場合、食事は簡単にすませてもよい	0.140	0.372	0.059	0.555	0.128	-0.017	0.258	0.159	0.051	0.584
EATb13 外食をする	0.057	-0.012	-0.014	0.531	0.098	0.099	0.005	-0.101	-0.174	0.360
EATb3 食品の新製品などは食べてみないと気がすまない	-0.073	0.110	0.066	0.456	-0.053	-0.013	0.085	0.090	0.209	0.301
食のコミュニケーション (α = .564)										
EATb32 家族は共感的、寛容的なのが望ましい	-0.240	0.236	-0.066	0.146	0.650	0.039	-0.218	0.085	-0.202	0.659
EATb26 子どもの話を共感・理解できる「友だちみたいな」親子関係が望ましい	0.094	0.094	-0.146	0.006	0.556	0.188	-0.056	-0.016	0.187	0.426
EATb56 食事のとき、楽しければ少しくらい騒いでもかまわないと思う	0.055	0.221	-0.141	0.135	0.533	0.074	0.276	0.010	0.116	0.492
EATc2 記念日にはホテルやレストランなどで外食した	0.005	-0.077	0.364	0.058	0.514	-0.055	0.035	0.019	0.072	0.421
料理を作る (α = .629)										
EATb40 料理の基本を知っている	0.087	-0.165	0.046	0.155	-0.093	0.630	0.012	0.205	0.158	0.541
EATb33 自分で料理をつくる	0.158	0.128	0.063	-0.015	0.104	0.530	0.026	-0.102	-0.002	0.355
EATb53 得意料理がある	-0.203	0.111	0.144	-0.012	0.157	0.512	-0.042	-0.041	-0.049	0.369
見た目 (α = .433)										
EATb30 手作りより、買ってきたもののほうが美味しいと思う	0.179	0.018	0.052	-0.023	-0.007	-0.023	0.583	-0.157	-0.108	0.436
EATb7 ご馳走とは、皿数が多いものだと思う	-0.025	0.139	-0.089	0.285	0.048	-0.002	0.474	0.065	0.037	0.349
EATb19 料理は栄養よりも見た目が大切である	0.128	-0.062	0.148	0.056	0.278	-0.247	0.444	0.095	0.000	0.422
食と健康 (α = .507)										
EATb23 健康的な食生活をしていると思う	-0.265	0.081	-0.009	-0.027	0.101	0.005	0.076	0.555	-0.007	0.504
EATb31 毎日必ず3食食べる	-0.193	0.046	-0.133	-0.115	0.141	-0.033	-0.012	0.551	-0.183	0.438
EATb29 「添加物」などの安全性表示には注意を払っている	0.106	0.186	0.258	-0.015	0.009	-0.106	-0.187	0.491	-0.020	0.403
実用本位 (α = .507)										
EATb48 我が家では、鍋やフライパンのまま食べ物が食卓に並ぶことがある	0.102	-0.043	-0.067	-0.013	0.073	-0.077	0.064	-0.240	0.751	0.655
EATb44 食材の栄養や機能を意識して食べる	0.106	0.295	0.050	0.049	0.068	0.238	-0.069	0.097	0.467	0.450
EATb41 我が家では、一枚のお皿に全ての料理をよそって済ませる事があつた	0.215	-0.049	-0.023	0.223	0.234	0.030	-0.060	-0.214	0.435	0.399
EATb15 食べることを強調する人は、食べることに卑しい人だと思う	0.031	-0.071	0.176	-0.094	0.077	-0.175	0.059	0.053	0.428	0.304
累積寄与率 (%)										
7.112 12.181 16.274 20.344 24.360 28.303 31.989 35.460 38.928										

主因子法バリマックス回転

食習慣尺度は9因子までで38.9%の累積寄与率を示した。第1因子は「EATb25 家族がいても一人で食事をすることがある」、「EATb16 我が家では、食べたいものがあつたらつくらずにそのものを買ってくるか食べに行く」などの12項目の因子負荷が大きく、家族のそれぞれが気ままに食事することを示す「現代の自由な食卓（求心力の無い家庭の食卓）」の因子と考えられる。第2因子は「EATb18 自分が支持している情報は気になる」、「EATb6 『健康食品』『ビタミン入り』『カルシウム入り』」などと表示されていると、効果がありそうに思う」など食の情報に関する4項目の因子負荷が大きく「食情報の敏感さ」の因子と考えられる。第3因子は「食事のしつけ」の因子、第4因子は食事をなるべく簡便化することを表す「食の道具化」の因子、第5因子は食事の場面でのやりとりを通じた親子関係を表す「食のコミュニケーション」の因子、第6因子は自分で料理をつくることができるかどうかを示す「料理をつくる」因子、第7因子は料理の見た目を重視する「見た目」の因子、第8因子は食を通して健康に配慮する「食と健康」の因子、第9因子は食事に伴う手間・暇をかけない「実用本位」の因子と考えられる。

Cronbach の信頼性係数は全体で ($\alpha = .731$) であり、各々では「現代の自由な食卓（求心力の無い家庭の食卓）」($\alpha = .300$)、「食情報の敏感さ」($\alpha = .596$)、「食事のしつけ」($\alpha = .432$)、「食の道具化」($\alpha = .496$)、「食のコミュニケーション」($\alpha = .564$)、「料理を作る」($\alpha = .629$)、「見た目」($\alpha = 0.433$)、「食と健康」($\alpha = .507$)、「実用本位」($\alpha = .553$)であった。下位尺度得点は、それぞれの項目の得点を合計し、含まれている項目数で割ったものであるとする。

3-2. 自尊感情 (SES), 親の養育態度 (PBI) と食習慣 (EATa, EATb, EATc) との相関

3-2-1. 自尊感情 (SES), 親の養育態度 (PBI), 親に対する同一化感情 (IMG), 問題食 (EATa) の基本統計量

得点を算出した問題食 (EATa), 自尊感情 (SES), また PBI の父親・母親それぞれの養護 (CARE) と干渉 (PROT), および父や母との同一化感情 (IMG) の各得点の基本統計量を求め、Table3-2-2 に示す。

Table3-2-2. 問題食(EATa)、自尊感情(SES)、PBIとIMG
による親に関する諸変数の基本統計量

	平均値	標準偏差
問題食(EATa)	37.44	10.450
自尊感情(SES)	53.14	14.997
父-養護(FCARE)	22.56	5.023
父-干渉(FPROT)	13.24	6.374
母-養護(MCARE)	23.26	5.002
母-干渉(MPOT)	13.59	6.561
父-同一化(FIMG)	30.32	12.755
母-同一化(MIMG)	38.86	11.893

3-2-2. 自尊感情 (SES), 親の養育態度 (PBI) と親に対する同一化感情 (IMG), 問題食 (EATa)間の相関

自尊感情(SES)総合点, 問題食(EATa)の得点, PBI より父の養護(FCARE)・干渉(FPROT)得点, 母の養護(MCARE)・干渉(MPROT)得点間の相関係数 r を Table3-2-3 に示す。

Table3-2-3. 自尊感情(SES)、問題食(EATa)、養育態度(PBI)間の相関

	自尊感情 (SES)	父-養護 (FCARE)	父-干渉 (FPROT)	母-養護 (MCARE)
問題食(EATa)	-0.271 **			
父-干渉(FPROT)		-0.321 **		
母-養護(MCARE)		0.499 **	-0.202 *	
母-干渉(MPROT)		-0.203 *	0.550 **	-0.269 **

* $p < .05$, ** $p < .01$

自尊感情(SES)と問題食(EATa)の間に有意な相関が見られた ($r = -0.271$, $p < .01$, $n=97$)。また, 父母の養護(CARE)・干渉(PROT)はいずれの組み合わせでも5%未満で有意に高い相関が見られた。自尊感情(SES)と父母の養育態度(PBI)の間には有意な相関は見られなかった。問題食(EATa)も父母の養育態度(PBI)との間には有意な相関が見られなかった。

次に、食習慣項目 (EATb と EATc) のそれぞれについて親の養育態度 (PBI)、自尊感情 (SES) との相関を求めた。有意に相関の高い項目を Table3-2-4 に示す。父の干渉 (FPROT) は食習慣項目の「EATb22 我が家では、一品料理が多い」、「EATb24 ご馳走とは好きなものが食べられるものだと思う」、「EATb28 子どもが嫌がるものでも食べさせる事が望ましい」などと負の相関を示した ($r = -0.264 \sim r = -0.213$)。

Table3-2-4. 養育態度(PBI)と食習慣(EATb,EATc)との相関

項目	自尊感情 (SES)	父-養護 (FCARE)	父-干渉 (FPROT)	母-養護 (MCARE)	母-干渉 (MPROT)
EATb7 ご馳走とは、皿数が多いものだと思う	-0.272 **				
EATb15 食べることを強調する人は、食べることに卑しい人だと思う		-0.274 **			
EATb16 我が家では、食べたいものがあつたらつらずにそのものを買ってくるか食べに行く				-0.203 *	
EATb17 食費は削ってもかまわない	-0.259 *				
EATb18 自分が支持している情報は気になる	-0.269 **				
EATb22 我が家では、一品料理(焼そば、チャーハン、オムライスなど)が多い			-0.264 **		
EATb24 ご馳走とは、好きなものが食べられるものだと思う			-0.213 *		
EATb26 子どもの話を共感・理解できる「友だちみたいな」親子関係が望ましい	0.204 *				
EATb28 子どもが嫌がるものでも食べさせる事は望ましい			-0.233 *		-0.216 *
EATb34 我が家では、食べたいものがあるときには、家庭で料理して食べる	0.207 *				
EATb36 政府やマスコミの出す食品情報より、周囲がどのように対応しているかを参考にする			-0.220 *		
EATb42 手作りのパンやお菓子などは、ゆとりある暮らしをイメージさせる	-0.220 *				
EATb53 得意料理がある	0.271 **				
EATb54 我が家では、デパ地下の食品を食べる			-0.211 *		

* $p < .05$, ** $p < .01$

自尊感情 (SES) との間に有意な相関を示す項目は 7 項目ある。即ち、「EATb7 ご馳走とは、皿数が多いものだと思う」 ($r = -0.272, p < .01, n = 97$), 「EATb17 食費は削ってもかまわない」 ($r = -0.259, p < .05, n = 96$), 「EATb18 自分が支持している情報は気になる」 ($r = -0.269, p < .01, n = 96$), 「EATb26 子どもの話を共感・理解できる『友だちみたいな』親子関係が望ましい」 ($r = 0.204, p < .05, n = 95$), 「EATb34 我が家では、食べたいものがあるときには、家庭で料理して食べる」 ($r = 0.207, p < .05, n = 96$), 「EATb42 手作りのパンやお菓子などはゆとりある暮らしをイメージさせる」 ($r = -0.220, p < .05, n = 96$), 「EATb53 得意料理がある」 ($r = -0.271, p < .01, n = 95$) である。父の干渉得点 (FPROT) と有意に高い相関を示した項目は「EATb22 我が家では、一品料理 (焼きそば, チャーハン, オムライスなど) が多い」 ($r = -0.264, p < .01, n = 95$), 「EATb24 ご馳走とは、好きなものが食べられるものだと思う」 ($r = -0.213, p < .05, n = 95$), 「EATb28 子どもが嫌がるものでも食べさせることは望ましい」 ($r = -0.233, p < .05, n = 94$), 「EATb36 政府やマスコミの出す食品情報より、周囲がどのように対応しているかを参考にする」 ($r = -0.220, p < .05, n = 95$), である。また「EATb28 子どもが嫌がるものでも食べさせることは望ましい」は父と母の干渉 (FPROT と MPROT) で有意に高い相関 ($r = -0.233, p < .05, n = 94$) ($r = -0.216, p < .05, n = 95$) を示した。

3-2-3. 両親との心理社会的関係と食習慣の関係

父母に対する同一化感情(FIMGとMIMG)と食習慣(EATbとEATc)についての相関係数を算出し、5%未満で有意な相関が見られた項目をTable3-2-5に示す。父母のどちらについても1%未満で有意な相関が見られる項目は5項目で、そのうち「EATb1 我が家の自慢料理がある」「EATb2 家族の食べ物の好みを知っている」「EATb12 食事は家族一緒にするのが楽しい」「EATc8 食事は家族そろって食べていた」が正の相関を示し、「EATb46 家族に対して、ある一定の距離を置いている」が負の相関を示した。

Table3-2-5. 同一化感情(IMG)と食習慣(EATb,EATc)との相関

	父・同一化感情	母・同一化感情
EATb1 我が家の自慢料理がある	0.316 **	0.311 **
EATb2 家族の食べ物の好みを知っている	0.284 **	0.334 **
EATb4 我が家では、家族がそろって手作りしたご馳走を食べる	0.261 *	
EATb12 食事は家族一緒にするのが楽しい	0.466 **	0.420 **
EATb17 食費は削ってもかまわない	-0.267 *	-0.250 **
EATb25 家族がいても1人で食事をすることがある	-0.225 *	-0.270 **
EATb27 我が家では、冷凍食品を利用する	-0.259 *	
EATb30 手作りより、買ってきたもののほうが美味しいと思う		
EATb32 家族は共感的、寛容的なのが望ましい 我が家では、食べたいものがあるときには、家庭で料理して食べる		0.272 **
EATb34 コンビニに行くのとスーパーマーケットに行くのとそれほど気分は変わらない	0.311 **	0.217 *
EATb38 気分は変わらない		
EATb46 家族に対して、ある一定の距離を置いている	-0.274 **	-0.507 **
EATb54 我が家では、デパ地下の食品を食べる	-0.297 **	
EATb56 う		
EATc2 記念日にはホテルやレストランなどで外食した	0.208 *	
EATc4 お弁当は楽しいものではなかった 家庭でおとなだけが食べていて、子どもにはないメニューがあった		-0.365 **
EATc5 があった	-0.210 *	
EATc8 食事は家族そろって食べていた	0.308 **	0.339 **

* p<.05, ** p<.01

父への同一化感情(FIMG)高群と低群との間で食習慣(EATb と EATc)に関する項目の平均値の差の検定 (t -test) を行った。なお、高群と低群は FIMG 得点の平均値によって分別した。父への同一化感情(FIMG)の高群と低群の間では、「EATb14 我が家では、コンビニの食品を食べる」($t = -2.55, df = 79.5, p = .013$), 「EATb27 我が家では冷凍食品を利用する」($t = -2.10, df = 87, p = .038$), 「EATb54 我が家ではデパ地下の食品を食べる」($t = -2.69, df = 87, p = .009$) の項目で FIMG の高群の平均値が有意に低く、「EATb1 我が家の自慢料理がある」($t = 2.23, df = 88, p = .028$), 「EATb12 食事は家族一緒にするのが楽しい」($t = 3.52, df = 88, p = .001$), 「EATb34 我が家では、食べたいものがあるときには、家庭で料理して食べる」($t = 3.28, df = 87, p = .001$), 「EATc8 食事は家族そろって食べていた」($t = 2.36, df = 88, p = .002$) 「EATc3 料理を手伝わされた」($t = 2.79, df = 88, p = .006$) の項目で FIMG の高群の平均値が有意に高い。

母への同一化感情(MIMG)高群と低群との間で食習慣に関する項目の平均値の差の検定 (t -test) を行った。なお、高群と低群は MIMG 得点の平均値によって分別した。母への同一化感情(MIMG)の高群と低群の間では、「EATb25 家族がいても一人で食事をすることがある」($t = -1.99, df = 90, p = .049$), 「EATc4 お弁当はあまり楽しいものではなかった」($t = -3.74, df = 81.27, p < .000$) の項目で MIMG の高群の平均値が有意に低く、「EATb1 我が家の自慢料理がある」($t = 3.08, df = 75.6, p = .003$), 「EATb2 家族の食べ物の好みを知っている」($t = 4.33, df = 70.1, p < .000$), 「EATb12 食事は家族一緒にするのが楽しい」($t = 3.72, df = 91, p < .000$), 「EATb23 健康な食生活をしていると思う」($t = 2.39, df = 91, p = .019$), 「EATc9 食事のときのマナーのしつけは厳しかった」($t = 2.623, df = 89.5, p = .010$), 「EATc8 食事は家族そろって食べていた」($t = 3.03, df = 91, p = .003$) の項目で MIMG の高群の平均値が有意に高い。

3-3. 自尊感情 (SES), 両親への同一化感情 (IMG) と食習慣 (EATb, EATc) との関わり

3-3-1. 食習慣 (EATb, EATc) と同一化感情 (IMG) の関わり

父母それぞれへの同一化感情 (FIMG, MIMG) を従属変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行なった。独立変数は食習慣 (EATb, EATc) の各項目である。

二つの分析の結果、標準偏回帰係数が 1% 水準で有意になったパスをまとめて Figure3-2-2 に示す。

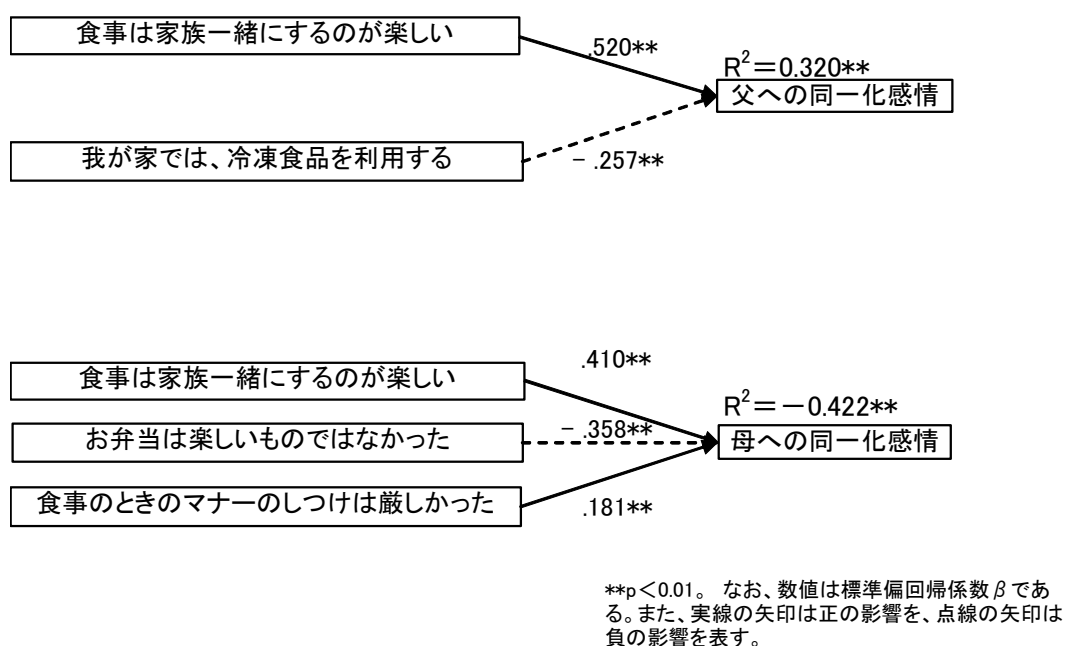


Figure3-2-2. 食習慣が父母への同一化感情へ与える影響を示すパス・ダイアグラム

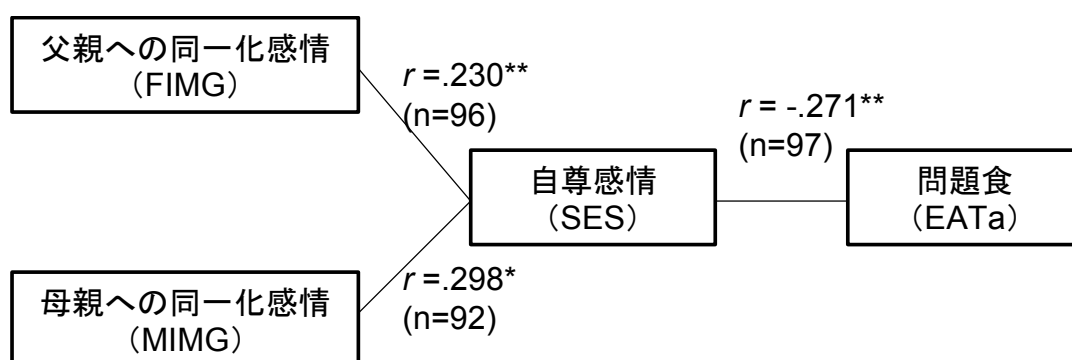
まず、父親への同一化感情 (FIMG) を従属変数として重回帰分析を行なったところ、「食事は家族一緒にするのが楽しい」と「我が家では冷凍食品を利用する」の 2 項目が選出された ($R^2=0.327$, $p<.01$)。「食事は家族一緒にするのが楽しい」からは、父親への同一化感情 (FIMG) への正のパスが示された ($\beta=0.520$, $p<.01$) また、「我が家では冷凍食品を利用する」からは、父親への同一化感情 (FIMG) への負のパスが示された ($\beta=-0.257$, $p<.01$)。

次に、母親への同一化感情 (MIMG) を従属変数として重回帰分析を行なったところ、「食事は家族一緒にするのが楽しい」、「お弁当は楽しいものではなかった」、「食事のときのマナーのしつけは厳しかった」が選出された ($R^2=0.422$, $p<.01$)。「食事は家族一緒にするのが楽しい」「食事のときのマナーのしつけは厳しかった」から母親への同一化感情 (MIMG) へは正のパスが示された ($\beta=0.410$, $p<.01$) ($\beta=0.181$, $p<.01$)。また、

「お弁当は楽しいものではなかった」からは、母親への同一化感情(FIMG)への負のパスが示された ($\beta = -0.358, p < .01$)。

3-3-2. 自尊感情(SES), 両親への同一化感情(IMG), 問題食(EATa)の関わり

自尊感情尺度, 両親との関係を表す諸変数と問題食(EATa)間の相関係数 r を算出した。変数間に有意な相関が算出されたもの ($p < .05$) を残し, 相関関係を一覧するために, Figure3-2-3 を示す。父母への同一化感情(IMG)が自尊感情(SES)の間には負の相関が見られた。また, 自尊感情は問題食(EATa)と負の相関が見られた。



(r : ピアソンの相関係数 $**p < 0.01$ $*p < 0.05$)

Figure3-2-3. 同一化感情(IMG)、自尊感情(SES)、問題食(EATa)間の関連ダイアグラム

4. 考察

昨今のライフスタイルの変化により, 食のライフスタイル(食習慣)も変化を遂げていると報告している調査研究が多い(例えば岩村, 2003 など)。今回は, 青年期女子の食習慣と食に対する態度の現状を把握する目的で調査を行なった。さらに, 子ども自身の自尊感情や, 子どもが認識するこれまでの親子関係, 親に対する同一化感情などとの関わりを検討した。親子関係や親に対する同一化感情と食習慣の関わり, 自尊感情と親子関係・親に対する同一化感情, 食習慣, 問題食の関わりについて以下に考察する。

4-1. 青年期学生の食習慣の実態について

食習慣についての回答率の上位に, 家族一緒に健康的な食事を楽しむ様子を示唆する項目が集まり, 健康上問題と考えられるような食習慣に関する項目は下位に集積した。栄養に関する知識や, 自発的な調理行動に関する項目に「とてもあてはまる」, 「だいた

いあてはまる」と答えた学生は少ない。このことから、今回の調査対象者においては、「現在、自分では自発的に調理に携わらないが、家族によって健康的な食生活が支えられている」と考えている者が多いことが示唆された。

今回の試行的調査からは、「手間や時間やお金をかけない食事」が低い自尊感情と関連していることも示唆された。食事にどのような「コスト」をかけ得るかには個人差があるので一概には言えないが、食を相対的に重要と位置づける態度は健康な心身の発達の実現に望ましいと考えられる。

4-2. 心理社会的親子関係と食習慣の関連について

今回の結果から、家族の食事の場についてのイメージをまとめると以下になるだろう。即ち、家族と一緒に食事を楽しむのは「互いの存在を確認しながら楽しみを分かち合う場面」であり、また食事を通してマナーなど人間関係のスキルの伝達が行われる場面、「子どもが社会を知る場」であると考えられていることが示唆された。

また今回の結果について特筆すべきことは、家族の食習慣と父親の存在に何らかの関連がある可能性が示唆された点であろう。干渉(protection)傾向が高いと評定される父親は、食事の献立の決定にも権限を有しており、家族の食事のあり方の方向性にも影響を与えているらしいことが推測された。いろいろな料理を好き嫌いしないで食べさせられた子どもほどそのような干渉(protection)傾向の高い父親をもつのではないだろうか。「我が家では冷凍食品を利用する」から父への同一化感情への負のパス、食事を介した親子関係やコミュニケーションを推測させる「食事は家族一緒にするのが楽しい」から父への同一化感情への正のパスが見られたことから、家族の食事のありかたが父親の存在と関連していると考えられるのではないだろうか。

さらに、食に手間や時間、お金などのコストをかけて家族での食事を楽しむと回答している子どもほど、父への同一化感情が高く、彼らはまた自尊感情も高い傾向を示した。同じ傾向は、母親への同一化感情についても言える。子どもの親に対する同一化感情は親の温かで受容的な養育態度から醸成されるものであろう。家族で楽しんで食事をするを通して、子どもが両親を温かで受容的であると認識することができ、両親に親しみや憧れを感じ、自分についても肯定的に受けとめる自尊感情が高められるのではないだろうか。

4-3. 今後の課題

本調査は食と親子関係の関わりに関する探索的な研究であった。調査の結果、青年期女子大生と食態度・親子関係に関する興味深い洞察が得られたが、調査対象に大きな幅がないことを考慮する必要がある。また、調査項目にも改善の余地があるといえよう。今後は適当な尺度の作成を含め、本調査で得られた結果について、さらに検討を重ねることが必要であると考えられる。

第3節 研究Ⅱ 食経験と親子関係の関連

1. 目的

研究Ⅰでは家庭での食経験と食態度が親子関係に関連のあることが示された。

研究Ⅱではさらに、過去に家庭で与えられた食経験が食態度に及ぼす影響について、親子関係形成と関連付けて検討する。また、食経験の時期の違いについても及ぼす影響の差を検討する。その際、「弁当」を家庭で与えられた食事を示す一つの指標として用いることとする。

2. 方法

2-1. 調査時期

2004年に質問紙調査を行なった。

2-2. 対象者

首都圏近郊の四年制大学に在学中の大学生および短期大学に在学中の学生に調査協力を依頼した。男子84名、女子207名（平均年齢19.43歳，SD=1.409）が分析対象となった。

2-3. 調査内容

調査内容に含まれる変数は以下のとおりであった。

- ① 摂食態度調査票(Eating Attitude Test 以下 EAT とする) : Garner&Garfinkel (1979) 版からの筆者らによる翻訳を用いた。食に関する40項目のそれぞれにおいて、「1 けっして～ない」「2 まれに」「3 時々」「4 しばしば」「5 とてもしばしば」「6 いつも」の6段階で回答を求めた。この調査票は摂食障害者のスクリーニング用に開発されたものであり、項目内容は「食べ物が私の人生をコントロールしていると感じる」「食べてしまった後ひどい罪悪感をおぼえる」など食に関する態度や、心のあり方を測定する構成となっている。4つの反転項目を含む40項目の得点を算出する。その際「6 いつも」を3点、「5 とてもしばしば」を2点、「4 しばしば」を1点、それ以下を0点として採点し、総合得点は0点から120点の範囲内となる。得点が高いほど、食べることを肯定的にとらえることができず、食べることに不安を抱えている態度を示すため食行動危険度が高く、低いほど危険性は低いと推定される指標である。問題食の指標として用いる。
- ② 食態度に関する項目(Life style of Eating 以下 LSE とする) : 研究Ⅰの食習慣に関する項目で使用されたEATb, EATcを見直した。質問には現在の食習慣

や食事観に関する 20 項目，家庭のこれまでの食生活に関するもの 18 項目が含まれる。回答は，「1 全然あてはまらない」「2 少しあてはまる」「3 どちらでもない」「4 だいたいあてはまる」「5 とてもあてはまる」までの 5 段階で求めた。

- ③ 自尊感情尺度 (Self Esteem Scale 以下 SES とする) : 遠藤 (1992) による Janis&Field (1959) の日本語版尺度を用いた。自己の能力や価値についての公的，私的評価に関する感情を測定する 23 項目について「1 ほとんど…でない」「2 あまり…でない」「3 どちらともいえない」「4 やや…である」「5 非常に…である」の 5 段階で回答を求めた。3 つの反転項目を含む 23 項目の得点を算出する。総合得点は 23 点から 115 点の範囲内となる。点数が高いほど自分を肯定的に感じていることを示す。
- ④ 親に対する同一化感情尺度 (Parental Image Scale 以下 IMG とする) : 竹内・鈴木 (2000) を用いた。回答者が，両親と現在どのような親子関係を持っているかについて評定を求める。両親に対する同一化感情，親密さ，憧れ，尊敬などを測るものである。20 項目について「1 全く該当しない」「2 あまり該当しない」「3 やや該当する」「4 該当する」の 4 段階で回答を求めた。評定は父親，母親のそれぞれについて求めた。総合得点は 80 点満点となる。点数が高いほどその傾向が高いとする。
- ⑤ 弁当に関する項目 : 幼少期 (幼稚園から小学校低学年)，高校の弁当についてどのような評価をしていたか，どのように食べていたか，意識と行動の側面について評定を求める質問を 16 項目 (意識 10 項目，行動 6 項目) 作成した。回答は「1 全然あてはまらない」「2 少しあてはまる」「3 どちらでもない」「4 だいたいあてはまる」「5 とてもあてはまる」の 5 段階で回答を求める。幼少期の普段の弁当 (LunchBox-Childhood-Lifetime 以下 LBcl とする) と高校時代の昼食 (LunchBox-HighSchool 以下 LBhs とする) のそれぞれについて回答を求めた。

3. 結果

3-1. 尺度の基礎分析

得点を算出した問題食(EAT)、自尊感情(SEs)、また父や母への同一化感情(IMG)の各得点の基本統計量を求め、Table3-3-1に示す。

Table3-3-1. 問題食(EATa)、自尊感情(SEs)、PBIの基本統計量

	平均値	標準偏差
問題食(EAT)	29.86	13.839
自尊感情(SEs)	60.08	14.762
父-同一化(FIMG)	30.83	11.537
母-同一化(MIMG)	40.90	10.257

次に、求めた変数間の相関係数 r を算出したところ、問題食 (EAT) は自尊感情 (SEs) と有意な負の相関を示した ($r = -.154, p < .01$)。

食態度の項目 (LSE) 38 項目を用いて因子分析を行なった。主因子法を用いて因子の抽出をし、因子負荷が 0.30 に満たなかった 9 項目を削除した後、再度主因子法を用いて因子を抽出した。因子数はスクリープロットにより判断し 4 因子とし、バリマックス回転を行なった。因子負荷を Table3-3-2 に示す。第 1 因子は「LSE30 食事は家族そろって食べていた」「LSE7 食事は家族一緒にするのが楽しい」などの 9 項目の因子負荷が大きく「家族の共食」の因子であると考えられる。第 2 因子は「LSE14 添加物などの安全表示には注意を払っている」「LSE6 食品に関する情報 (BSE 問題や不当表示) には注意を払っている」など、食の情報への感性や健康的な食生活の実施に関する 7 項目の因子負荷が大きく「食と健康への感性」の因子と考えられる。第 3 因子は自分で料理をしていることを示す「料理実践」の因子、第 4 因子は食をなるべく簡単に済ませることを表す「合理化・簡便化」と考えられる。第 4 因子までで 30.7% の累積寄与率を示した。各因子について因子負荷量が 0.30 以上の項目 (第 1 因子 : 9 項目, 第 2 因子 : 7 項目, 第 3 因子 : 3 項目, 第 4 因子 : 5 項目) を合計し、項目数で割った値を下位尺度得点としてみなした場合、 α 係数がそれぞれ .766, .706, .767, .701 と十分な内的整合性を有している。そこで各尺度の得点を「家族の共食」得点 ($M=3.55, SD=0.700$) , 「食と健康への感性」得点 ($M=2.67, SD=0.745$) , 「料理実践」得点 ($M=2.53, SD=1.114$) , 「合理化・簡便化」得点 ($M=2.14, SD=0.746$) として用いることとした。

Table 3-3-2. 食のライフスタイル(LSE)項目の因子分析結果(回転後の因子負荷量)

項目	因子				共通性
	1	2	3	4	
家族の共食 (α=.766)					
LSE30 食事は家族そろって食べていた	.692	.010	.040	-.085	.487
LSE7 食事は家族一緒にするのが楽しい	.610	.150	.057	.020	.398
LSE22 我が家の自慢料理がある	.582	.002	.000	-.111	.351
LSE32 我が家では、家族がそろうと手作りしたご馳走を食べる	.538	.124	.099	-.047	.317
LSE27 家族の食べ物の好みを知っている	.517	-.000	.003	-.025	.268
LSE21 同じ食卓につくときは、家族は同じものを食べていた	.491	-.049	-.089	-.185	.285
LSE24 家族がいても1人で食事をすることがある	-.460	-.017	-.103	.285	.304
LSE23 食事のときのマナーのしつけは厳しかった	.353	.130	.099	-.094	.160
LSE29 料理を手伝わされた	.349	.075	.292	.045	.214
食と健康への敏感性 (α=.706)					
LSE14 「添加物」などの安全性表示には注意を払っている	.056	.677	.254	-.048	.528
LSE6 食品に関する情報(BSE問題や不当表示)には注意を払っている	.078	.650	.119	.053	.445
LSE20 「遺伝子組み換え」食品には注意を払っている	.043	.608	.184	-.065	.410
LSE18 食材の栄養や機能を意識して食べる	-.161	.465	.260	.024	.310
LSE4 健康的な食生活をしていると思う	.101	.457	.013	-.011	.219
LSE12 毎日必ず三食食べる	.093	.331	-.127	.034	.135
LSE5 本格的に手間をかけて料理を作ることは大切だ	.148	.326	.194	-.097	.175
料理実践 (α=.767)					
LSE8 自分で料理をつくる	.119	.095	.844	-.023	.737
LSE19 得意料理がある	.104	.091	.693	-.054	.502
LSE13 料理の基本を知っている	.042	.294	.588	-.000	.435
合理化・簡便化 (α=.701)					
LSE37 我が家では、冷凍食品を利用する	-.076	-.116	-.131	.689	.511
LSE38 我が家では、コンビニの食品を食べる	-.182	-.049	.068	.653	.467
LSE33 我が家では、デパ地下の食品を食べる	-.034	.112	-.098	.513	.286
LSE31 我が家では、食べたいものがあつたらつくらずにそのものを買ってくるか食べに行く	-.358	-.018	.026	.399	.289
LSE36 我が家では、鍋やフライパンのまま食べ物が食卓に並ぶことがある	-.117	.009	.079	.391	.173
累積寄与率 (%)	9.742	17.486	24.468	30.679	

主因子法Kaiserの正規化を伴うバリマックス回転

3-2. 問題食(EAT)と食態度指標の相関

問題食(EAT)と食態度の下位尺度との相関係数 r を求めたところ、問題食(EAT)は「家族の共食」との間に負の相関を示した ($r = -.219$, $p < .01$, $n = 281$)。「合理化・簡便化」との間には有意な正の相関を示した ($r = .345$, $p < .01$, $n = 281$)。

3-3. 食態度と両親への同一化感情(FIMG, MIMG)との相関

食態度の下位尺度と自尊感情(SES), 両親への同一化感情(FIMG, MIMG)との相関係数を算出した結果、自尊感情(SES)は「家族の共食」($r = .230$, $p < .01$), 「料理実践」($r = .236$,

$p < .01$)と有意な正の相関を示した。父母への同一化感情 (FIMG, MIMG) それぞれが、「家族の共食」との間に正の相関を示した(順に $r = .308$, $p < .01$ と, $r = .515$, $p < .01$)。

3-4. 弁当場面の評価と行動の相関

弁当に関する項目について、幼少期普通の弁当 (LBcl), 高校弁当 (LBhs)の各場面ごとに評価項目と行動項目間の相関係数 r を算出し、1%水準で有意に相関の高かったものを Table3-3-3, Table3-3-4 に示す。

Table3-3-3. 幼少期普通の弁当(LBcl)における行動と評価の相関

	LBcl2 子食 よべ りる 速の か つ たの	LBcl3 食お べ弁 た当 は 残 さ ず	LBcl5 がを他 あ交の る換子 しと たお こか とず	LBcl6 ま食 っべ てる 食と べき たは だ	LBcl9 をが しお ら弁 た当 くを さ食 んべ ん話	LBcl15 見友 せ達 あと つお た弁 当を
LBcl1	手作りのお弁当だった					
LBcl4	時間をかけて作られたお弁当だった					.416 **
LBcl7	お弁当には好きなものばかりが入っていた					
LBcl8	お弁当にはたくさん品数が入っていた				.375 **	.373 **
LBcl10	お弁当の量が多すぎた					
LBcl11	他の子のお弁当がうらやましかった					
LBcl12	何がいいか、メニューのリクエストを聞いてくれた				.315 **	.341 **
LBcl13	お弁当に嫌いなものを入れるのをやめてくれなかった					
LBcl14	栄養バランスを考えて作られたお弁当だった					.487 **
LBcl16	お弁当がいつも楽しみだった				.400 **	.471 **

** $p < .01$.

Table3-3-4. 高校時代の弁当(LBhs)における行動と評価の相関

	LBhs2 子食 よべ りる 速の か つ たの	LBhs3 食お べ弁 た当 は 残 さ ず	LBhs5 がを他 あ交の る換子 しと たお こか とず	LBhs6 ま食 っべ てる 食と べき たは だ	LBhs9 をが しお ら弁 た当 くを さ食 んべ ん話	LBhs15 見友 せ達 あと つお た弁 当を
LBhs1	手作りのお弁当だった	.311 **				
LBhs4	時間をかけて作られたお弁当だった					.320 **
LBhs7	お弁当には好きなものばかりが入っていた					
LBhs8	お弁当にはたくさん品数が入っていた					.341 **
LBhs10	お弁当の量が多すぎた					
LBhs11	他の子のお弁当がうらやましかった					
LBhs12	何がいいか、メニューのリクエストを聞いてくれた					.391 **
LBhs13	お弁当に嫌いなものを入れるのをやめてくれなかった					
LBhs14	栄養バランスを考えて作られたお弁当だった					.347 **
LBhs16	お弁当がいつも楽しみだった				.320 **	

** $p < .01$.

幼少期普通の弁当(LBc1)項目では「LBc115 友達とお弁当を見せあった」は「LBc14 時間をかけて作られたお弁当だった($r = .416, p < .01$)」, 「LBc18 お弁当にはたくさんの品数が入っていた($r = .373, p < .01$)」, 「LBc112 何がいいか, メニューのリクエストを聞いてくれた($r = .341, p < .01$)」, 「LBc114 栄養バランスを考えて作られたお弁当だった($r = .487, p < .01$)」, 「LBc116 お弁当がいつも楽しみだった($r = .471, p < .01$)」と有意な正の相関を示した。

「LBc19 お弁当を食べながらたくさん話をした」は「LBc18 お弁当にはたくさんの品数が入っていた($r = .375, p < .01$)」, 「LBc112 何がいいか, メニューのリクエストを聞いてくれた($r = .315, p < .01$)」, 「LBc116 お弁当がいつも楽しみだった($r = .400, p < .01$)」と有意な正の相関を示した。

高校時代の弁当(LBhs)項目では「LBhs15 友達とお弁当を見せあった」は「LBhs4 時間をかけて作られたお弁当だった($r = .320, p < .01$)」, 「LBhs8 お弁当にはたくさんの品数が入っていた($r = .341, p < .01$)」, 「LBhs12 何がいいか, メニューのリクエストを聞いてくれた($r = .391, p < .01$)」, 「LBhs14 栄養バランスを考えて作られたお弁当だった($r = .347, p < .01$)」と有意な正の相関を示した。

弁当に対する評価と弁当を食べる行動の間に各場面で相関が見られた。幼少期普通の弁当, 高校弁当では弁当にかけられた労力や弁当に対する満足感などの肯定的な評価と, 「友達と弁当を見せ合った」という項目の間で多く相関が見られた。

3-5. 弁当評価の推移パターン別にみた食スタイル

幼少期普通の弁当と高校時代の弁当の比較と, それぞれが食態度とどのように対応しているかを検討する。下位尺度を抽出するため, 弁当に関する項目のうち, 幼少期普通の弁当(LBc1) 16項目と高校時代の弁当(LBhs) 16項目の質問項目を用いてそれぞれ因子分析を行なった。因子の抽出には主因子法バリマックス回転を用いた。

幼少期普通の弁当(LBc1)項目の因子分析の結果, 第1因子は「LBc14 時間をかけて作られたお弁当だった」, 「LBc18 お弁当にはたくさんの品数が入っていた」, 「LBc114 栄養バランスを考えて作られたお弁当だった」などの弁当にかけられた労力のとらえ方に関する7項目の因子負荷が大きい。

高校時代の弁当(LBhs)項目の因子分析の結果, 第1因子は「LBhs4 時間をかけて作られたお弁当だった」, 「LBhs14 栄養バランスを考えて作られたお弁当だった」, 「LBhs8 お弁当にはたくさんの品数が入っていた」などの弁当にかけられた労力のとらえ方に関する6項目の因子負荷が大きい。

これら二つの因子分析の結果第1因子として集積した項目のうち, 共通する「時間をかけて作られたお弁当だった」, 「お弁当にはたくさんの品数が入っていた」, 「栄養バラ

ンスを考えて作られたお弁当だった」、「お弁当がいつも楽しみだった」、「手作りのお弁当だった」、「何がいいか、メニューのリクエストを聞いてくれた」6つの項目を「弁当肯定評価」の因子とし、それぞれの項目を合計し、含まれている項目数で割った値を尺度得点とした場合、 α 係数がそれぞれ.775, .799 と十分な内的整合性を有している。そこで、各尺度の得点を「幼少期弁当評価」得点 ($M=3.76, SD=0.758$)、「高校弁当評価」得点 ($M=3.48, SD=0.863$) として用いることとする。幼少期弁当評価得点と高校弁当評価得点の相関は有意であった ($r=.687, p<.01$)。

3-6. 過去の弁当記憶と食態度および両親への同一化感情との関連

弁当に対する評価の推移と食態度の関連を検討する。

3-6-1. 弁当評価の推移パターンによる食態度の差の検討

幼少期弁当評価得点と高校弁当評価得点を平均点をもとに高群と低群に分別し、幼少期の弁当評価の2（高低）群×高校の弁当評価の2（高低）群の4群に分けた。幼少期弁当評価が高く高校弁当評価も高い群を「H-H群(n=116)」、幼少期弁当評価が高く高校弁当評価が低い群を「H-L群(n=33)」、幼少期弁当評価が低く高校弁当評価が高い群を「L-H群(n=30)」、幼少期弁当評価が低く高校弁当評価も低い群を「L-L群(n=84)」とする。

弁当に対する評価の推移のパターン（H-H群、H-L群、L-H群、L-L群）を独立変数、食態度下位尺度を従属変数として分散分析を行なった。その結果を Table3-3-5 に示す。

Table3-3-5. 弁当評価推移パターン別の食のライフスタイル下位尺度得点の平均

		H-H	H-L	L-H	L-L	F値	多重比較(Tukey HSD)
家族の共食	平均値	3.91	3.71	3.46	3.12	27.40 **	H-H, H-L>L-H>L-L
	標準偏差	0.558	0.549	0.611	0.702		
	N	114	32	30	82		
食と健康への敏感性	平均値	2.86	2.63	2.95	2.41	7.72 **	L-H, H-H>L-L
	標準偏差	0.710	0.743	0.696	0.699		
	N	113	32	28	82		
料理実践	平均値	2.64	2.47	2.87	2.26	3.12 *	L-H>L-L
	標準偏差	1.098	1.096	1.170	1.044		
	N	116	33	30	83		
合理化・簡便化	平均値	1.95	2.10	2.11	2.34	4.94 **	L-L>H-H
	標準偏差	0.645	0.800	0.933	0.669		
	N	115	33	30	84		

* $p<.05$, ** $p<.01$.

「家族の共食」得点について、弁当評価の推移パターンの主効果は有意であった ($F(3, 254) = 27.40, p < .01$)。Tukey 法を用いた多重比較の結果、H-H群とL-L群、H-L群とL-L群、L-H群とL-L群の間で平均値の差が1%水準で有意であった。また、H-H群とL-H群、H-L群とL-H群の間で、平均値の差が5%水準で有意であった。

また、「合理化・簡便化」得点については、弁当評価の推移パターンの主効果は有意であった ($F(3, 258) = 4.94, p < .01$)。Tukey 法を用いた多重比較の結果、L-L群とH-H群の間で平均値の差が1%水準で有意であった。

つまり、幼少期の弁当評価の高い群は低い群と比較して「家族の共食」得点が有意に高く、「合理化・簡便化」得点は終始弁当評価の低い群が終始高い評価の群より有意に高かった。「食と健康への敏感性」得点は、幼少期の弁当評価の高低に関わらず、高校の弁当評価が高い群が終始低い群よりも有意に高い。また、「料理実践」得点は終始評価の低い群が4群の中で最も得点が低く、幼少期が低く高校時代が高い群が最も得点が高かった。この結果より、弁当評価の推移の仕方によって、食態度との関連が異なる可能性がうかがえる。

3-6-2. これまでの弁当評価から親への同一化感情へのパスの検討

これまでの弁当評価が現在の親への同一化感情 (IMG) へ及ぼす影響を検討する目的で、親への同一化感情尺度 (IMG) を従属変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った。独立変数はこれまでの弁当評価 (幼少期弁当評価, 高校弁当評価) である。

まず、両親への同一化感情 (MIMG, FIMG) それぞれを従属変数として分析を行った。標準偏回帰係数が1%水準で有意になったパスをまとめて Figure3-3-1 に示す。

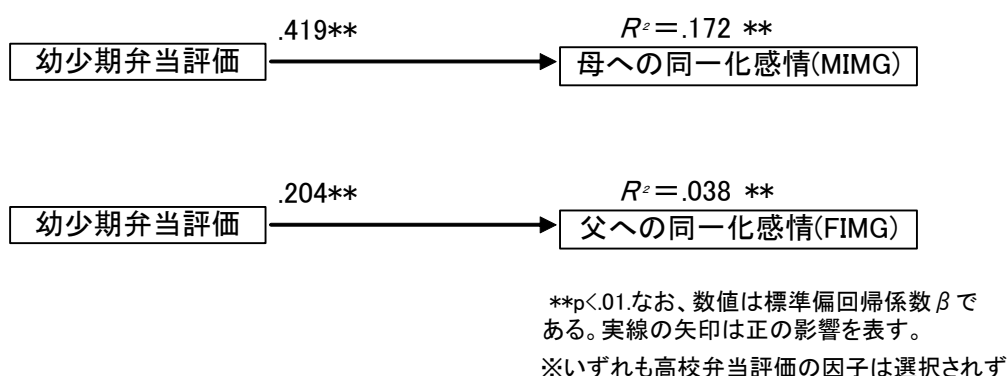


Figure3-3-1. これまでの弁当評価が両親への同一化感情へ与える影響を示すパス・ダイアグラム

母親への同一化感情(MIMG)を従属変数, 幼少期弁当評価と高校弁当評価を独立変数とした重回帰分析では, 幼少期弁当評価が選出された ($R^2 = .172, p < .01$)。幼少期弁当評価から, 「母親への同一化感情」への正のパスが示された ($\beta = .419, p < .01$)。なお, 独立変数間の相関係数を算出したところ, $r = .684$ であり, 多重共線性の影響は小さいものと判断した。

次に父親への同一化感情(FIMG)を従属変数, 幼少期弁当評価と高校弁当評価を独立変数とした重回帰分析でも, 幼少期弁当評価が選出された ($R^2 = .38, p < .01$)。幼少期弁当評価から, 「家族の共食」への正のパスが示された ($\beta = .204, p < .01$)。

これらの結果からは, これまでの弁当の経験のうち, 特に幼少期の弁当評価が, 現在の親への同一化感情に影響を与えている可能性が示唆された。

4. 考察

研究Ⅱでは, 過去の食経験と食態度および親子関係(具体的には, 父・母への同一化感情の側面)の関連について検討することが目的であった。研究Ⅱで得られた知見を以下に記す。

4-1. 家族での共食と子どもの心理社会的発達および食事観の関連

本研究では, 食態度の下位尺度である家族の共食因子と両親への同一化感情との間に有意な正の相関が見られ, 家族としてどのような食事の形式をとってきたか, とっているかが両親への同一化感情形成と有意に関連していることが確認された。さらに, この家族の共食因子は自尊感情とも有意な正の相関を示し, 家族で食事を共にとることが, 親子の心理社会的関係の形成や自尊感情に重要な役割を果たしていることがうかがえる。この点で, 一般適応群においても, 摂食障害やダイエット行動と自尊感情との関連について報告するこれまでの先行研究(例えば, 平野・新平・西牧・小川, 1999; Bruch, 1988; Shisslak, Pazda, & Crago, 1990)と同様の結果となったといえる。

また, 今回の調査では, 問題食を健康指標の一つであるととらえ, 問題食傾向と, 食態度の関連について検討した。その結果, 問題食傾向は, 家族の共食得点との間に負の相関, 食の合理性・簡便性得点との間に正の相関が見られた。このことから, 問題食傾向の高い者は, 家族で共に食事をとることは少なく, 食事の外面的な特徴や合理性を重視した食事をしているといえるだろう。本調査だけでは, 食態度と問題食の因果関係を断定することはできない。しかしながら, 問題食の早期発見あるいは予防という観点から, 子どもの普段の食生活, 子どもや親の食事観に注意を向け, 必要であればその変容を促すことが有用であると考えられる。家族の共食が, 自尊感情の高さや, 親子関係のみならず, 問題食傾向の低さとも関連のあることが示され, 「共に食べることはよいことだ」という一般認識や近年の政府による共食推奨を裏付ける結果になったとも言えるだろう。

4-2. 弁当を介した子どもへの影響について

今回の調査では、食態度、自尊感情、親への同一化感情の関連だけではなく、これまでの弁当の経験と食態度の関連、また弁当から子どもが何を受け取るのかについても検討した。

まず、調査の結果より、弁当にかけられた労力の評価や弁当に対する満足感などの弁当に対する評価と、弁当の食べ方の行動の間に有意な正の相関が見られ、弁当の評価や満足度の高い者ほど弁当を見せあったり、話をしたりと周囲と活発にやりとりをしながら弁当を食べている様子がうかがえた。弁当は親から離れた状況での食事であると考えられるが、「弁当をどのように準備してもらったと感じたか」が子どもの行動に影響を与えるということが示されたことは興味深い。さらに、幼少期の弁当評価と高校時代の弁当評価を独立変数、親への同一化感情を従属変数とした重回帰分析では、親との心理社会的関係を形成する要因として、近い過去の高校時代よりも、幼少期の弁当の肯定的評価のほうがより重みがあることを示唆する結果が示された。このことから、周囲との人間関係形成においては、幼少期の弁当経験が重要であると言える。

また、弁当評価の推移パターンを独立変数、食態度下位尺度を従属変数とした分散分析とその後の多重比較からは、弁当評価の推移のパターンによって、現在の食の習慣や意識に差があることが明らかとなったことから、食事の経験の時期やパターンの推移の仕方によって食態度形成に及ぼす影響に差のあることが示された。

4-3. 今後の課題

最後に本調査の限界と今後の課題について述べる。まず、本調査では子どもを対象としており、過去の食事についても子ども側からの報告に頼っている。そのため、子ども側の主観的な評価に頼ったデータであると言わざるを得ない。子どもがどのような観点から手間・時間・工夫などを評価しているかを更に細かく検討することはもちろんこれからの課題であるが、それに加えて今後は、親側にも回答を求めたい。さらに、今回は弁当を家庭で与えられた食事の指標の一つとして用いたため、弁当に関する評価や行動の違いや、それが食行動のスタイルおよび親子関係などに及ぼす影響の差異の検討は、弁当持参が比較的多いと考えられる幼児期と高校生時代の間においてのみ行われた。今回回答の対象としなかった時期については今後検討したい。

第4節 本章の全体考察

本研究では青年期学生の食態度と親子関係の関連について検討することが目的であったが、都内の大学に通う学生から対象者を抽出しており、ライフスタイルや居住形態等においては大きな幅がないグループのデータとなった。今回のデータから結果を一般化することには、慎重さを要する。今後はさらに対象者を増やして幅広く検討していくことが必要となるが、本章で得られた結果について以下に考察する。

1. 共食の意義の再考

調査Ⅰ，調査Ⅱより，幼少期の食事の様子が食態度と関連していることが示された。特に，家族一緒に食事をとることが，健康的な食生活につながることで，親への親密さ・憧れ・尊敬などの心理社会的な親子関係と関連するという点において，従来の「家族で一緒に食卓を囲むことが子どもにとって望ましい」とする一般的認識と一致したと言えるだろう。

また，弁当の評価と行動との対応が確認され，親子の分離状態においても，弁当を介して，間接的なやりとり，少なくとも親から子どもへの一方向のメッセージの伝達がされていることが明らかになったといえるだろう。これらの点を踏まえると，昨今の「家族とともに食べる，話をしながら食べる」ということのみを重点をおいた共食の推進ではなく，食物の分かち合いや食事にかかる時間や手間，工夫などを見直した上での共食の推進が求められるといえるだろう。また，今回の結果からは，母親の取り組みに対する子どもの評価を意識した実現可能な具体案を示すことが，健康増進のために必要不可欠であると考えられる。昨今の共食推奨は現代の家族のライフスタイルに必ずしも相容れないものである。そのため，様々な制約から家族で共に食卓を囲むことが困難な家庭に有用な提言も求められると考えられる。これらの問題に取り組む際には，母親に対する働きかけと，子ども自身への働きかけの双方のアプローチを考えることが有効である。

2. 食経験の構成要素について

本調査では，家庭での食経験を測る目的で作成した，弁当に関する項目を「与えられた食に対する評価」と「食物を摂取する際の行動」とに分別し，食経験を「評価」と「行動」という二つの側面からとらえることを試みた。その結果，現在よりも過去の食事にどれほど時間や手間がかけられ，工夫されているかについての評価が，食態度と対応しているとの結果になった。子どもがどのような観点から手間・時間・工夫などを評価しているかを更に細かく検討することはこれからの課題である。また，食経験を，大まかにとらえるのではなく，例えば本調査では「評価」と「行動」としたが，構成要素に目を向け分別することが，親子関係と食態度の因果関係の検討，一般的なモデルの作成へ

とつながると考えられる。今後、親子関係がどのように食態度獲得につながるのか、食態度の何が親子関係形成に影響しているのかについて慎重に検討する必要がある。

3. 今後の課題

本研究では、「子どもが高く評価できる食事」が心理・社会的発達にとって望ましい食事の要因であることが示された。また、過去の食経験と、その時期によって、食態度形成への影響力が異なる可能性を示唆するものであった。今回は、特に幼児期の食事の肯定的評価が、良好な親子関係を築くことにつながることを示唆されたが、さらに他のそれぞれの時期の食事がどのような役割を担うかについても今後検討したい。

昨今では、ライフスタイルの変化によって食のライフスタイル（食生活）も極めて多様な様相を呈している。食生活は人の身体のみならず、心の健康や成長にも大きな影響を及ぼす。食事についての正しい理解と望ましい食態度を身につける早期教育と持続的支援プログラムの必要性を感じる。食態度は、成人期以降の生活習慣病の発症にも深く関連し、そのことはまた生涯の生活の質（QOL）に大きく影響を及ぼす（草間，1992）。これらを踏まえると、青年期学生を対象とした健康的に望ましい食行動の指導はもとより、幼稚園や保育園、小・中・高校における早期食教育こそ急務と言えよう。

研究Ⅰ・研究Ⅱは、言語報告に頼るデータである。大量サンプルを扱うことができるので青年期の食態度と認知についての概要やモデルを推測できる利点があった。食経験・食態度に関する項目は、認知的な側面の評価であり、実際の場面での食習慣・行動を評定しているものではない。認知的側面に関する検討も有意義であるが、やはり実際の食事場面を「見る」ことの必要性・重要性は変わらない。例えば可能なら、調査と同時進行で、観察・実験など、実際の場面での食習慣・食行動を評定する手続きも今後求められるのではないかと考える。

これら研究Ⅰ、Ⅱで幼少期の親子関係と食事のあり方に少なからぬ関連が示されたことから、今後はフィールドを求め、食事の様子と背景にある親子関係に焦点をあてた観察研究を実施したい。

第4章 幼児の弁当を介した親子間相互作用

第1節 本章の目的

前章での調査結果を受けて、続く研究Ⅲ、研究Ⅳでは食態度を形成する家庭の食の一形態としての弁当に注目する。

幼稚園や保育園通園中の弁当は、基本的には自宅で食べることは前提としておらず、家族と一緒に食べるわけでもない。また、家族と同じものを食べるとは限らないという点においても、家庭の食事そのものとは言い難いが、家庭ごとに作成方法や内容に特色があり、毎日積み重ねられることから、各家庭の食事の象徴といえるだろう。弁当は親から離れた場で仲間・教諭との文脈の中で摂取されるものでありながら、親の養育態度や食行動スタイルが反映されるものであるとも言える。日常的に積み重ねられていく弁当の経験は、子どもや親にとってどのような役割を果たすのだろうか。

先行研究でなされた弁当づくりに対する意識調査からは、母親が少なからず弁当作りを負担に思っていること、また子どもの弁当について改善の必要のある状況が浮き彫りにされている。

これまでの弁当に関する先行研究では、親のみを対象とした質問紙調査が主であったため、得られる情報に限界があった。本研究では、弁当の内容や弁当作りに対する意識の実態などを明らかにするとともに、弁当（ひいては食事）の意義について検討し、母親の弁当に関するストレス緩和や弁当内容に対する意識の改善を図る上での方向性を探索する。

そこで本研究では、母親と子どもを対象とする。また、当事者の語りから得られる情報を重視するため、半構造化インタビューをデータ収集法の一つとして採用し、観察で得られたデータとあわせて弁当の実態調査および機能について考察する。

第2節 研究Ⅲ 養育者の弁当作りの実態

1. 目的

これまでの弁当に関する調査では、弁当作りにかかる時間や、注意点などに関する項目別の傾向を見ることによる全体的な傾向把握しか行なわれていない。そこで研究Ⅲでは、弁当作りの主な担い手である母親の弁当作りに対する意識をより深く検討することを目的とする。

2. 方法

2-1. 協力者

筆者の知人を介して、就学前の子どもを持つ母親へインタビューへの参加を募った。その結果、25名の母親にインタビューを行なうことができた。なお、対象者には事前にインフォームドコンセントを十分に行ない、同意を得られた母親を対象とした。これ以降、AからYまでの数字はインタビュー協力者の仮称を示すこととする。25名の個人属性をTable4-2-1に示す。

Table4-2-1. 調査協力者の個人属性

仮称	母親の年齢	母親の勤務状態	弁当作成対象	園の昼食形態	弁当にかける時間
A	30代	専業主婦	第2子	弁当4日/週	10～20分
B	20代	専業主婦	第1子	弁当4日/週	20～30分
C	40代	パートタイム勤務	第1子	弁当4日/週	10～20分
D	30代	専業主婦	第1子	弁当4日/週	10～20分
E	30代	専業主婦	第1子	弁当4日/週	10～20分
F	30代	専業主婦	第1子	弁当4日/週	20～30分
G	30代	専業主婦	第1子	弁当4日/週	10～20分
H	20代	専業主婦	第2子	弁当4日/週	5～10分
I	40代	専業主婦	第2子・第3子	弁当4日/週	10～20分
J	40代	専業主婦	第1子	弁当4日/週	10～20分
K	30代	専業主婦	第1子	弁当4日/週	10～20分
L	20代	専業主婦	第1子・第2子	弁当4日/週	20～30分
M	30代	専業主婦	第2子	弁当4日/週	20～30分
N	30代	専業主婦	第2子	弁当4日/週	20～30分
O	30代	パートタイム勤務	第1子・第2子・第3子	弁当4日/週	20～30分
P	30代	専業主婦	第1子	弁当4日/週	10～20分
Q	30代	専業主婦	第2子	弁当4日/週	20～30分
R	30代	専業主婦	第1子・第2子	弁当4日/週	20～30分
S	30代	専業主婦	第1子・第2子	弁当2日・給食3日/週	10～20分
T	30代	専業主婦	第2子	弁当4日/週	20～30分
U	30代	専業主婦	第1子	弁当4日/週	20～30分
V	30代	専業主婦	第2子	弁当4日/週	20～30分
W	30代	パートタイム勤務	第1子	弁当4日/週	10～20分
X	40代	専業主婦	第3子	弁当4日/週	10～20分
Y	30代	専業主婦	第2子	弁当2日・給食3日/週	10～20分

2-2. 調査期間

2007年7月に11日間にわたって都内の公園にてインタビューを行なった。

2-3. インタビューの方法

あらかじめ用意したインタビューガイドラインに基づいて、半構造化面接を行なった。なお、インタビューの様子は協力者の了解を得て、ICレコーダに記録した。インタビューの所要時間は各回約38分であった。

2-4. インタビューの内容

予め統一設定したインタビューのガイドラインに従って、以下の項目について回答を求めた。

①弁当観について

幼稚園・保育園の昼食について、弁当と給食のどちらが良いと思うか、その理由と弁当のもつ役割をどのように考えるか、自由な形式で回答を求めた。

②弁当作りに対する意識や弁当作りの実態について

母親の弁当作りに対する意識（好き嫌い・苦痛・関心・悩み・やりがい・重要視している度合い）弁当内容の実態（手作りの度合い・子どもから要望のあったものの有無・子どもの嫌いなものの有無・冷凍食品の有無）弁当作りの過程（弁当作りの参考にしていくものの有無・子どもの食べ残しの有無・食べやすくするための工夫・簡単に作るための工夫・子どもからの要望・親から子どもへの要望聞きの度合い）に関する18項目について「1全くあてはまらない」「2あまりあてはまらない」「3あてはまる」「4とてもあてはまる」の4件法で回答を求めた。またその具体例や理由について自由な形式で回答を求めた。

③日々の弁当作りの注意点について

江田（2006）を参考に作成した17項目（子どもの好み、彩り、食べやすさ、栄養バランス、安全性、簡便性、料理の品数、旬のもの、味付け、経済面、母親の好み、衛生面、手作り、楽しさ、行事、鮮度、添加物）について、注意している度合いを「1全く重視していない」「2あまり重視していない」「3重視している」「4とても重視している」の4件法で回答を求めた。

上記の質問項目の他に、家族構成・子どもの年齢・母親の年代・母親の勤務形態・弁当作りをしているのが第何子のためであるか・通っている幼稚園（もしくは保育園）の

昼食形態・普段弁当作りに要する時間について回答を求めた。

調査では、普段の弁当に対する母親の思いを明らかにすることを目的としたため、上記の質問項目を設定した。また当日は、多くの情報を引き出すとともに、可能な限り普段と変わらない状況での調査協力を目指したため、子どもが遊んでいるのを確認しながら回答してもらえよう、記述式ではなくインタビュー調査とした。文脈に合わせて質問の順序や言葉遣いは適宜変更することがあった。

3. 結果

3-1. 弁当観について

「お弁当と給食のどちらがいいと思いますか？」という質問について、25名中9名が弁当、7名が給食、9名が両方と回答した。

弁当が良いと回答した具体的な理由としては、少数意見として、「園児なので、園児の時位は手作りのものをあげたい」「私自身は給食のが楽で良いが、子供たちはお弁当のおいしいというので、子供の事を考えると、お弁当」という回答がみられた。しかしながら、7名は「体調などにより、内容や量を加減できる」「子供がたべやすいように作れる」「自分が望ましいと思う食品を食べさせられるから。幼児なので体調にあわせて量や内容を調節できるから」などと回答し、母親が子どもに合わせた内容・量を食べさせられることが、弁当の利点として考えられていることが明らかとなった。

次に、給食が良いと回答した具体的な理由としては、「たくさんの種類をバランス良く食べさせたい為」「弁当だと子どもの好きな物ばかり入れてしまうので」「嫌いなものも食べてくれそう」という回答がみられた。すなわち、母親が手作りするよりも偏りがなく、栄養バランスの考えられたメニューが出て、それを皆と一緒に食べるということが給食の利点として考えられていることが明らかとなった。

最後に、両方が良いという回答は、弁当・給食のどちらも利点があるとするものであった。具体的には「給食は栄養バランスが良い。弁当は母親の味」「愛情も半分栄養バランスも半分」「どちらもよい面があるので、週に半々がいいと思う。給食は普段食べないメニューも食べられる。お弁当は親の作ったものを食べることで愛情を感じられる。」などが理由として語られ、弁当と給食の両方を支持する母親の間では、弁当は親の愛情を確認するためのもの、給食は栄養バランスを整えるものとして対比して考えられていることが明らかとなった。弁当・給食支持に関する具体的な意見に関しては、Table4-2-2に示す。

Table4-2-2. 弁当・給食支持意見の具体例

弁当支持の意見

園児なので、園児の時位は手作りのものをあげたい(A)
私自身は給食のが楽で良いが、子供たちはお弁当のがおいしいというので、子供の事を考えると、お弁当(Q)
子供の食べた量が把握できる(B)
子供がたべやすいように作れる(C.)
量が調節できるから(D)
どちらかという、給食にすると、残す量が多くなりもったいない。手間はかかるけど(I)
体調などにより、内容や量を加減できる(J)
自分が望ましいと思う食品を食べさせられるから。幼児なので体調にあわせて量や内容を調節できるから(P)
本人の体調、食べれる量を調節してあげれるから(R.)

給食支持の意見

給食だと親は楽になるので。食材もかたよらないので。(F)
栄養面もきちんと考えて作ってもらえるから(G)
栄養バランスがいいから。(H)
たくさんの種類をバランス良く食べさせたい為(K)
いろいろな物を食べられると思うから(U)
弁当だと子どもの好きな物ばかり入れてしまうので(W)
嫌いなものも食べてくれそう(X)

弁当・給食両方支持の意見

週の半分で両方あれば良い。給食でみんなと同じものを食べさせたい(E)
両方いいところはあると思うから(L)
どちらもよい面があるので、週に半々がいいと思う。給食は普段食べないメニューも食べられる。お弁当は親の作ったものを食べることで愛情を感じられる。(M)
2回ずつだと良い。愛情も半分栄養バランスも半分(N)
半々くらい。給食が週2くらいあってもよい。栄養バランス整っているから。(O)
週2弁当、週3給食。給食は栄養バランスが良い。弁当は母親の味(S)
弁当は子供に与えたいものをセレクトできるが、給食も材料さえ吟味してあれば普段とは違うものとかも食べれてよい(T)
どちらも利点はある。給食は集団なので少なからずとも嫌いなものも食べてしまうような気がする。(V)
お弁当だけだと偏るので両方がベスト。(Y)

※アルファベットは発言した調査協力者の仮称

また、「お弁当はどのような役割をもっているものだと思いますか？」という質問に関する回答は、大きく5分類することができた。まずひとつ目は「親子のつながりを深める」、「親子のコミュニケーション的な役割」、「家庭のことを思い出す」、「愛情」など親と子を結ぶ道具としての役割、二つ目は「栄養バランス」、「午後からの活力のもと」などの身体の糧となる食料としての役割、三つ目は「幼稚園に通う楽しみの一つ」、「食べることの楽しさを覚える」など、楽しみの提供や、それを通じて食べる意欲を身につける場面としての役割、4つ目は「わからない」「特にない」など、弁当の機能について特に意識していないことをうかがわせる回答、最後はその他である。弁当の機能に関する具体的な意見に関しては、Table4-2-3 に示す。

Table4-2-3. 弁当機能に関する意見の具体例

楽しみ、楽しみを通じて食に対する意欲を養う
子供の楽しみであると思う (A) 子供の楽しみであると思う好きな物を入れてあげられるし、食べやすい様に入れてあげられるため、子供にとって、自分で食べる意欲を身につけてくれるもの。(G) 食べることの楽しさ、全部食べたときのうれしさ、美味しかったという満足感 (J) みんなで一緒に食べることの楽しさ。食への関心を養うもの。(Q) 幼稚園に通う中の楽しみの一つ。みんなで食べること、自分が食べれない物を食べている友達をみて、食べようと思う気持ち、食べることへの興味を持つ場である。(R.) 食べることの楽しさを覚える (T) 皆で食べる楽しみの一つ。(W)
栄養、身体の糧となる
午後からの活力 (I) 栄養バランス。子どもの成長にかかせない。(O)
家庭、家族を感じさせるもの
子供とのコミュニケーションの一つ (B) 外でお腹がすいた時、家で食べてるものを食べられる。安心を与える (C.) 母親が毎日自分の為に作ってくれと感じていればこちらもうれしい (E) お母さんからの愛情 (F) 家庭の温かさを感じられるもの (K) 愛情 (L) 親子のつながりを深める。子どものよこぶお弁当を考えることを通して、子どもの様子をよく観察することにもなるので、いいことだと思う。小さなお弁当箱にバランスよくつめるので、料理のウデもあがるかも。(M) 親子のコミュニケーション的な役割で、大切なもの。(N) 食事を摂るということ以外に、今日も一日幼稚園で楽しく遊んできてほしいという思いと一緒に子どもに手渡しています。ので、なんとなくそのような心がこどもに伝わればいいなと思います。(P) 母親の愛情 (S) 愛情 (U) (親の)姿の見えない園生活の中で、お弁当の時は思い出してくれるかな？ (X)
わからない
わからない (D) 思い当たらない (H) わからない (Y)
その他
自分で味付けの調整ができ、できたて感を味わうことができる。(V) ※アルファベットは発言した調査協力者の仮称

3-2. 母親の弁当作りに対する意識や弁当作りの実態について

母親の弁当作りに対する意識，弁当内容の実態，弁当作りの過程のそれぞれについて，各項目の平均得点を算出し，降順に項目を並び替えた回答率の分布をFigure4-2-1, 4-2-2, 4-2-3 に示す。また，これらに関する具体的な回答例をTable4-2-4 に示す。

項目	発言	人数
A-1	お弁当作りが楽しいと感じるのはどういう時ですか？	
	美味しかったと言ってくれた時	8
	満足できるものが作れた時	7
	残さず食べてくれた時	4
	子どもから弁当について要望があった時	2
	子供が喜んでくれた時	2
	運動会や遠足でたくさん作る時	2
A-2	お弁当作りにやりがいを感じるのはどういう時ですか？	
	残さず食べてくれた時	9
	子供が喜んでくれた時	6
	子供が嫌いな物を食べて帰った時	3
	美味しかったと言ってくれた時	3
	やりがいはあまり感じない	3
A-3	お弁当作りを苦痛に思うことがある場合、それはどういう時ですか？	
	(母親の)体調が悪い時	14
	時間がない時	3
	ない	3
	献立が決まらない時	3
	料理が苦手だから	1
	上手につめられない時	1
A-4	お弁当作りをやめたいと思うことがある場合、それはどういう時ですか？	
	(母親の)体調が悪い時	10
	時間がない時	2
	ない	5
	献立が決まらない時	3
	料理が苦手だから	1
	作らなければならないというプレッシャーを感じた時	1
	手抜き弁当が続いた時	1
B-1	冷凍食品の利用についてどのように考えていますか？	
	便利	15
	安全面に問題	4
	困ったときに利用する	3
C-1	お子さんの嫌いなものを弁当に入れることについてはどのように考えていますか？	
	友達と一緒にだと食べることがあるので、入れる	11
	弁当が嫌いになっても困るので入れない	5
	嫌いなものでも食べさせる	5
	いつか食べてくれれば良いと思い、入れる	3
嫌いなものはない	1	
D-1	お弁当についてお子さんから要望がある場合、それはどのような要望ですか？	
	好物(例:ポテトをいれて)	10
	量(例:ご飯の量をもっと増やして)	5
	仲良しの子と同じもの(例:Oちゃんが△いれてたから同じのがいい)	5
	形態(例:早く食べられるように、おにぎりは小さくして)	3
	味付け(例:人参は甘くしないで)	1
	外観イメージ(例:車弁当・宇宙船弁当がいい)	1

3-2-1. 母親の弁当作りに対する意識の実態

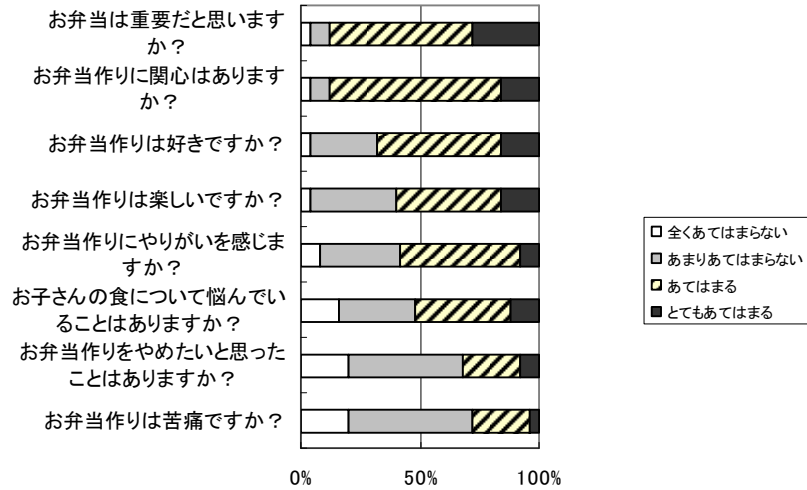


Figure4-2-1. 弁当作りに対する意識 回答率順

母親の弁当作りに対する意識に関する項目では、「お弁当作りは重要だと思いますか」、「お弁当作りに関心はありますか」という弁当を重要視する項目は平均得点が高く、それぞれ 25 名中 22 名が「あてはまる」あるいは「とてもあてはまる」と回答した。「お弁当作りは苦痛ですか」、「お弁当作りをやめたいと思ったことはありますか」という弁当作りを否定的にとらえる項目は平均得点が低く、「あてはまる」あるいは「とてもあてはまる」と回答したのは 25 名中、順に 7 名、8 名という結果であった。また、「お弁当作りは好きですか」、「お弁当作りは楽しいですか」、「お弁当作りにやりがいを感じますか」という弁当を肯定的にとらえる項目は、中位に収束した。それぞれの具体的な意見については Table4-2-4 の A-1, A-2, A-3, A-4 に示す。

3-2-3. 弁当内容の実態

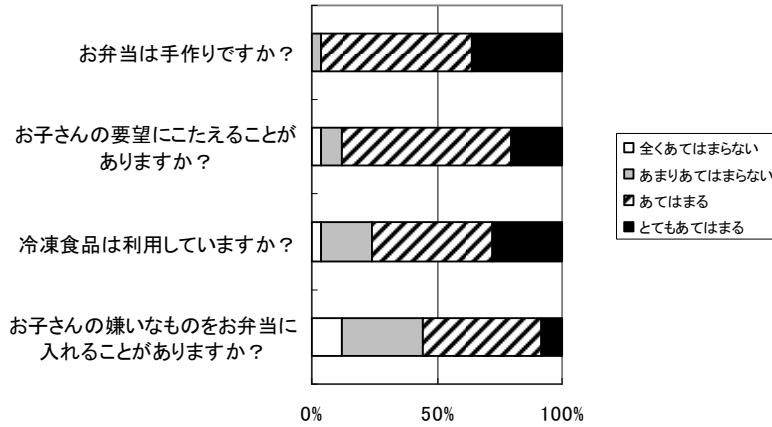


Figure4-2-2. 弁当内容の実態 回答率順

弁当内容の実態に関する項目では、「お弁当は手作りですか」という項目に 25 名中 24 名が、「あてはまる」あるいは「とてもあてはまる」と回答した。その一方で「冷凍食品は利用していますか」という項目については、19 名が「あてはまる」あるいは「とてもあてはまる」と回答した。冷凍食品利用に関する具体的な意見は Table4-2-4 の B-1 に示す。

また「お子さんの要望にこたえることがありますか」という項目については、22 名が「あてはまる」あるいは「とてもあてはまる」と回答した。「お子さんの嫌いなものをお弁当に入れることはありますか」という項目については、14 名が「あてはまる」あるいは「とてもあてはまる」と回答した。子どもの嫌いなものを弁当に入れることに関する具体的な意見は Table4-2-4 の C-1 に示す。

3-2-3. 弁当作りの過程の実態

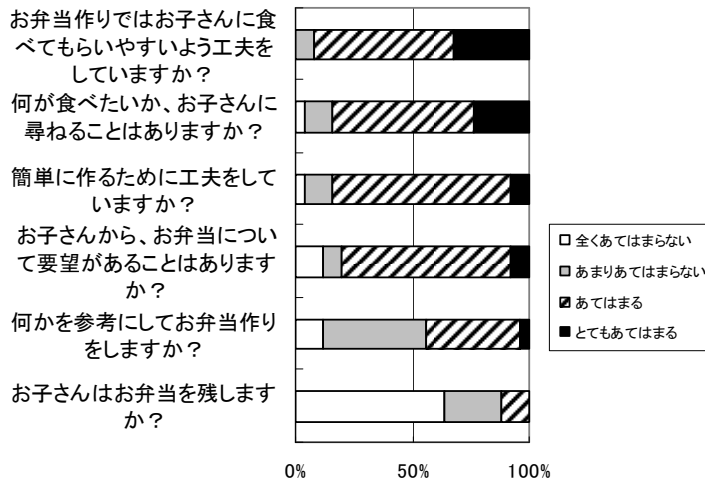


Figure4-2-3. 弁当作りの過程 回答率順

弁当作りの過程に関する項目では、「お弁当作りではお子さんに食べてもらいやすいよう工夫をしていますか」「簡単に作るための工夫をしていますか」という工夫に関する項目については、25名中、順に23名、21名が「あてはまる」あるいは「とてもあてはまる」と回答した。子どもが食べやすくする工夫としては、一口で食べられるサイズのものを入れる、食べやすいよう楊枝を挿す、手で食べられる形にする、好きなものを入れるなどが挙げられた。また、簡単に作るための工夫の具体例としては前日から下ごしらえをする、夕飯や朝食のおかずの残りを利用する、市販のものを利用する、難しいものは作らないなどが挙げられた。「何かを参考にしてお弁当作りをしますか」の項目については11名が「あてはまる」あるいは「とてもあてはまる」と回答した。具体的には、本やインターネットによる情報収集が主な回答であった。また、「何が食べたいか、お子さんに尋ねることはありますか」「お子さんから、お弁当について要望があることはありますか」という項目については、21名、20名が「あてはまる」あるいは「とてもあてはまる」と回答した。「お子さんはお弁当を残しますか」の項目については、「あてはまる」あるいは「とてもあてはまる」という回答は25名中3名であった。子どもからの要望に関する具体的な意見はTable4-2-4のD-1に示す。

3-3. 日々の弁当作りの注意点について

日々の弁当作りの注意点に関する 17 項目について 4 件法で回答を求めた結果、評定値の平均が高い順に、食べやすさ ($M=3.32$, $SD=0.557$), 衛生面 ($M=3.32$, $SD=0.557$), 鮮度 ($M=3.16$, $SD=0.473$), 安全性 ($M=3.16$, $SD=0.625$), 栄養バランス ($M=3.12$, $SD=0.666$), 彩り ($M=3.08$, $SD=0.572$), 添加物 ($M=3.08$, $SD=0.640$), 味付け ($M=2.96$, $SD=0.539$), 子どもの好み ($M=2.96$, $SD=0.611$), 手作り ($M=2.92$, $SD=0.702$), 簡便性 ($M=2.84$, $SD=0.688$), 行事 ($M=2.68$, $SD=0.802$), 料理の品数 ($M=2.64$, $SD=0.757$), 経済面 ($M=2.56$, $SD=0.768$), 楽しさ ($M=2.52$, $SD=0.770$), 旬のもの ($M=2.36$, $SD=0.700$), 母親の好み ($M=2.28$, $SD=0.737$) となった。

これらの 17 項目を用いて、因子分析を行なった。主因子法バリマックス回転を用いて 5 因子を抽出した。因子負荷を Table4-2-5 に示す。

Table4-2-5. 日々の弁当作り注意項目の因子分析結果(回転後の因子負荷量)

項目	因子					共通性
	1	2	3	4	5	
手作り・安全 ($\alpha=.913$)						
安全性	0.767	0.423	0.095	0.308	-0.055	0.874
栄養バランス	0.744	0.222	-0.107	0.116	-0.212	0.672
彩り	0.727	0.252	0.391	0.008	0.069	0.749
味付け	0.676	-0.212	0.071	0.356	0.236	0.690
添加物	0.673	0.279	0.032	0.295	-0.354	0.744
手作り	0.632	0.304	0.347	0.097	0.041	0.623
旬のもの	0.599	0.002	-0.111	-0.008	0.189	0.407
衛生面	0.575	0.537	0.345	0.502	0.095	0.999
食べやすさ	0.545	0.359	0.351	0.370	0.011	0.687
楽しさ ($\alpha=.658$)						
料理の品数	0.058	0.719	-0.035	-0.025	0.208	0.566
行事	0.264	0.557	-0.043	0.111	-0.161	0.420
楽しさ	0.499	0.548	-0.085	-0.435	0.226	0.797
母親の好み						
母親の好み	-0.007	0.099	-0.885	-0.030	0.120	0.808
ゆとり ($\alpha=.612$)						
子供の好み	0.124	-0.025	-0.042	0.653	0.032	0.445
鮮度	0.379	0.305	0.340	0.538	-0.192	0.678
簡便性 ($\alpha=.582$)						
簡便性	-0.056	0.377	-0.452	0.001	0.680	0.812
経済面	0.065	-0.001	0.001	0.004	0.584	0.345
累積寄与率(%)	26.202	39.716	49.534	59.173	66.563	

主因子法Kaiserの正規化を伴うバリマックス回転

第 1 因子は安全性、栄養バランス、彩り、味付け、添加物などの 9 項目の因子負荷が大きく「手作り・安全」の因子であると考えられる。第 2 因子は料理の品数、行事、楽しさ 3 項目への因子負荷が大きく「楽しさ」の因子と考えられ、第 3 因子は「母親の好み」の因子、第 4 因子は「ゆとり」の因子、第 5 因子は「簡便性」の因子として考えら

れる。各因子について項目の評定値を合計し、項目数で割った値を買い尺度得点としてみなした場合、 α 係数がそれぞれ（1項目のみの第3因子は除く）.913, .658, .612, .582と十分な内的整合性を有している。そこで各尺度の得点を分析に用いることとした。

次にこの5つの因子得点を用いて、クラスタ分析を行なった。Ward法を用い、テンドログラムから4クラスタであると判断した。それぞれのクラスタの特徴を明らかにするために、クラスタを独立変数、弁当作りの注意点の5因子を従属変数として、一元配置の分散分析を行なった。その結果、「手作り・安心」因子 ($F(3, 24)=6.24, p<.01$), 「楽しさ」因子 ($F(3, 24)=3.49, p<.05$), 「母親の好み」因子 ($F(3, 24)=32.64, p<.01$), 「簡便性」因子 ($F(3, 24)=24.92, p<.01$) において、主効果が有意であった。クラスタごとに、因子得点の平均値を示した図を示す。また、全体の平均値も図中に示す。(Figure4-2-4, 4-2-5, 4-2-6, 4-2-7 参照)。

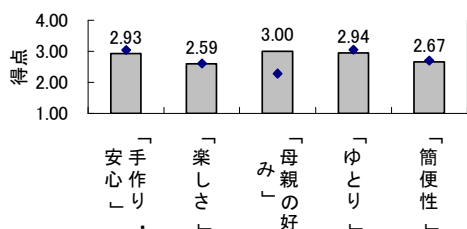


Figure4-2-4. 第1クラスタの各因子得点

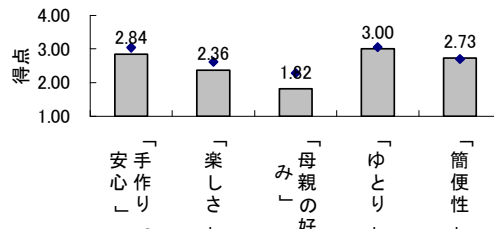


Figure4-2-5. 第2クラスタの各因子得点

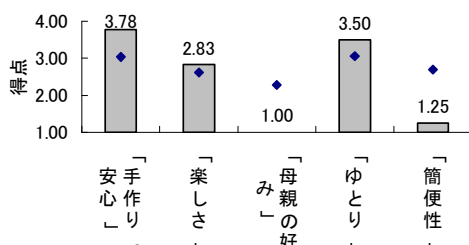


Figure4-2-6. 第3クラスタの各因子得点

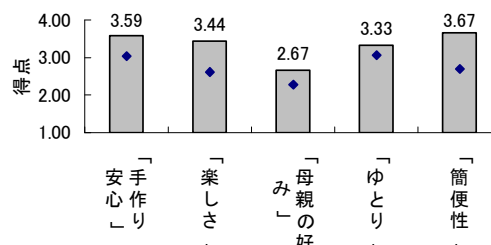


Figure4-2-7. 第4クラスタの各因子得点

これらの結果から、4クラスタを以下のように命名した。A, E, F, K, M, N, P, T, Uの9名からなる第1クラスタは、各因子の尺度得点が平均値とほぼ同じで「母親の好み」の尺度得点が高いという結果から、「気負わない弁当作り」クラスタとした。B, D, G, H, I, J, O, R, S, W, Yの11名からなる第2クラスタは各因子の尺度得点が平均値より低いことから、「低熱意弁当作り」クラスタとした。C, Vの2名からなる第3クラスタは、「手作り・安全」の因子得点と、「ゆとり」の因子得点が特に高いことから「手作り弁当作り」クラスタとした。L, Q, Xの3名からなる第4クラスタは各因子得点が平均値より高いことから、「完全主義弁当作り」クラスタとした。

4 クラスタを独立変数に、弁当作りに対する意識や弁当作りの実態に関する 18 項目を従属変数として、分散分析を行なった。その結果、有意な主効果がみられたのは「お弁当作りは好きですか $F(3, 21) = 3.593, p < .05$ 」「お弁当作りは楽しいですか $F(3, 21) = 5.201, p < .01$ 」「お弁当作りに関心はありますか $F(3, 21) = 2.814, p < .05$ 」「お弁当作りにやりがいを感じますか $F(3, 21) = 3.950, p < .05$ 」の 4 項目のみであった。続けて行なった多重比較によると、差異が見られたのは 4 項目すべてにおいて「低熱意弁当作り」クラスタと「手作り弁当作り」クラスタ間のみであった (Figure4-2-8 参照)。

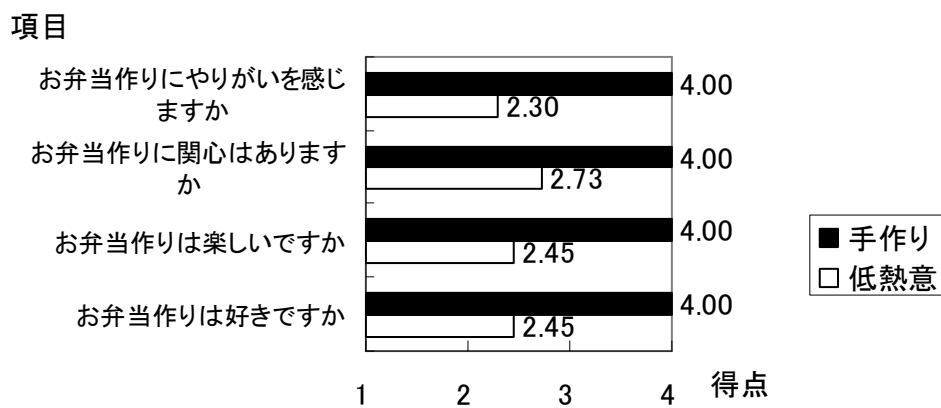


Figure4-2-8. 「手作り」「低熱意」クラスタ間の弁当作成に関する項目平均値比較

4. 考察

研究Ⅲが目指したのは、弁当作りの主な担い手である母親を対象としてインタビュー調査を行い、弁当作りに対する意識や弁当作りの実態について、質問紙調査では得られない豊富なデータを得ること、そしてそれらを基に弁当と背景にある家庭の食事の意義について検討する足がかりを得ることであった。

母親の弁当作りに関する全体の傾向としては、何かを参照にして作るというよりもむしろ、子どもと母親の間でなされる要望などに関するやりとりを参考にしながら、子どもの体調や食欲にあわせて母親が弁当を作っていることを示す結果となった。

4-1. 母親の弁当作りの意識の個人差と弁当評価の問題点

弁当作りにおける注意事項によって、母親を 4 クラスタにわけたところ、「低熱意弁当」と「手作り弁当」のクラスタ間で、やりがいや負担感に有意な差がみられる結果と

なった。こうした弁当作りへの注意点と母親自身の弁当に対する感情に関連がみられたことは興味深い。今後、対象人数の確保とともに弁当作りの意識改善のための介入の方略を検討することも今後の課題の一つであろう。

弁当は手作りであるという項目の評定値が高いにもかかわらず、冷凍食品を利用しているという現状も確認され、何を手作りであるにとらえているのかが曖昧であるという問題も浮かび上がってきた。母親それぞれの意識や経験によって、弁当の作り方そのものに個人差があるのはもちろん、かかる労力やそもそもの目標が異なることも考えられ、調査の評定値の理解には注意を要するだろう。近年、人々の経験・行動を理解するためには、外的基準を用いて測定し分析するだけでは不十分であり、当事者それぞれの背景までも考慮に入れ、当事者自身の視点から解釈することの必要性が主張されている。弁当作りに対する子どもおよび養育者の意識や行動を、社会的状況を考慮しつつ検討しようとする本研究においても、経験を当事者の視点から理解することが有効であると考えられる。今後はデータを調査紙の表低値のみに頼るのではなく、さらに方略を洗練させ、当事者の意識や行動そのままをとらえることが課題の一つだといえる。

4-2. 母親の弁当作りの実態

また、弁当の内容については、子どもの要望にこたえて、好きなものを入れることがあるという回答が多く見られた反面、嫌いなものを弁当に入れるという回答も多く、子どもには弁当を楽しく食べてほしいが、好き嫌い無く弁当を食べてほしいという姿勢が見られ、母親が弁当作りにさまざまな思いを抱いていることが示唆された。また、母親の弁当作りに対する意識としては、弁当作りは苦痛ではない、やめたいとは思わないとしながらも、弁当作りに楽しさや遣り甲斐を感じるという項目の評定値は高くないという結果であった。母親が積極的に弁当作りを楽しんでいるというよりもむしろ、日常生活の家事の一部としてこなしているという現状がうかがえた。弁当作りを少なからず負担と思っているという点は先行研究の知見と一致しているといえるだろう。

4-3. 今後の課題

これらの背景には母親が弁当のもつ機能について十分に理解しておらず、弁当作りを義務であると感じていることにあるように思える。弁当の役割については、「親子のコミュニケーションである」、「母親の愛情を感じるものである」という回答や、「食の楽しさを通じて食べる意欲を身につけるもの」、「身体の活力となるもの」、など弁当の機能については母親自身が意味づけをして弁当作りに励んでいるものの、それらの意味づけは経験論的な理解や、それらを基にした抽象的な提言によるものである可能性も否定できない。

弁当作りのやりがいを感じる場面として、「子どもが残さずに食べてくれた時」や、「美味しいといわれた時」などの回答が多く、子どもからの弁当に対する肯定的な態度

が母親にとって報酬となる可能性が示唆された。そのため、今後は実証研究に基づき、子どもの弁当に対する反応に重きをおいた提言をすることができれば、母親の弁当に対する意識の改善も期待できるのではないだろうか。

第3節 研究Ⅳ 幼児期の食事（弁当）を介した自己および両親に対する評価形成

1. 目的

前節では、幼児の弁当内容や弁当作りに対する母親の意識の現状、すなわち「親が子どもの弁当に何を つめて いるのか」が明らかになった。

これまでなされてきた弁当に対する意識調査はいずれも母親を対象として行われているものばかりである。弁当の機能を検討するためには、作り手である母親の意識を調査するだけでなく、食べ手である子どもを対象とした意識調査を行うことが欠かせないと考えられる。

研究Ⅳでは、幼稚園での弁当場面に焦点をあてて、「子どもは弁当から何を 受け取っているのか」について検討することを目的とする。特に、子どもがどのように弁当（食事）を受けとめているか、さらに背景にある親子関係を視野に入れて観察調査を行なう。ただし、読み書きや言語報告などのコミュニケーション能力の発達に個人差が大きくなる時期であることを考慮し、半構造的な柔軟なインタビュー方式をとる。

2. 方法

当該幼稚園で予備観察、予備調査を行なった後に、インタビューおよび観察によりデータの収集を行なった。

2-1. 協力者

東京都内にある私立幼稚園の園児を本研究の協力者とした。研究協力者は、年中児12名（男児6名、女児6名）、年長児12名（男児6名、女児6名）の計24名であった。これ以降、Aからzまでのアルファベットはインタビュー協力者の仮称を示すこととする。アルファベットの大文字（AからLまで）は年長児を表し、アルファベットの小文字（oからzまで）は年中児を表すこととする。

2-2. 調査期間

5日間にわたってインタビューを行なった。子ども一人あたり一回、一日に5人から6人を対象としてインタビューを行なった。

2-3. インタビューの方法

あらかじめ用意したインタビューガイドラインに基づいて、半構造化面接を行なった。年長クラスは1対1の半構造化面接、年中クラスは、インタビュアー1名に幼児2名の1対2の半構造化面接を行なった（条件の違いは、面接場面に対する緊張が年中児では強くなることが懸念され、教育配慮についての保育者側からの要請でこのような形式となった）。インタビューの際には、子どもが状況を想起しやすいよう考慮し、P-Fスタ

ディの様式を模した図版で二つの場面すなわち「子どもが家族と食事をしているところ」と「子どもが弁当を食べているところ」を呈示した。なお、面接の様子は幼稚園の責任者の了解を得て、ICレコーダに記録した。インタビューの所要時間は各回約10分であった。

2-4. インタビューの内容

予め統一設定したインタビューのガイドラインに従って、以下の項目について回答を求めた。①弁当場面での正の感情の生起の有無、②弁当場面での負の感情の生起の有無、③弁当内容変更の希望の有無、④嫌いなものが入っていることの有無、⑤友人の弁当への羨望の有無、⑥弁当を作る過程への興味の有無、⑦弁当の作り手の気持の推察の可否、⑧父親による弁当作りの有無と是非⑨父親による食事作り参与の有無、⑩子ども自身の家事参加の有無、⑪食事中のテレビ視聴の有無、⑫両親への感情である。

インタビューでは、普段の弁当に対する子どもの評価を主に満足・不満足の見点からとらえること、また家庭の食事環境を明らかにすることを目的としたため、上記の質問項目を設定した。そのため、インタビュー当日の弁当についてではなく、日常的な弁当について回答を求めた。ただし、文脈や子どもの理解に合わせて質問の順序や言葉遣いは適宜変更することがあった。また、時間の制約とインタビュー形式に制約があったため、すべての子どもに全質問ができたわけではない。

2-5. 写真によるデータ収集

昼食時には、インタビュー協力者の24名の幼児の弁当を、内容が確認できるよう配慮してデジタルカメラで撮影した。24名分の弁当について、5日間撮影をしたため、弁当写真データは一人あたり5枚であった。

3. 結果

協力の得られた幼稚園では、午前中に曜日毎に決められた設定保育が行なわれていた。その他の自由保育の時間中、子どもたちは原則的に自由に遊んでいた。自由保育の終了時間にも、保育者による点呼などは行なわれない。あらかじめ自由保育の開始時に、保育者がそれぞれのクラスごとに時間を決め、それにあわせて子どもが集合する方法をとっていた。

また弁当時は、4～6卓のテーブルを寄せて並べる形態だけではなく、シートを教室内に広げる形態、椅子を円状に並べ、床に座り椅子を机代わりにし、中心を向いて床に座る方法、園庭でシートを広げる方法など、さまざまなスタイルがとられていた。いずれの場合も、子どもは自由に着席位置を決め、全員が着席したところで食前の挨拶を行ない、食べ始めている。子どもたちの声があまりに大きかったり、座席を離れたり、著しい遊び食べが見られたりした場合は、保育者から制止が入ることもあったが、子ども

たちの自由なやりとりは基本的には奨励されていた。

インタビューの回答の分類, インタビューおよび観察で得られたデータをもとに子どもの社会的発達や弁当内容の評価を行なった。

3-1. 基礎データ

3-1-1. インタビューの回答の分類

記録をもとに, 各質問に対する子どもの回答を分類した。分類の基準は「肯定的回答」, 「否定的回答」, 「無回答あるいはどちらとも取れない回答」, 「質問自体を行なわなかった」である。

筆者の他, 今回のガイドラインを予め学習した心理学専攻の大学院生1名にも幼児の回答に対する評定を依頼した。インタビュー・プロトコル(会話記録)を読み, 評価基準(ガイドライン)に基づいて, 各自が独立して評定を行なった。「無回答あるいはどちらとも取れない回答」, 「質問自体を行なわなかった」などの回答は除外した上で, 信頼性の検討を行なった。項目ごとに, Cohen の κ 係数を算出したところ, 「弁当の作り手の気持ちの推察をすることができる(できない)」の項目を除いて, $\kappa = 0.732 \sim 1.0$ と高い一致率を示した。「弁当の作り手の気持ちの推察をすることができる(できない)」の項目については $\kappa = 0.0$ となった。ただし, この項目においても評定者間で対象となる子ども17人中15人で評定が一致している。この項目については, 否定的言及がほとんどなされなかったことが $\kappa = 0.0$ となった原因である。このような一致率が得られたことから, 今後の分析を継続することができることとする。

3-1-2. インタビューおよび弁当観察写真から得られる評価

インタビューを行なった全ての幼児の弁当について, 「弁当の客観的評価」の評価基準を定め, 撮影した5枚の弁当の写真を基に, 5段階評価で評定を行なった。この基準は, 弁当にどれほどの労力がかけられているかを評定する目的で作成した。弁当内容については, 冷凍食品など既製品の利用や, 料理の工程の数などの視点から, より時間をかけて作られているものを高く評価する。また, ワンパターンではない, 型抜きやのりを切って子どもの好きなキャラクターを作るなど, 作り手の工夫の感じられるものは高く評価する。

具体的には, 準備の工程の多さ, 市販品の利用の少なさ, 工夫・遊びのそれぞれにつき, 「(1)非常に低い」, 「(2)やや低い」, 「(3)一般的・平均的」, 「(4)やや高い」, 「(5)非常に高い」の5段階で評定し, これらの平均得点を「弁当の客観的評価」得点とした。

弁当の観察写真から得られる評価についても, 筆者の他に心理学専攻の大学院生1名に評定を依頼し, 評価基準(ガイドライン)を基に, 二人で独立に評価した。二者間の評価の相関係数を算出したところ $r = 0.891$ であり, 1%水準で有意であった。二者間の評定一致率は確保されたものと判断する。以降, 分析には筆者の評価を用いる。

Cronbach の信頼性係数 α は「弁当の客観的評価」の尺度で $\alpha = 0.682$ であった。

3-2. 弁当場面での感情の違いおよび家庭の食事環境の違いによる、「弁当の客観的評価」得点の差

「弁当の客観的評価」の得点を算出した（平均得点=3.18, 標準偏差=0.953）。

インタビューの各質問項目について、肯定的回答群と、否定的回答群との間で「弁当の客観的評価」得点の平均値の差の検定を行なった（Table4-3-1 参照）。

肯定的回答群と否定的回答群の間で「弁当の客観的評価」得点において有意な差が見られた項目は、以下の5項目であった。「弁当場面での正の感情の生起の有無」（ $t = 2.18$, $df=20$, $p < 0.05$ ）, 「父親による弁当作りの有無」（ $t = 2.20$, $df=19$, $p < 0.05$ ）, 「父親による食事作り参与の有無」（ $t = 3.19$, $df=13$, $p < 0.01$ ）, 「食事中のテレビ視聴の有無」（ $t = 2.16$, $df=15$, $p < 0.05$ ）で、否定的回答群（すなわち「ない」と回答した群）が肯定的回答群（すなわち「ある」と回答した群）より得点が有意に高く、「子どもの家事参加の有無」（ $t = 2.78$, $df=20$, $p < 0.05$ ）において、肯定的回答群（「ある」と回答した群）が否定的回答群（「ない」と回答した群）より有意に高かった。

Table4-3-1. インタビュー回答別の「弁当の客観的評価」得点の平均の差の検定

インタビュー質問項目		肯定的 回答群		否定的 回答群	t値	自由度
弁当場面での正の感情の生起の有無	平均値	2.92	<	3.93	2.18 *	20
	標準偏差	0.997		0.435		
	N	17		5		
父親による弁当作りの有無	平均値	2.39	<	3.29	2.20 *	19
	標準偏差	0.929		0.815		
	N	6		15		
家庭での子どもの家事参加の有無	平均値	3.39	>	1.89	2.78 *	20
	標準偏差	0.870		0.839		
	N	19		3		
父親による食事作り参与の有無	平均値	2.33	<	3.53	3.19 **	13
	標準偏差	0.754		0.506		
	N	10		5		
食事中のテレビ視聴の有無	平均値	2.67	<	3.67	2.16 *	15
	標準偏差	0.931		0.869		
	N	11		6		

* $p < .05$, ** $p < .01$.

3-3. インタビュー・観察から抽出される視点

3-3-1. 与えられた食（弁当）に対する評価

「嫌いなものが弁当に入っていることがあるか」という問いに対して回答があった24名中8名が「ある」と答えている。その一方で、明確に「ない」と答えたのは14名であった。「弁当場面で悲しくなることがあるか」という問いに対して「ある」と答え

たのは24名中3名であった。このうち2名は、具体的な例として「食べたくないとき、お腹痛いとき（H児：6歳2ヶ月、女児）」、「食べてるときにキックされたとき（K児：5歳9ヶ月、男児）」と述べた。弁当の中に自分の嫌いなものが含まれていることや、弁当に対する否定的感情の生起とのつながりに言及したのはI児（6歳5ヶ月、男児）のみであった。I児は、弁当場面で悲しくなることがあるとした上で、それは「嫌いなもの、食べたくないものが入っていたとき」と回答した。

「嫌いなものが含まれているときにはどうするか」という問いは全てのインタビュー協力児に尋ねたが、「残す」、「時々残す」という回答がある一方で、「頑張ってお母さんに怒られないように全部食べる」、「お母さんが悲しまないように全部食べる」、「せっかく作ってくれたから食べる」など、作り手の感情を思いやるような回答も出現した。実際の観察場面でも、嫌いなものを時間をかけて全て食べようとする子どもの姿も数多く観察された。嫌いなものが入っていても、弁当場面での負の感情の生起は「ない」と答える幼児もおり、嫌いなものを食べさせられることそのものが、直結して弁当に対する負の感情へと結びつくわけではないことが示唆された。

弁当内容の変更の希望について言及した子どもB児（6歳0ヶ月、女児）は、その理由について「例えばお弁当が少ないときとか」と述べている。また、L児（6歳0ヶ月、女児）は「なんか変なのが入ってた時そう思う」と回答した。

3-3-2. 食事を通じた自己認知の発達

肯定的な回答の割合が高かった質問項目の一つとして「子どもの家事参加の有無」が挙げられる。22名中19名が手伝いをすると回答した。ここで、「家事の手伝いをすると答えた子ども達は、自信に満ちた様子でその内容について回答していた。年長児が料理の手順を追って段階的に説明できることに対して、年中児の回答は「ケーキを混ぜる」「盛り付けをしたことがある」「小麦粉を入れる」など、料理の工程の一部分について言及するに留まる回答が多く見られた。具体的なやりとりの例をTable4-3-2のEpisodeA-1からA-2に記す。

普段の食事に関する言及の中で、年中児においては、「弁当を残さず食べること」、「嫌いなものも食べること」「道具が使いこなせること」を、年長児はそれに加えて「早く食べられること」を誇らしげに語る様子が多く見られた。具体的なやりとりの例をEpisodeB-1からEpisodeB-3に示す。

また、通常子どもが摂取しないとされているような嗜好品などを「摂取したことがある」、「摂取できる」ということを誇らしげに語る様子も見られた(EpisodeC-1からC-2参照)。

これらは家事参加、マナー習得の過程で、子どもが効力感を獲得することを示す例であると言えよう。珍しい食の体験も効力感を高める一因となる可能性が示唆された。

Table4-3-2. 食事を通した自己認知の発達:エピソード例

A)手伝いを通した自己効力		
Episode:A-1	調査者	対象児 (G児6歳1ヶ月 男児)
	Gくん,お手伝いしたりする?	うん。フライ作るときとかお手伝いする。卵いれてーそれからパン粉入れてーそして、イカでもなんでもいいんで、それでそれをパン粉の中に入れてー、その前にね、卵のところに、パン粉がくっつくようにしてから、パン粉に入れる。そうしてくっつける。そうしてあと火で、お鍋で焼いてからー、できあがり。ちょっと、次に新聞をお台所においてー、油を抜いてー、それからできあがり。
	よく知ってるね。	妹なんかさ、ちょっと重いけど抱っこできるよ。
Episode:A-2	調査者	対象児 (S児5歳2ヶ月 男児)
	お手伝いすることある?	あるー。うんとね、お皿ね、キュツキュツやって、こうやってやって、キュツキュツというまでやって・・・。
	お皿洗うの?それから?	僕はねー、あのねあのねー、お皿、お皿をねー、シチューを持ってく時ね、シチューをもってって言われた時にねー・・・する。
B)食事マナー習得を通した自己効力		
Episode:B-1	調査者	対象児 (P児4歳7ヶ月 女児)
	pちゃんお弁当残したりしない	うん。しないよ。ぜーんぶ食べるもん。
	お腹がいっぱいになっちゃったりしない?	うん、しないよ。
	(中略) おうちでご飯はどうやって食べているのかな?	うち、スプーンで食べてる!スプーンで。
Episode:B-2	調査者	対象児 (r児5歳2ヶ月 女児)
	嫌いな物が入っているときとか、	よく食べる。
	食べる?どうして?	だって大きくなるから。
	大きくなるためにrちゃんは食べるんだ、嫌いなものでも。	うん。ブロッコリーもキャベツも食べてる。r(自分の名前) 今ね、キャベツでも食べれるの。
Episode:B-3	調査者	対象児 (D児5歳7ヶ月 男児)
	おうちではどういふうに食事をする?お話ししながら食べてるかな?	お話してない!
	何しているの?	頑張ってるの。一位になるために。
	早く食べるために?	うん。一位になるために練習。
	(中略) 幼稚園で一位になるために、おうちでは練習しているんだ?	うん。昨日一位だった!
C)珍しい食の体験を通した自己効力		
Episode:C-1	調査者	対象児 (o児4歳10ヶ月 男児)
		えっと、コーヒーとか飲んだ。コーヒーとか飲めるんだ。
Episode:C-2	調査者	対象児 (D児5歳7ヶ月 男児)
	お母さんが作るものの中で何が一番おいしい?	うーん、お肉だねー。
	お肉?どんなお肉の料理?	豚肉とか牛肉とか。
	焼いてあるお肉かな?	うん。でも生とかでも少し食べられる。
	へえー。	ふ。すごいでしょ。
	生で食べるんだ。	うん、うち何回か生、食べたことある。
	本当?どうだった?	おいしかった。すごい。
	本当にお肉が好きなんだね。	すごい甘かった。
	すごい甘かったんだ?	うん。焼いているよりも、もっとうまかった。うん。柔らかくて、すごいおいしかった。

3-3-3. 弁当を通した親への肯定的・依存的感情

「弁当の作り手の気持ちの推察の可否」とは、「弁当を作っている人は、どのような気持ちで作っていると思いますか」という質問に対する回答からの評定である。これに対する回答では、「自分のために心をこめて作っている(H児：6歳2ヶ月、女児)」、「おいしいといいと思って作ってる(A児：6歳5ヶ月男児、B児：6歳0ヶ月女児、L児：6歳0ヶ月女児)」などがあった。作り手の具体的な感情にまで踏み込んだ言及は少数であったが、本質問項目への回答者21名中16名が「嬉しい気持ちで作っている」、「にこにこしながら作ってる」、「いい気持ち」などと肯定的なイメージを語った。「分からない」、「知らない」と回答した子どもは21名中5名であった。

また、弁当や食事に関して話すとき、子どもは、基本的に「(お母さんは、お父さんは、)～してくれる」という語調で語り、肯定的な意味での受動的・依存的な回答が多くなっていた。

3-3-4. 子どもの食行動（弁当の食べ方やそれに伴う行動）から、親への働きかけ

主に年長児の弁当に関するエピソードの語りの中では、弁当を介した子どもから親への働きかけを示す言及も示された (Table4-3-3 参照)。

Table4-3-3. 子どもの食行動による親への働きかけ:エピソード例

D)親への働きかけ		
Episode:D-1	調査者	対象児(B児6歳0ヶ月 女児)
	お弁当のおかずで一番好きなのはなあに？	やっぱりカレー。
	(中略)	
	お母さんにカレー入れてってリクエストしたりする？	(うなづく)
	そうしたらどうする？お母さん	入れてくれるよ。だけど、今日は言ってない。
	そうか、今日は言ってないんだ？	お母さんさ、風邪ひいてるからどれでもいいよって言ってあげた。
Episode:D-2	調査者	対象児(H児6歳2ヶ月 女児)
	お弁当残すことある？	うん、あ、たまにあるよ。
	(中略)	
	お弁当残すときはどうするの？お母さんに何か言う？	なんだ、残しちゃったんだーとかさ……。今日はお熱出てちょっと具合悪かったからごめんねって最後まで謝る。
	ごめんねって言うんだ？なんで、ごめんねって言うの？	だってさ、お弁当残したときは嬉しくないじゃん？
	お母さん？	うん。だって、終わらないで悲しいなって泣く時もあるよ。

B児は、母親の体調を気遣って、母親を労わる働きかけをしていることについて語った。また、H児は自分が弁当を残す場合の母親の感情を思いやり、働きかけを行なうことを明らかにした。これらは、弁当を介した親子のやりとりのうち、子どもから親に向けた言葉による働きかけを語った例である。

4. 考察

本研究が基本的に目指したのは、子どもの幼児期の食の場面を実際に見聞きすること、また、それによって、記述式の調査では得られない食行動に関する深い洞察を得ることであった。インタビューに加え、観察という手段をとることによって、被調査者の認識のみならず、実際の行動がどのようなものかを捉えることを試みた。その結果、子どもそれぞれの個人差はあるものの、全体的な傾向としていくつかの特徴が示された。

4-1. 弁当（食事）を通した自己・家族に対する認識の発達

インタビュー内容やプロトコル記録などを検討すると、子どもにとって弁当に「嫌いなものが入っていること」は、必ずしも負の感情の生起や両親への感情の悪化につながるわけではないことが示されている。さらに嫌いなものを食べることが子ども自身の自己評価を高める要素となる可能性も示唆された。

これらの結果より、弁当内容そのもの以外にも子どもへ影響を与える要因のあることが考えられる。子どもとのやりとりの中では、弁当の内容だけに留まらず、量が自分にあっているか、あるいはどれほど労力をかけて作られた弁当なのか評価する言及も見られた。これは、子どもは親から渡された弁当を無条件で受容しているわけではないことを示唆する結果である。子どもの要求、考え方に沿っていない場合には、子どもが変更を求める可能性も考えられる。

また、インタビューの中では「手伝いをする事」、「好き嫌いなく食べる事」、「早く食べる事」、「道具を使いこなす事」が可能であるということについて、子ども達の多くが自慢げに語っていることから、子どもが食を通して自己への評価を高める可能性が示された。

このように、食事や食事に付随する場面には、「好き嫌いなく食べる事」、「早く食べる事」、「道具を使いこなす事」を含め、子どもにとっては多くの課題が存在しているのであり、周囲の大人の要求に応え、これらの課題を達成していくことで、子どもたちは徐々に自己効力感を獲得していくことが推察される。

4-2. 食を通した親子相互のやりとり

「家事の手伝いをする」、「食事中にテレビは見ない」など、一般的に望ましいとされる食事スタイルの子どもは、そうでない子どもに比べて「弁当の客観的評価」が高く評定された。食事は、日常生活の様々な場面と独立した場面・事柄ではない。そのため、子どもの食事や、食を取り巻く環境に配慮する家庭では、親が食事だけではなく食事に関連する日常生活の様々な場面に注意を払っていることが推測される。

その一方で、父親による食事作り参与や弁当作りが「ある」と答えた子どもの弁当は、「ない」と答えた子どもの弁当と比較して、筆者の評定した「弁当の客観的評価」の得

点が有意に低いという結果が示された。父親の家事参加は、両親の相互協力的な養育態度を意味するものであり、子どもにとって望ましいと推測されがちである。しかし今回の結果は、子どもの枠組みの中では、未だ家事や弁当作りなどが、母親の専管事項であるという状況が根強く続いており、父親の家事分担・参加は母親が果たしきれない役割を補完するものであると考えられていると推測させられた。また、父親が炊事を行なう場合は、満足した水準を達成することが困難であると子どもが考えているらしいこともうかがえる。

また、弁当場面での正の感情の生起が「ある」と答えた群と比較して、「ない」と答えた群のほうが、客観的な弁当評価得点が有意に高かった。このことから、弁当の客観的な評価ではなく、子ども自身の、弁当やそれを作った両親への評価が重要であることが示されたと言える。子どもの、食事や親に対する評価は、食事場面や料理内容のみに限らず、食事の準備や食後のやりとりなど、食に関係する一連の過程の中で生起するものであると考えられる。

4-3. 今後の課題

実際に子どもに関わりながら観察およびインタビューを行なうことにより、子どもの発達と食事の様子を、より現実味をもって捉えることができた。今後はさらに広範なデータの収集を継続したい。長谷川（1996）が幼児期の食行動研究が少ない理由として挙げているように、幼児の回答は言語的に未成熟であり、その表現が信頼性に欠けるものである恐れがある。以上の理由から、ここでの結果は、幼児の食態度に関する普遍的な特徴として必ずしも一般化できるものではないだろう。子どもの食態度をとらえる手段の検討なども、今後量的・質的研究を継続する上で、さらに適切な方法を探索することも大きな課題である。

第4節 本章の考察

調査研究による課題と問題に基づき、質的研究に取り組んだ。質的研究の目的は、子どもの幼児期の食の場面を子どもと養育者、双方の立場にたって実際に見聞きすること、またそれによって、記述式の調査では得られない視点や情報を得ることであった。

家庭の食生活は、通常家族で営まれ、外部の者が介入する機会がないという性質をもち、また方法論的な問題から、食事場面のデータを得ることは容易なことではない。そこで、本研究では、弁当を家庭の食生活が反映された「ポータブル化された家庭の食事」と位置づけ、弁当とその背景の親子関係、社会的発達に関連に焦点をあて、検討した。

その結果、個人差はあるが、全体の傾向として、いくつか特徴が示された。

1. 弁当（食事）を通じた社会性の発達

まず、弁当が子どもの社会性の発達と関連している可能性が示唆された。中でも特に、弁当評価得点から子どもの健康的な雰囲気へのパスが示され、子どもが与えられた弁当によって少なからず影響を受けていることが推測される。子どもが弁当の何によって、影響を受けているかについては、具体的に明示することができなかったが、インタビュー内容と、研究Ⅱの結果を統合して検討すると、子どもは弁当の内容だけに留まらず、内容、量ともに自分にあっているか、どれほど労力をかけて作られた弁当なのかを評価しているようだった。また、「嫌いなものが入っていること」が必ずしも、負の感情の生起や両親への感情の悪化につながるわけではないことが推測される。また後述するが、嫌いなものを食べることが自己効力を高める可能性も示唆された。大半の子どもは、弁当の作り手である（大半の場合）母親の弁当に少なからず興味を抱き、依存的・肯定的感情を抱いていることがインタビューを通じて語られた。弁当が作られる過程を含めて、作り手の評価を行ない、それが子供の自発的な行動や健康的な雰囲気につながるのではないかと考える。

2. 食を通じた自己効力の獲得

次に、子どもが食を通して自己効力を高める可能性と、その背景として幼稚園、家庭の食環境が関連することが推測された。子どもたちが自信に満ちた顔で、家事手伝いについて語った背景には、幼稚園あるいは家庭で、手伝いを奨励されており、手伝いをした場合には何らかの正の強化が与えられていることが推測される。そのような環境に育った子どもにおいては、「手伝い」＝「良いこと、ほめられること」という認識があるのだろう。その「手伝い」、すなわち「良いこと」をする自分は価値がある人間だという認識が、このような回答や態度になって表れるものと考えられる。残さず食べられることを得意げに話す背景

にも同様に、「残さないで食べること」＝「良いこと、ほめられること」という認識があるのだろう。このように、食事や食事に付随する場面においては、「好き嫌いなく食べること」、「速く食べること」、「道具を使いこなすこと」を含めて、子どもが親の要求に応える過程で徐々に自己効力を確立していくことが推察される。

3. 食を通した親子相互のやりとり

さらに、研究Ⅲ、研究Ⅳの双方において、弁当を介して、親から子どもへだけではなく、子どもから親への影響をうかがわせる言及も示された。

発達心理学では、これまで、親の養育方法や養育態度が子どもの発達にどのような影響を与えるかという観点から発達を考える考え方が主流であった。しかし、親から子だけではなく、子から親、親から子という双方向の影響が重要であるという認識に変化してきている。例えば、子どもは周囲の大人に自ら働きかけることによって、積極的に育児行動を誘発している（江尻，2002）との報告があるが、食事場面においても、単に、親に準備されたものから子どもが受け取るだけの一方ではなく、子どもの反応が、更に養育者へ刺激となり、親子関係は双方向に影響を及ぼしあい、保たれ続けるのではないかと考えられる。

子どもの発達に与える家庭環境の影響は大きく、子どもを取り巻く食の環境はその家庭環境を構成する要因の一つであり、果たす役割は決して小さくないと結論づけることができるだろう。

4. 今後の課題

実際に子どもに交じって観察・インタビューし、養育者にインタビューすることにより、子どもの発達と食事の様子を周りの環境を含め、より現実味をもって捉えることができ、実際の食の様子を知るといった目的においては有益なものであった。しかしながら、ここで分析したデータは限られた場面から得られたものである。まず、子ども達の行動には、幼稚園の文化が背景にあり、その影響も多分に受けていることが考えられる。また、養育者に関しても、インタビュー対象としたのが少人数であること、また知人を介して呼びかけた協力者であるため、一般化する際には考慮が必要である。

またインタビューや観察において、先入観や期待を完全に排除することは困難であり、本研究で得られた知見は、現実的というよりはむしろ理想的であるとも考えられよう。

その意味では、このフィールドワークで得られた知見は、ひとまずの到達点、あるいは例示に過ぎない。子どもの食をとらえる手段の検討など、質的研究の方法論の確立は今後の大きな課題である。今後、同様の研究を重ね、反証なども含みながら変遷していくものであると考えている。

第5章 総合考察および今後の展望

第1節 本研究の結果概要

本研究の目的は食を介した親子のやりとりについてその機能と機序を検討することであった。

本研究では、青年期学生を対象とした調査研究と、主に幼児とその母親を対象としたフィールドワークを行なった。調査研究からは、幼少期の食の記憶と現在の食態度の対応、食態度と心理社会的親子関係の関連、弁当の記憶と現在の食態度の関連が示された。また、高校時代よりも、より遠い過去の幼稚園時代の食の経験のほうが、現在の親との心理社会的親子関係に強く影響を及ぼす示唆が得られた。一方、フィールドワークからは、現代の弁当内容の実態、幼児期の弁当を介した親子のやりとりの様子が明らかになった。また、家庭の生活スタイルや親子関係と食行動、社会的発達との関連についても垣間見ることができた。

方法論や研究の方向性についての課題は多く残るが、これらの量的研究、質的研究を合わせることによって、人間の食発達と、食発達と複雑に影響を及ぼし合う親子関係について、多方向からの検討を試みた。以下に、本研究で得られた知見をまとめ、最後に今後の課題と展望について述べる。

第2節 総合考察

1. 食態度と親子関係の関連について

研究Ⅰ、Ⅱより、食経験および食態度と親子関係は互いに関連があることが示され、食事場面は親子関係醸成の場であるとともに、その様子が反映される場でもあると言えるだろう。食態度と親子関係はお互いに独立変数にも従属変数にもなり得ることから、その全体の構造を明らかにすることは簡単なことではない。

親子関係も、食態度も発達段階において到達地点があるわけではない。例えば親子関係は、基本的信頼感を基盤として、その後の経験の積み重ねを通して、徐々に親へのイメージを強固なものにしていくと考えられる。同じように食も体験を積むことによって、その段階で求められるスキルの獲得がなされていく。食態度と親子関係は常に影響を及ぼし合いながら調整・再形成・獲得されるのではないだろうか。

2.食特有の相互作用

昨今の「共食」の推進を受けて、本研究では、食事場면을親子関係形成・自己認知発達場面であると位置づけ、食事場面で形成されたものが、後の子どもの生き方、生活に影響するという立場をとってきた。今回、その裏付けが少なからず示された結果となった。

近年、「共食」、「食育」などの言葉に見られるように、子どもの発達に重要な場面として、食事場面が取り上げられることが多い。また、青木(1999)は家族システム論を援用して、家族の相互作用のあり方を捉える場面としては、家庭での食事場面が最も適当なものの一つであると指摘している。もちろん、食事場面は親子のふれあいの場という意味においては、その他の生活場面の中の一場面に過ぎない。しかしながら、本研究においても、特に幼少期の食経験と親子関係との関連が見られた。ここで、食事場面特有の影響について検討する。

食事はまず、親子の集まる機会となりうる。例えば、食事場面以外の養育行動（寝かしつけ、身支度の世話、入浴など）に比べて食事場面では言語的関与がかなり多くなされているとの報告がある（児玉・水原，1992）。また、平井ら（2003）も、小学生と高校生の親を対象として子どもとよく話す場面について自由記述で回答を求め、小学生・高校生の父母共に6割以上が会話場面として、食事場면을あげている。これに見られるように、まず第一に、現代社会で家族でのやりとりが少なくなっている中、食事が数少ないコミュニケーションの場面になっているという背景がある。言語的やりとりに留まらず、親子のやりとりの機会として、食事時間が一番多く挙げられることを述べている研究もある（総務庁，1995）。この研究では、日本、アメリカ、韓国の3カ国の子どもを持つ親に親子の共同行動について回答させた結果、全ての国で親子の共同行動が高い場面として「食事をする」が挙げられた。食事の場面が、言語的関与、非言語的関与を含め親子のふれ合いの一番多くなされる場所であるとの認識が強いことを示す結果と言えよう。弁当の場合は、食べながら家族と会話する、あるいは共同行動をすることは望めないが、本研究からは、園児とその母親が弁当の内容などに関して多くの会話をしていることが確認できた。また、なにより弁当箱をやりとりすることによって、母親から子どもへは弁当内容とともにそれが作成された背景が、子どもから母親へは母親の作成した弁当に対する反応がやりとりされていたとも言え、親子のコミュニケーションを喚起する広義の意味での家庭の食事であると言える。

また、幼少期だけではなく、青年期に至るまで、家庭の食事は養育者が関与する部分が多い。そのため、子どもは食事によって栄養を取り入れると同時に、「養育者による食事の準備とその分配を受ける」という二者関係を強く感じる場となりうる。そして、その場面で親の自分に対する態度を敏感に感じ取っていると考えられる。

すなわち、子どもは食事場面において、食物の栄養、コミュニケーション、食べさせてもらうという親子関係、親の労力に関する情報などを介して親からの愛情を受け取っ

ていると言えるだろう。このように親と子どもの共食場面は、生理的欲求の充足の場であると同時に、情緒的な交流のなされ得る場であると考えられる。

また、食行動は単に親から子どもへの一方向の作用ではない。例えば、食べ方や発する言葉を含めた食事場面における子どもの行動は、子どもから親へのメッセージを含むものであると考えられる。すなわち、親が子どものために準備したものに対する子どもの評価であると考えられるだろう。具体的な例を挙げれば、親の準備した食事を子どもが食べない時、それは単に、子どもが食事を残したという表面的な問題ではなく、子どものために栄養や好みを考慮して準備したという親の労力を含めて、子どもが拒否したと感ずるのではないだろうか。また、このような経験が、その後の養育者の食事準備行動、子どもに対する接し方にも影響を与える可能性がある。すなわち、子どもの食行動が親の意識や行動に影響を及ぼすと言える。

このような意味で、食事場面は親子が相互に影響を及ぼし合っている場面であると言える。物だけではなく、やり取りが活発であるという点において、食事場面は、人間関係・親子関係に関連の強い、重要な場面であると言えるのではないだろうか。

3.子どもの側から見た食事場面

本研究では過去の食事経験の指標として、弁当の満足度を扱った。弁当は親子で時空間を共にしておらず、必ずしも家族と同じ食物を分かち合うわけではないにも関わらず、特に母子関係形成と関連のあることが示された。このことは、家庭の食事が、これまで家族の食事の役割として言われてきた、「対面することによるコミュニケーションの場」や「文化やマナーの伝承の場」以上の意味合いを持つものであるということを示したと言えるだろう。すなわち、親子の分離状態においても、弁当が間接的なやりとりの場として機能していることが示された。このことから、家庭の食事に求められていることは、ただ単に食事を共に食べる・時空間を共にするだけではなく、子どもが食事を通して、親の食事に対する姿勢を垣間見、親や自分に対する評価を構築していくことであるとも考えられる。そのため、今後子どもの食のありかたを検討する場合には、子どもの評価・満足度をも意識する必要があるだろう。

子どもにとって、家族の食事とは、食事を食べる場面における直接的なやり取り（会話、食べ物をよそう、食べさせる等）だけではなく、用意された食事の内容（どれほど手をかけられているか、自分が他の家族と同じものを準備されているか等）延いては準備の様子などを通して、親の意図、感情、動機を推測し、自分が親にどのように扱われているかを認識する手段の一つと言えるのではないだろうか。特に、幼少期の食を介したやりとりは、「葛藤場面」と表現されることもあるように、食物を滞りなく口に運ぶという面では決してスムーズではなく、親の気持ちを汲み取るというわけにはいかないことも多い。しかしながら、普段何度となく繰り返される食生活の中で、親の自分に対する態度を感じ取り、基本的信頼感を基盤として、親像や自己像が調整・再形成されて

いくのではないだろうか。食事の場面での親から自分への配慮に関する良い経験は養育者への安心感や信頼感を築くと言えよう。その結果が、親への評価や食行動に表れてくるのではないかと考える。これらの経験を繰り返しながら成長し、自分なりの食態度確立へとつながると考える。また、食事を通して得られた安心感や信頼感を基盤として、親や自己への感情の調整を行なっているのが食事場面であると言えるだろう。

言い方を変えると、食事の場面において、たとえ会話が長く、食事が十分に与えられたとしても、それが上辺だけの会話であったり、子どものためを思った食事ではない場合、子どもは親の愛情を確認することができず、親への感情の形成に支障をきたす。それが、子どもの根底の経験、感情として残り、その後の食行動はもとより、危機への対処の仕方や人間関係の築き方にも影響を及ぼすのではないかと考えられる。

問題食と自尊感情の間の負の相関に関する言及が多いことや、摂食障害がしばしば家族全体を治療対象とする家族療法あるいは、特に母子関係への対応として語られることも説明できるだろう。また、本研究で明らかになった、食事の評価と食行動の関連についても、親への感情や自己認知を介在させることで理解することが可能である。

4. 食行動の発達モデルの提示

親子関係と食の関わり、更に時間軸（発達段階）を考える際に、調査ではあまり明確に区別していなかったが、「食事に対する評価や価値観などの意識」と、「実際の食にまつわる行動」は、区別して検討することが有用であることが示唆された。

ここで、仮説ではあるが、食行動の発達のプロセスのモデルを示し、繰り返しになる部分もあるが、親子関係と家庭環境、子どもの食環境について考えを述べたい（Figure5-1）。ここでは子どもの食行動を「子どもが主体的に行なう食行動」と、「与えられた食に対する評価」という二つに分類した。

例えば食事内容や食事文化、親から受けるコミュニケーションの内容や量、しつけなど「与えられた食」について、子どもは評価を行ない、食事がどうあるべきものかという価値観を形成・獲得するとともに、自分が家族にとってどのような存在であるかを感じとり、親子関係を築いていくのではないだろうか。そして、その結果が子どもの食事中の発話や食事への興味、食のスキル獲得、遊び食べ、食べ残しなど「主体的な食行動」に反映されるものと考えられる。また、子どものとった食行動は、親や家庭の食生活のありかた、食に対する価値観へとつながり、その結果が自分や親に対する感情を介して、さらに循環して子どもの食行動に影響を及ぼすと考える。親は子どもの食行動により、子どもの食のスキルや食欲がないなど生理的状态を測り、それに応じて環境を調整していると考えられるだろう。

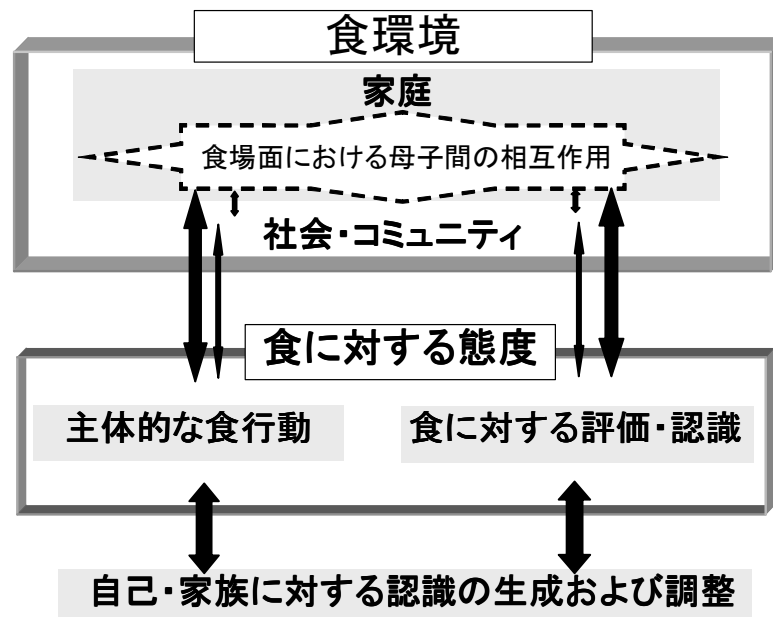


Figure 5-1. 幼少期の食態度発達プロセスのモデル

研究Ⅰ，Ⅱによる，家庭での食生活が親への同一化感情へ影響を及ぼすという結果は，間にその与えられた食に対する評価や価値観形成という要因が介在していると仮定することにより説明可能である。

また，研究Ⅱによる弁当の評価と行動との間に関連のあること，弁当の評価が親への同一化感情に影響を及ぼすという結果，研究Ⅳのインタビューでもたびたび語られた，弁当作りに対する親への依存的で肯定的な態度についても，このモデルで説明することができる。

なお，このモデルは発達段階とともに変化すると考える。発達を経て，食環境のうち，家庭の占める割合が少しずつ縮小し，それに代わり社会やコミュニティの占める割合が少しずつ拡大していくだろう。それに伴い食に対する評価も変化し，主体的な食行動も，嗜好や食物選択の個人差という形で現れるのではないだろうか。また，自己・家族に対する認識に関しても生成というよりむしろ，調整という意味合いが強くなるものと推測する。しかし，基本的な構造は変わらず，食態度は「環境の要因としての家庭」と，「自己・家族に対する認識」と関連がある。そのため，自尊感情と摂食行動・ダイエット行動などとの関連，幼少期の家庭の食生活と現在の食行動に対応があると考えられる。

発達段階を通して，自分を十分な存在として評価し，自らの生きて在ることを受け入れることが，さらに積極的に食事を楽しむ態度につながるのではないだろうか。

第3節 今後の課題と展望

最後に、今後の食態度研究の課題と方向性について述べる。

1. 実際の家庭の食場面の観察の必要性

本研究では、調査に加えて、観察およびインタビューを行ない、食態度と親子関係について検討した。その際、弁当と家庭の食事場面は少なからず対応があるとして、家庭の食事を垣間見る一つのツールとして弁当を位置づけた。しかし、やはり実際の家庭の食事場面を見ることの重要性は変わらない。

例えば、食事場面における親の「もっと食べさせよう」、あるいは「好き嫌いをなく食べさせよう」という親の行動に対して、子どもがそれを受け入れる、あるいは拒むなど、親子関係をより色濃く反映した行動は弁当場面ではなかなか見ることができない。今後は、方法論を十分に考慮した上で、実際の家庭の食事場面に介入することが必要であろう。

2. 個々と体系的な構造を同時にとらえることの必要性

ライフサイクルという視点で統一的に見る、すなわち段階と段階の移行や全体としての大きな流れを検討するという観点は、健康教育への食行動研究の知見の応用などを考慮に入れると、今後の食行動研究に必要であろう。その一方で、個々の段階での食の意味や変化の様子を把握しておくことも欠かせない。今後は、「全体」と「各段階」というマクロとミクロの視点を同時に持ち、関連付けながら研究をすることが課題である。本研究では青年期と幼児期の子どもを対象として研究を行なった。発達段階による食事場面の会話を含むやり取りの重要性の違いや父子関係と母子関係での関連性の違いについては引き続き検討する必要がある。今回対象としなかった、幼児期、青年期以外を対象とした研究を行なうことによって、食態度の段階的検討が可能になると考える。

また、長期的な取り組みとしては、横断的調査だけではなく、共食などの食事場面で子どもの得たものが、どのように子どもの成長に影響を及ぼすのかという視点から縦断的研究が必要とされるだろう。

3. 時代の変化にあった提言の必要性

食生活変遷の原因として、所得の上昇、女性の社会進出による家事の簡便化の必然化、簡便で衛生的な食品の大量の製造、家庭電化製品の普及、生活に対する価値観の変化、高齢者の増加や単身者世帯の増加による家事の簡便化の必然化、個人単位のライフスタイルに対応する食品の進出などが挙げられる。これら時代の変化は「家族で共に食べる、手作りのものを食べる」という方向とは相容れないかもしれない。現代家族の状況下では実際問題として、家族がそろって食事の頻度を増やすことは容易なことではない。また、

昨今は共食推進の風潮があるが、その一方で本当に家族と一緒に食べれば子どもの問題は改善されるのか、家族が自由に食事をする・合理化した食事をとることはいけないと短絡的に結論付けられるのかという議論も出ている(川崎, 2001)。今後はさらに、社会の動向に基づいた食形態・食態度を加味した検討が求められるだろう。

4.学際的なアプローチの必要性

Meiselman(1992)や 今田 (1997) が指摘するように、人の食行動は生理的要因以外の様々な要因によって統制されている。それらの諸要因が複雑に作用を及ぼしあいながら、食行動は発達していると考えられ、食行動を一つの枠組でとらえることは非常に困難である。大きなダイナミクスの中の食をとらえるためには、心理学の主要領域の連関はもとより、教育学、社会学、栄養学などの領域をも柱とするさらなる展開の必要性が感じられる。

食行動研究を実生活に反映させるためには、学際的なアプローチからの理論の構築と検証、そして応用が不可欠であり、今後の課題であると言えるだろう。食を取り囲む複雑なダイナミクスを意識した、役立つ理論の構築が求められている。

引用文献

- 足立己幸. (1981). 家庭での食生活. 足立己幸・秋山房雄(編), *よりよく生きるための食事学*(pp75-118). 東京:有斐閣.
- 足立己幸. (2000). *知っていますか子ども達の食卓*. 東京:NHK 出版.
- 愛染麻水. (2004). 今求められる「食育」私の実践「弁当の日」を通して. *月刊生徒指導*, 7, 22-24.
- Allen, D. E., Patterson, Z. J. & Warren, G. L. (1970). Nutrition, family commensality, and academic performance. *Journal of home economics*, 62, 333-337.
- 青木義子. (1999). 食事と家族. *こころの科学*, 85, 28-33.
- 東洋・柏木恵子・Hess, R. D. (1981). 母親の態度・行動と子どもの知的発達. 東京: 東京大学出版会
- 吾妻ゆみ・大野弘之・稲富宏之・田中悟郎・太田保之. (2002). 女子大学生における食行動の実態とその社会・心理的要因について. *精神医学*, 44, 521-527.
- Birch, L. L. (1980). Effects of peer models' food choices and eating behaviors on preschoolers' food preferences. *Child Development*, 51, 489-496.
- Birch, L. L. & Fisher, J. A. (1996). The role of experience in the development of children' s eating behavior. Capaldi, E. D. (ed.), *Why we eat what we eat: the psychology of eating*(pp.113-141). Washington DC: American Psychological Association.
- Birch, L. L., Zimmerman, S. I. & Hind, H. (1980). The influence of social-affective context on the formation of children' s food preferences. *Child development*, 51, 856-861.
- Black, M. M., Hess, C., & Berenson, H. J. (2000). Toddlers from low-income families have below normal mental, motor, and behavior scores on the Review Bayley

- Scales. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 21, 655-666.
- Bowlby, J. (1951). *Maternal Care and Mental Health. Monograph series 2*. Geneva:WHO.
(黒田実郎 訳 1967 乳幼児の精神衛生. 東京:岩崎学術出版.)
- Breslow, L. & James, E. E. (1980). Persistence of Health Habits and their relationship to mortality. *Preventive medicine*, 9, 469-483.
- Bruch, H. (1973). *Eating Disorder: Obesity, Anorexia Nervosa, and the Person Within*.
New York: Basic Books.
- Bruch, H. (1988). *Conversations with anorexics*. (岡部祥平・溝口純二 訳 1993.
やせ症との対話, 東京:星和書店.)
- Capaldi, E. D. (1996). Why we eat what we eat: *The psychology of eating*. Washington,
D. C.: American Psychological Association.
- Chatoor, I. (1991). Eating and nutritional disorders of infancy and early
childhood. J. Wiener(Eds) *Textbook of child and adolescent
psychiatry*(pp. 351-361). Washington, D. C.: American Psychiatric Press.
- 江田節子. (2006). 幼児の食生活に関する研究—幼稚園児の弁当の実態とその問題点
—. *日本食生活学会誌*, 17, 224-230.
- 江尻桂子. (2002). 発達初期の気質と行動. 内田伸子 (編著) *乳幼児心理学*
(pp. 35-44). 東京:放送大学教育振興会.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. (仁科弥生 (訳) 1977. *幼児期と
社会 I*. 東京:みすず書房.)
- Frank, G. C. (1991). Taking a bite out of eating behavior: Food recorders and
food recalls of children. *The Journal of School Health*, 61, 198-200.
- 福田靖子. (2000). 食生活の機能. 福田靖子 (編), *食生活論*(pp1-4). 東京:朝倉書
店.
- Garner, D. M., & Garfinkel, P. E. (1979). The Eating Attitudes Test: an index of
the symptoms of anorexia nervosa. *Psychological Medicine*, 9, 273-279.
- 針谷順子・足立己幸. (1985). 栄養教育と疾病予防—自分の身体に合った弁当と作る

- セミナーからの問題提起. *学校保健研究* 27, 470-475.
- 長谷川智子. (1996). 幼児期の食行動. 中島義明・今田純雄 (編), *たべる—食行動の心理学—*(pp79-97). 東京:朝倉書店.
- 長谷川智子・今田純雄. (2001). 食物嗜好の発達心理学的研究 第一報: 幼児と大学生における食物嗜好の比較と嗜好の変化の時期. *小児保健研究*, 60, 472-478.
- 長谷川智子・今田純雄・坂井信之. (2001). 食物嗜好の発達心理学的研究 第二報: 食物嗜好理由. *小児保健研究*, 60, 479-487.
- Hetherington, M. M. & Rolls, B. J. (1996). Sensory-Specific Satiety: Theoretical frameworks and central characteristics. Capaldi, E. D. (ed.), *Why we eat what we eat: the psychology of eating*(pp. 267-290). Washington DC: American Psychological Association.
- 平井滋野・岡本祐子. (2001). 食事中の会話からみる家族内コミュニケーションと家族の健康性および心理的結合性の関連の検討. *家族心理学研究*, 15, 125-139.
- 平井滋野・岡本祐子. (2003). 食事場面の会話と親子の心理的結合性の関連. *青年心理学研究*, 15, 33-49.
- 一言英文・松見淳子・大竹恵子. (2005). 日本人大学生の人生満足感に関する探索的検討. *行動科学*, 44, 13-19.
- 池田順子・浅野美登里・木谷輝男・永田久紀. (1991). 高齢者の食品摂取頻度の実態. *栄養学雑誌*, 49, 257-271.
- 生野照子. (2001). 「食」と心の働き. *食の科学*, 277, 22-28.
- 今田純雄. (1997). 食行動研究の過去と現在. *行動科学*, 36, 13-23.
- 今田純雄. (1994). 食行動に関する心理学的研究-3-日本語版 DEBQ 質問紙の標準化. *広島修道大学論文集, 人文編* 34, 281-291.
- 井上祥治. (1992). セルフエスティームの測定法とその応用. 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽 (編), *セルフ・エスティームの心理学*(pp29-31). 京都: ナカニシヤ出版

- 石毛直道. (1995). 文化としての食. 石毛直道 鄭大聲 (編), *食文化入門*(pp1-20).
東京:講談社
- 石毛直道. (1973). *台所文化の比較研究*. 東京:ドメス出版
- 岩城万里子. (2001). (聞き取り調査資料 1) 世界の弁当. 神戸山手大学. *環境文化研究所紀要*, 5, 13-23.
- 岩城万里子. (2002). (聞き取り調査資料 2) 世界の弁当. 神戸山手大学. *環境文化研究所紀要*, 6, 39-45.
- 岩村暢子. (2003). *変わる家族・変わる食卓*. 東京:勁草書房.
- Janis, I. L., &Field, P. F. (1959). The Janis and Field Personality: Feelings of Inadequacy. *Personality and Persuasibility*(pp300-301). New Haven: Yale University Press
- 菅野 純. (2002). 現代家族の食の風景. オタフクソース株式会社, *オコノミッション〜世界はお好み焼きを待っている〜*(pp121-136). 広島:オタフクソース.
- 柏木恵子. (1993). *父親の発達心理学*. 東京:川島書店.
- 片岡あゆみ・奥田豊子・大谷貴美子. (2005). 弁当作りに対する保護者の意識が子どもの食態度におよぼす影響. *大阪教育大学紀要 第II部門*. 54, 11-20.
- 加藤純一. (1991). 共食—その近未来的思考①—. *食の科学*, 164, 46-53.
- 河原紀子. (2004). 食事場面における 1~2 歳児の拒否行動と保育者の対応 : 相互交渉パターンの分析から. *保育学研究*, 42, 112-120.
- 川崎末美. (2001). 食事の質、共食頻度、および食卓の雰囲気が中学生の心の健康に及ぼす影響. *日本家政学会誌*, 52, 923-935.
- 萱村朋子. (2002). 食行動の発達と異常. 萱村俊哉(編), *発達健康心理学* (pp. 153-171). 京都:ナカニシヤ出版.
- 岸田典子・上村芳枝. (1993). 学童の食事中における会話の有無と健康及び食生活との関連. *栄養学雑誌*, 51, 23-30.
- 小林完. (1987). 児童のお弁当百種. 南博(編) *近代庶民生活誌 第六巻*

- (pp219-255). 東京：三一書房
- 小林敬子. (2003). 過去の食に関する環境および体験が現在および未来の食生活に及ぼす影響. *学校保健研究*, 45, 200-217.
- 栗尾修司. (1999). 摂食行動の基礎. *心身医学*, 39, 99-109.
- 黒川衣代・小西史子. (1997). 食事シーンから見た家族凝集性—中学生を対象として— . *家族関係学*, 16, 51-63.
- Logue, A. W. (1991) . *The psychology of eating & drinking: An introduction*. New York: Freeman and Company.
- March, M., & Cohen, P., (1990). Early childhood eating behaviors and adolescent eating disorders. *Journal of American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 29, 112-117.
- 松本晴美. (2000). 山梨県内 3 校の中学生における食行動や食意識に及ぼす食事環境の影響. *家政学会誌*, 51, 489-496.
- Meiselman, H. L. (1992). Methodology and theory in human eating research. *Appetite*, 19, 49-55.
- Meiselman, H. L., Heederley, D., Staddon, S. L., Person, B. J. & Symond, C, R. (1994). Effect of effort on meal acceptability in a student cafeteria, *Appetite*, 23, 43-55.
- Meiselman, H. L., & Macfie, H. J. H. (1996). *Fod choice acceptance and consumption*. London: Blackie Academic & Professional.
- 向井隆代. (1998). 摂食障害. *児童心理学の進歩* 37(pp. 225-246). 東京:金子書房.
- 村田光範. (2005). 食育をめぐって—特集子どもの集団生活と心身の健康—. *小児科臨床*, 58, 589-595.

- 永嶋久美子・坂口早苗・坂口武洋. (2002) 女子学生の偏食行動様式別食習慣および健康習慣の実態. *日本公衆衛生誌*, 49, 447-455.
- 中尾芙美子・宮城重二. (2001). 女子高生の体型、心理状態、食行動、健康行動、健康状態に関する研究. *女子栄養大学紀要*, 32, 73-84.
- 中島義明. (1992). 実験「食心理学」エピソード. *いま実験心理学は*(pp123-167). 東京：誠信書房.
- 中島義明. (1996). 食の人間行動学. 中島義明・今田純雄（編），*たべるー食行動の心理学ー*(pp1-9). 東京：朝倉書店.
- 中澤潤・鍛冶礼子・石井恭子. (1995). 幼稚園教師の食事場面における援助の分析ー子どもの発達と教師の保育観ー. *保育学研究*, 33, 59-67.
- 根ヶ山光一 . (2002). *発達行動学の視座ー〈個〉の自立発達の人間科学的探究*. 東京：金子書房.
- 根ヶ山光一. (1996). 離乳期までの食行動. 中島義明・今田純雄（編），*たべるー食行動の心理学ー*(pp132-145). 東京：朝倉書店.
- 根ヶ山光一・鈴木晶夫(編著) (1995). *子別れの心理学*. 東京：福村出版.
- 野添新一. (1989). 行動科学からみた食. *心身医学*, 29, 286-292.
- 岡本純代. (2005). 見た目もおいしさを左右する. *Biophilia*, 4, 16-21.
- Okon, D. M., Greene, A. L., & Smith, J. E. (2003). Family Interactions Predict Intraindividual Symptom Variation for Adolescents with Bulimia. *International Journal of Eating Disorders*, 34, 450-457.
- 表真美. (1991). 共働き家庭の食生活と家族関係. *家族関係学*, 10, 82-91.
- 尾鍋智子. (2004). 目で食べるお弁当. 栗山茂久・北澤一利（編），*近代日本の身体感覚*(pp165-203). 東京：青弓社.
- Parker, G. (1983). *Parental overprotection: a risk factor in psychosocial*

- development*. New York: Grune & Stratton.
- Parker, G., Tupling, H., & Brown, L. B. (1979). A Parental Bonding Instrument. *British Journal of Medical Psychiatry*, 52, 1-10.
- Peak, L. (1991). Learning to go to school in Japan. *the transition from home to preschool life*. (pp. 60-61). Berkeley: University of California Press.
- Polivy, J., & Herman, C. P. (2002). Causes of eating disorders. *Annual Review of Psychology*, 53, 187-213.
- Pliner, P. (1983). Family resemblance in food preferences. *Journal of nutrition education*, 15, 137-140.
- Rodriguez, D. A. M. (2001). *弁当と日本文化 Bento (lunch box) and Japanese culture*. 国際日本文化研究センター.
- Rozin, P. (1991). Family resemblance in food and other domains: The family paradox and the role of parental congruence. *Appetite*, 16, 93-102.
- Rozin, P. (1996). The socio-cultural context of eating and food choice. In Meiselman, H. L., Meiselman, H. & Macfie, H. J. H. (Eds). *Food choice, acceptance and consumption* (pp. 83-103). London: Blackie academic & professional.
- 斉藤やよい. (1995). ビデオ観察法による食行動に関する研究—観察方法と食事摂取スタイル—. *民族衛生*, 61, 276-284.
- 作花志保. (2004). 弁当箱に“知恵と工夫”を詰める「弁当の日」を設定. *総合教育技術*, 59, 74-77.
- 島田淳子. (1985). *調味の文化的考察*. 東京: ドメス出版.
- 島井哲志. (1998). 食物選択の動機—日本版食物選択質問紙 (FCQ) の作成. *日本心理学会第62回大会論文集*, 1055.
- 島井葉子・安東祥子. (2006). 幼児期における食生活の課題—弁当観察および食事に関する保護者の意識・実態から—. *鳴門教育大学大学教育研究紀要*, 21, 163-170.

- Simons-Morton, B. G., & Baranowski, T. (1991). Observation in assessment of children's Dietary practices. *The Journal of School Health*, 61, 204-207.
- 総務庁青少年対策本部. (1995). 子どもと家族に関する国際比較調査報告書.
- Steptoe, A., Pollard, T. M., & Wardle, J. (1995). Development of a Measure of the Motives Underlying the Selection of Food: the Food Choice Questionnaire. *Appetite*, 25, 267-284.
- Stratton, P. (2003). Contemporary Families as Contexts for Development. In Valsiner, J and Connolly, K. J (Ed). *Handbook of developmental psychology* (pp. 333-357). London: SAGE.
- Striegel-Moore, R. H., Franko, D. L., Thompson, D., Barton, B., Schreiber, G. B. & Daniels, S. R. (2004). Changes in Weight and Body Image over Time in Women with Eating Disorders. *International journal of eating disorders*, 36, 315-327.
- 竹内美香・鈴木晶夫. (2000). 親の養育態度と幼時接触経験. *産能短期大学紀要 50 周年記念特別号*, 171-184.
- 武見ゆかり. (2001). 高齢者における食からみた QOL 指標としての食行動・食態度の積極性尺度の開発. *民族衛生*, 67, 3-27.
- 武見ゆかり・足立己幸. (1997). 独居高齢者の食事の共有状況と食行動・食態度の積極性との関連. *民族衛生*, 63, 90-110.
- 瀧本知憲・西川善之 (編). (2003). *応用栄養学*. 京都: 化学同人.
- 富岡文枝・丸谷美智子・中保彰子. (1997). 食生活における親子のかかわりに関する研究 母親と子供のかかわりについて. *民族衛生*, 63, 14-29.
- 富田拓郎・上里一郎. (1998). 食物選択と食物の嗜好、食物摂取の態度・信念・動機、摂食抑制との関連性について: 実証的展望. *健康心理学研究*, 11, 86-103.

- 富田拓郎・上里一郎. (1999). 新しい“食物選択動機”調査票の作成と信頼性・妥当性の検討. *健康心理学研究*, 12, 17-27.
- 外山紀子. (2008). タイトル. *発達としての共食*(pp131-145). 東京：新曜社
- 外山紀子. (2000). 幼稚園の食事場面における子どもたちのやりとり—社会的意味の検討—. *教育心理学研究*, 48, 192-202.
- 外山紀子. (1990). 食事概念の獲得—小学生から大学生に対する質問調査による検討— . *日本家政学会誌*, 41, 707-714.
- 外山紀子・無藤隆. (1990). 食事場面における幼児と母親の相互交渉. *教育心理学研究*, 38, 395-404.
- Van Strien, T., Frijters, J.E.R., Bergers, G.P.A., & Defares, P. B. (1986). The Dutch Eating Behavior Questionnaire (DEBQ) for assessment of restrained, emotional, and external eating behavior. *International journal of eating disorders*, 5, 295-315.
- 若松秀俊・倉上洋行・大町明香. (2002). 食卓の雰囲気と子どもの積極性. *Health Sciences*, 18, 1-7.
- 渡辺文子. (2000). *母子臨床と世代間伝達*. 東京：金剛出版.
- Westenhoefer, J. & Pudel, V. (1993). Pleasure from food: Importance for food choice and consequences of deliberate restriction. *Appetite*, 20, 246-249.
- Wolke, D., Skuse, D., Relly, S. (2006). The management of infant feeding problems, In P J Cooper & A Stein (Eds.) *Childhood feeding problems and adolescent eating disorders*(pp. 41-91). London;New York:Rouledge.
- 八倉巻和子・村田輝子・盛岡加代・水野清子・大森四都子・高石昌弘. (1995). 乳幼児の食行動発達の縦断的研究—離乳期以降の発達について—. *小児保健研究*, 54, 564-573.

山極寿一. (1994). *家族の起源*. 東京：東京大学出版.

山極寿一. (1997). 食のホミニゼーション. *行動科学*, 36, 25-31.

山口静枝・春木敏・原田昭子. (1996). 母親の食行動パターンと幼児の食教育の関連. *栄養学雑誌*, 54, 87-96.

付表 1

本研究の元となった論文について

研究Ⅰ,研究Ⅱ,研究Ⅳは,以下の論文を加筆・修正したものである。

研究Ⅰ

伊東暁子・竹内美香・鈴木晶夫 (2004) 青年期の食行動と親子関係に関する試行的研究.
ヒューマンサイエンスリサーチ,13, 167-184

研究Ⅱ

伊東暁子・竹内美香・鈴木晶夫 (2007) 幼少期の食事経験が青年期の食習慣および親子関係に及ぼす影響. *健康心理学研究*,20, 21-31.

研究Ⅳ

伊東暁子・竹内美香・鈴木晶夫 (2007) 食事を介した自己および両親に対する評価形成ー幼児の弁当に焦点をあててー.*行動科学*, 46,49-58.

付表 2

Garner & Garfinke (1979) の著者許諾について

Garner & Garfinke (1979) の著者許諾については, Garner の所属する River centre clinic のホームページ上に以下の記述があることから,和訳して使用した。

Reproducing and Using the EAT-26 Test

Although the EAT and EAT-26 tests are copyrighted, all fees and royalties have been waived in order to give others free access to the test. You are granted permission to reproduce the EAT-26 test as long as you identify its original publication source.

<http://www.river-centre.org/abouteat26.html> より

謝辞

本論文作成にあたり、研究にご協力いただいた皆様に深く感謝を申し上げます。学生の皆様、園児達、そのお母さん方、幼稚園の先生方と様々な方々にお世話になりましたが、皆様のご協力なくしては本研究が成り立たなかったことはいうまでもありません。

学部時代から換算して10年目の学生生活となりましたが、これまでの間に多くの方々からご指導・ご鞭撻を賜りました。ここに記して感謝の意を述べたいと思います。

まずはじめに、学部の頃からお世話になっている鈴木晶夫先生に感謝申し上げます。卒業論文の計画の時期に「食」に対する関心をひきだしていただいたことに始まり、今でもその興味は尽きることがなく、何よりのテーマに出会えたと思っております。学位取得という大きな目標をうちたてたものの、力不足かつマイペースであるため、随分とご心配をおかけしてしまいました。しかしながら最後まで興味深いテーマと向き合うことができ、本当に幸せに思っております。先生の懇切丁寧なご指導と絶え間ない励ましのお言葉のおかげで、めげることなく博士論文作成までたどりつくことができました。心から感謝申し上げます。

研究の「楽しさ」を一番強くお教えくださったのは、自由が丘産能短期大学の竹内先生です。先生の研究にかけるエネルギーに圧倒されつつも、手取り足取りのご指導とさりげない励ましのお言葉の威力で、ご一緒した日の帰り道は毎回意欲が沸いてくるのを感じました。

お二人の先生との出会いがなければこの道を目指すことがなかったと思います。今後自分の研究人生において、これまでの経験を何らかの形で活かしていくことができればと思っておりますので、末永くよろしく願い申し上げます。

副査を引き受けてくださった根ヶ山先生と中島先生にも心より御礼申し上げます。

根ヶ山先生には、ゼミに参加させていただいたことをはじめとして、研究会やシンポジウムなどにもご一緒させていただくなど、研究生活を送る上で有意義な機会を幾度となく与えていただきました。不十分な私の研究発表や構想について、率直にご意見くださることが、何よりありがたいことであったと感じております。根ヶ山先生の研究室の皆様にも大変お世話になり、多くの刺激を頂きました。重ねて御礼申し上げます。

中島先生には、直前のお願いにも関わらず、副査を引き受けていただき、感謝申し上げます。先生のお書きになった食関連の文献は先生が早稲田大学においてになる前より拝読しておりましたので、中島先生がおいでになったときには驚きつつ、チャンスがあればいろいろお教えいただきたいと願って参りましたので、このような形で先生からご教授いた

だけですことを大変光栄に思っております。

研究室の皆様は一番身近な相談相手で、私のまとまりきらない話によくお付き合いいただきました。助手さんとしておいでになりご一緒させていただいた高橋先生には研究内容のみならず、分析や発表の仕方までお教えいただきました。卒論作成時よりお世話になり、大学院進学へ大きな影響を与えてくださったのは、上級生の石橋さんでした。日本にきてからわずか数年という身でありながら修士論文を作成された龍さんからは意思の強さを学びました。そして、博士課程最後の三年間をご一緒させていただいた小澤さんと土橋さんには研究はもちろん、それ以外の面でも細やかなお気遣いをいただく一方でしたが、おかげさまで研究室に向かうのがいつも楽しみでした。大学生活をととても豊かなものにしていただいたと感じています。皆様のおかげで今の自分があると思うと感謝の念にたえません。

最後に、幼少期からやりたいことばかりでわがままだった私に付き合い、最後まであらゆる形で応援し続けてくれた両親と妹に心から感謝します。また、博士論文に取り組む中でいつでも励ましとやりがいを感じさせてくれた夫と娘にも心から「ありがとう」。

2008年秋 感謝をこめて

伊東暁子